

熊本県文化財調査報告書119集

城・馬場遺跡第2地点

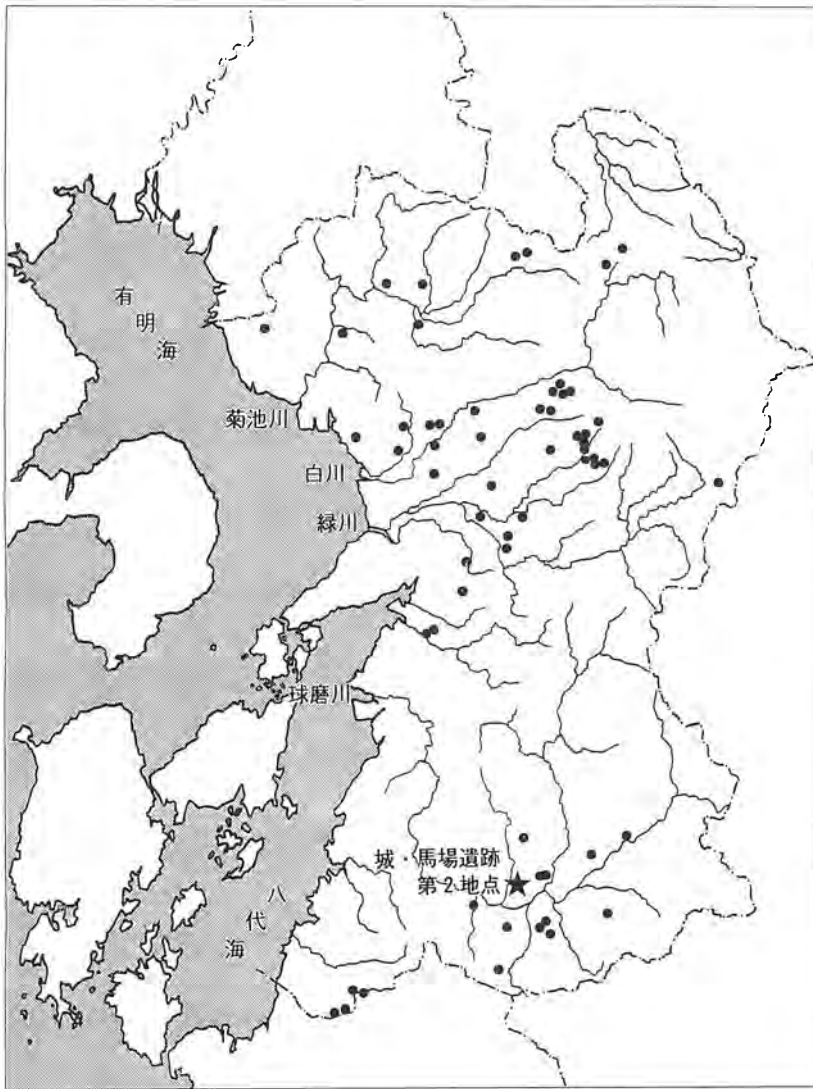
－ 県道人吉相良線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 －

1 9 9 1

熊本県教育委員会

じょう ば ば
城・馬場遺跡第2地点

— 熊本県球磨郡山江村に所在する埋蔵文化財調査報告 —



1 9 9 1

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、県道人吉相良線道路改良事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

ここに報告する城・馬場遺跡第2地点は、熊本県球磨郡山江村大字山田字合戦ヶ峰に所在する遺跡で、平成2年度に発掘調査を実施し、報告書作成を行ったものであります。

この発掘調査では、旧石器時代終末期に属する細石刃石器群や縄文時代早期の多くの資料を得ることができ、この地域の旧石器時代及び縄文文化を考える際の貴重な資料となりました。

この報告書が広く活用され、文化財保護と研究資料の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に際しては、専門調査員の先生方からは多大な御指導・御助言を賜わり、感謝いたしております。また多方面で御配慮いただいた熊本県土木部道路建設課、同人吉土木事務所、山江村教育委員会をはじめ、御協力いただいた関係各位に、心から厚くお礼を申し上げます。

平成3年3月31日

熊本県教育長
佐藤 幸一

例 言

- 1 本書は、平成2年度に熊本県教育委員会が実施した、県道人吉相良線道路改良事業に伴う埋蔵文化財「城・馬場遺跡第2地点」発掘調査の記録である。
- 2 本書に掲載した「城・馬場遺跡第2地点」は、熊本県球磨郡山江村大字山田字合戦ヶ峰に所在する。
- 3 現地調査は平成2年4月より実施し、宮坂孝宏・松舟博満が担当した。
- 4 本書で使用した地図は、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000・1:50,000)をもとに作成した。
- 5 発掘調査での遺物取り上げ作業は、調査担当者が行った。
- 7 遺物の整理作業は、平成2年度に熊本県文化財収蔵庫で行った。
- 8 遺物の実測は、土器を村田百合子が、石器を宮坂が行った。
- 9 遺構及び遺物実測図の製図は、杉井涼子・知名石揚子・村田、田中、金子が行った。
- 10 遺物分布図の作成は、宮坂、杉井、知名石、村田が行った。
- 11 遺物の写真撮影は、村田が行った。
- 12 本書の編集は、熊本県教育委員会が行い、宮坂が担当した。
- 13 出土遺物及び調査に関する記録類は、一括して熊本県教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書に使用した地形図の一部は、熊本県人吉土木事務所から提供を受けたものを基礎にしている。
- 2 遺構の深さは、断りがないものは検出面からの深さである。
- 3 現地での遺構実測は、1/10又は1/20の縮尺で行い、本書収録の際には、1/20、
ている。
- 4 遺物の実測は、1/1で行った。本書収録の際には、石器が1/1、
ている。
- 5 遺構を個別に説明する際用いた「東西南北」については、各々の遺構での任意方向である。

本文目次

序文		1) 細石刃核	
例言		2) 細石刃	
凡例		3) 槍先形尖頭器	
		2 まとめ	15
第I章 調査の概要		第2節 縄文時代早期の遺構と遺物	16
第1節 調査に至る経緯	1	1 遺構	16
第2節 調査の方法と経過	1	2 土器	19
		3 石器	30
		4 まとめ	43
第II章 遺跡の立地と環境		第IV章 総括	
第1節 地理的環境	3	1 旧石器時代	44
第2節 歴史的環境	3	2 縄文時代早期	45
第3節 基本層位	5		
第III章 調査の成果		引用・参考文献	
第1節 旧石器時代の遺物	7	図版	
1 遺物	7		

挿図目次

第1図 グリッド配置図	2	第18図 土器実測図⑥	25
第2図 遺跡分布図	4	第19図 土器実測図⑦	26
第3図 土層柱状図	5	第20図 土器実測図⑧	27
第4図 遺物分布図	8	第21図 土器実測図⑨	28
第5図 細石刃核実測図①	9	第22図 土器実測図⑩	29
第6図 細石刃核実測図②	10	第23図 石器実測図①	31
第7図 細石刃実測図	11	第24図 石器実測図②	32
第8図 細石刃分析図	12	第25図 石器実測図③	33
第9図 槍先形尖頭器実測図	15	第26図 石器実測図④	34
第10図 遺構実測図①	16	第27図 石器実測図⑤	36
第11図 遺構実測図②	17	第28図 石器実測図⑥	37
第12図 遺構実測図③	18	第29図 石器実測図⑦	38
第13図 土器実測図①	20	第30図 石器実測図⑧	39
第14図 土器実測図②	21	第31図 石器実測図⑨	40
第15図 土器実測図③	22	第32図 縄文時代早期遺構配置図	46
第16図 土器実測図④	23		
第17図 土器実測図⑤	24		

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡地名表	6	第 5 表	遺構観察表	16
第 2 表	細石刃核計測表	7	第 6 表	石器計測表①	41
第 3 表	細石刃計測表①	13	第 7 表	石器計測表②	42
第 4 表	細石刃計測表②	14			

図 版 目 次

図版 1	遺構(集石)	図版 12	縄文時代早期の土器⑨
図版 2	旧石器時代の遺物①	図版 13	縄文時代早期の土器⑩
図版 3	旧石器時代の遺物②	図版 14	縄文時代早期の土器⑪
図版 4	縄文時代早期の土器①	図版 15	縄文時代早期の土器⑫
図版 5	縄文時代早期の土器②	図版 16	縄文時代早期の土器⑬
図版 6	縄文時代早期の土器③	図版 17	縄文時代早期の石器①
図版 7	縄文時代早期の土器④	図版 18	縄文時代早期の石器②
図版 8	縄文時代早期の土器⑤	図版 19	縄文時代早期の石器③
図版 9	縄文時代早期の土器⑥	図版 20	縄文時代早期の石器④
図版 10	縄文時代早期の土器⑦	図版 21	縄文時代早期の石器⑤
図版 11	縄文時代早期の土器⑧		

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成元年度、人吉土木事務所より県道人吉相良線改良工事に関する事業計画が示され、熊本県教育委員会は、昭和62年度に隣接地において農地防災事業に伴う城・馬場遺跡の発掘調査を実施しており、当該地においても埋蔵文化財の所在する可能性が高いものと判断し、事前に確認調査の実施が必要である旨通知した。

このことを受け、人吉土木事務所から埋蔵文化財確認調査の依頼が提出され、平成元年度熊本県教育庁文化課文化財保護主事大田幸博により確認調査を実施し、「縄文時代の遺物包含層が検出され、本調査が必要である」との報告がなされた。

これを受けて協議を重ね、平成2年4月より「城・馬場遺跡第2地点」の発掘調査を開始し、同年7月上旬終了した。

本調査は、人吉土木事務所から提示された事業の実施計画を受けて、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について実施した。その目的は埋蔵文化財の破壊に係わる記録保存である。

調査の組織

[平成2年度本調査及び報告書作成]

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 江崎 正（首席教育審議員兼文化課長）
調査総括 隈 昭志（教育審議員兼課長補佐）、桑原憲彰（主幹兼文化財調査第2係長）
本調査担当 宮坂孝宏（文化財保護主事、本調査、報告書）、松舟博満（囑託、本調査）、石工みゆき、溝口真由美（囑託、報告書）、村田百合子（臨時、報告書）
専門調査員 賀川光夫（別府大学教授）、橘 昌信（別府大学教授）、村上豊喜（熊本県立東陵高等学校教諭）、柳田快明（熊本市立高等学校教諭）
調査事務局 中川義孝（課長補佐）、上村忠道（経理係長）、大広美枝子（主任主事）、川上勝美（主任主事）
調査指導及び協力者（順不同）
鶴嶋俊彦、和田好史（人吉市教育委員会）、宮田栄二（鹿児島県教育委員会）、萩原博文（平戸市教育委員会）、堤 隆（御代田町教育委員会）、諏訪 順（小田原市教育委員会）、山下秀樹（京都文化博物館）、新東見一（鹿児島県教育委員会）、長野真一（鹿児島県教育

委員会）、綿貫俊一（大分県教育委員会）、菖蒲和弘（山江村教育委員会）、人吉土木事務所、山江村教育委員会

第2節 調査の方法と経過

県道人吉相良線道路改良事業は、遺跡の立地する中位段丘面の北側を削り、低位段丘面をほぼ東西に走る現道路を拡幅する計画である。その拡幅幅は、約10m程度である。調査区の設定は、任意に行った。

まず、調査区全体の長軸を見通すかたちで杭を設定し基準線とし、それに直行させ5m×5mの区画を設定した。

この区画は、南→北へ0～5、東→西へA～Tとして設定を行った（第1図）。このようにして設定した区画を基本として調査を実施した。

調査の手順と方法は、以下のとおりである。

まず、重機による表土除去を行い、その清掃の後トランシットを利用して5m×5mの区画を設定し、調査区の幅は約8m程度であるため、南北軸は両端に便宜的に杭を設定した。

調査は、遺構の検出と遺物の検出を中心に実施した。

集石遺構は、平面形の確認を行った後に、土層観察のため土手を残し掘り下げた。

柱穴遺構は、平面形の確認を行った後に、約5cm程度掘り下げ柱痕を確認した。その観察後半裁し、土層堆積の観察を行い記録を行った。その記録の後、残りを掘り下げ完掘し、全体像を確認する。

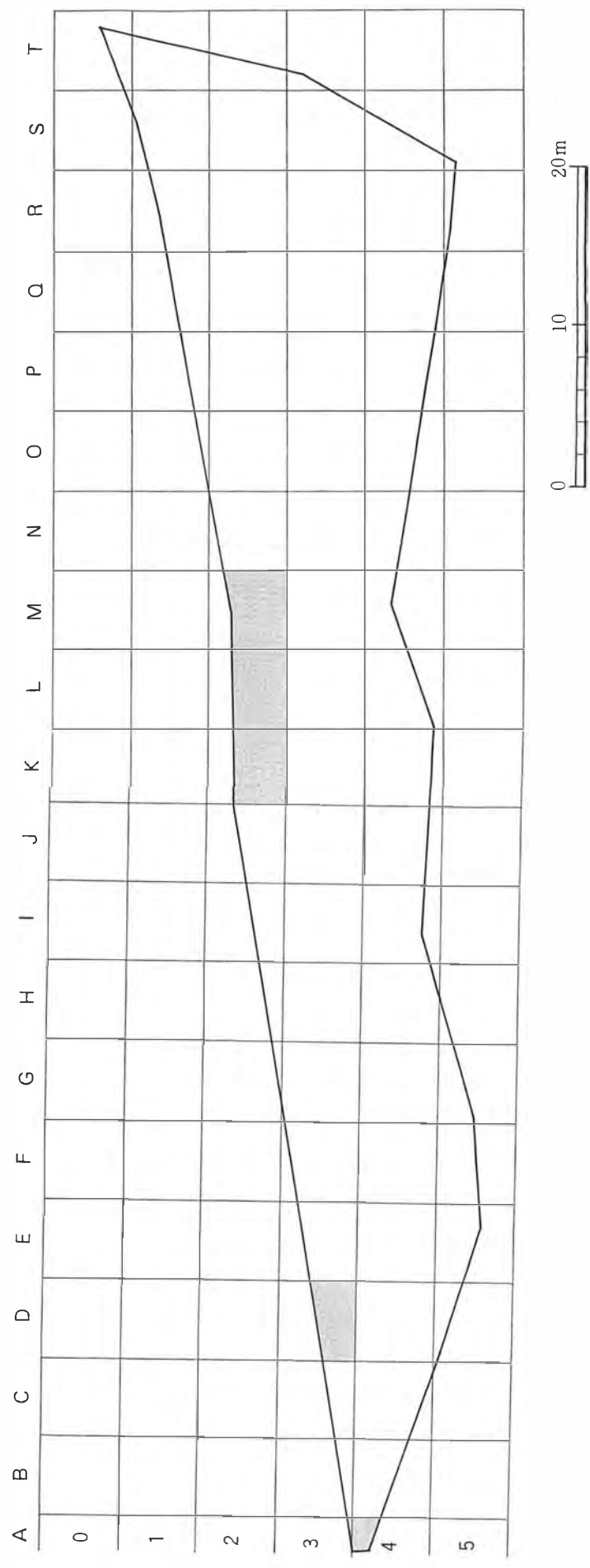
この作業の途中で、検出された柱穴群から建物の復元が可能であるかの検討を行った。

これらの作業の際に作成される資料には、1/10, 1/20に縮尺して作る平面図、土層断面図、断面図などがある。

遺物の検出は、上記した遺構調査の完了後に実施した。検出遺物は、区画別、基本土層別、遺物の種類別に台帳を作成し遺物番号を付した。この台帳に記載する事項には、土器型式、文様、石器器種、石材などがある。

こうした発掘作業のほか、関連遺跡として周辺に分布する遺跡の所在確認調査を実施した。その成果は、第II章第2節の歴史的環境の項に示している。

未調査区



第1図 グリッド配置図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

城・馬場遺跡第2地点の所在する山江村は、熊本県の南東部人吉盆地に位置する。この盆地は、九州山地に挟まれ大きく口を開けた標高100~200mを測る断層盆地である。盆地の中央には、球磨川が東西に貫流する。この球磨川は、人吉盆地を抜けるとその流れを大きく北に変え、蛇行しながら八代（不知火）海に注ぐ全長約115kmの九州でも有数の河川である。また、球磨川の流域面積は、約1,880km²で、熊本県の面積の25%を占めている。支流の数は、実に80本以上を数える県下有数の規模をもつ河川である。

人吉盆地は、この球磨川の流路に沿って存在する沖積地と台地・丘陵に分けられ、その周辺に山地が位置する。

下球磨地方の球磨川南岸は、始良起源の入戸火砕流（シラス）を基盤とする台地・丘陵が分布している。

北岸は、川辺川によって形成された盆地中央部に広がる広大な扇状地と、それ以外の地域の阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵地がある。このように、球磨川の南北両岸では台地・丘陵地の形成過程に差異が認められる。このように人吉盆地の台地・丘陵及び沖積地を取り囲むように山地が広がる。このような環境のなかで、先史時代の人々の生活に欠くことのできない道具である石器の原材料である石材の分布を概観すると、黒曜石は人吉市桑ノ木津留や球磨村白浜林道で産出が確認されている。また、鹿児島県大口市日東及びその周辺にも原産地が分布している。チャートは、人吉盆地の北側の山地に岩脈がみられ、川原や礫層中に転石のかたちで存在し比較的入手は容易である。また、安山岩は、盆地南西の山地に分布する。これらの石器原材料は、すべてそれぞれの支流によって運ばれ、球磨川の川原で転石として入手可能である。

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

現在まで確認されている旧石器時代の遺跡は、人吉・球磨地方で31ヶ所を数える。その多くは、人吉市、山江村を中心とする地域に集中して存在する。しかし、これらの遺跡の中で、狸谷遺跡（木崎 1987）、大丸藤ノ迫遺跡（木崎 1986）、高城遺跡（大田 1986）、鼓ヶ峰遺跡（西住 1987）、天道ヶ尾遺跡（西住 1988）、村

山間谷遺跡（鶴嶋 1988）、血気ヶ峰遺跡等を除けば、すべて表面採集によるものであり、その全体像については不明な部分が多く残されている。このような中で、近年の開発事業に伴う発掘調査の増加等により、A T（シラス）下位の石器群が確認され類例が増加しつつある。狸谷遺跡第I石器文化層、久保遺跡第I石器文化層、血気ヶ峰遺跡第I石器文化層である。この中で、血気ヶ峰遺跡第I石器文化層は、曲野遺跡VI層と対比可能な資料である。

2 縄文時代

城・馬場遺跡第2地点において、早期に属する資料が多量に検出された。早期の遺跡としては、狸谷遺跡、大丸藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡、村山間谷遺跡、石清水遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、益手遺跡、深水谷川遺跡等がある。この中で、狸谷遺跡、大丸藤ノ迫遺跡では塞ノ神式系土器を中心として様々な土器型式が検出された。特に、狸谷遺跡では当該期に属する住居址が検出され、その他の遺構と併せて当時の集落の在り方を考えるうえで貴重な資料を提出している。また、城・馬場遺跡では手向山式土器の壺形土器が検出されている。同遺跡では、検出された当該期の土器型式の中で、手向山式土器の占める割合が高く特徴的である。このように当該地域における早期の遺跡間相互の比較は、時間的な流れあるいは集団間の相違といった様相理解にとって重要な示唆を与えるものであろう。

人吉球磨地方におけるアカホヤ降灰以降、特に前・中期の遺跡は激減する。その中で、鼓ヶ峰遺跡では曾畑式土器、船元式土器が検出され、射場ノ本遺跡では並木式土器が出土している。後・晩期の遺跡としては、中堂遺跡、アンモン山遺跡、天道ヶ尾遺跡、七地水田遺跡等がある。中でも、中堂遺跡は球磨川左岸低地に位置し、石器製作址が確認されている。当該期の集落の選地や様相を理解するうえで重要である。

3 弥生時代

人吉球磨地方の弥生時代は、後期に属する特徴的な免田式土器を出土する遺跡が多くみられる。この免田式土器は、重弧文を施文し頸の長い壺形を呈する特徴的な形態をなす。この土器を出土する遺跡は、30ヶ所余ありその分布域は人吉盆地中央部に集中する。城・馬場遺跡第2地点は、この分布域の西端部に位置する。

また、当該遺跡の周辺は盆地中央部に認められる当該期の大規模な遺跡の存在と違い、大丸藤ノ迫遺跡、荒毛遺跡、合戦ヶ峰遺跡のように小規模である。



第2図 遺跡分布図

4 古墳時代

古墳時代において前方後円墳や円墳の分布域は、人吉盆地中央部に集中する。亀塚古墳群、四塚古墳群、才園四塚古墳群、鬼ノ釜古墳等がそれである。このように、弥生時代後期以降当該地の中心は、人吉盆地中央部に存在するようである。城・馬場遺跡第2地点周辺では、湯の原古墳群、湯免古墳群、東浦古墳群、別府古墳群等のように比較的小規模な墳墓が分布し、当該地域における勢力分布域といった社会構造を示唆するものであろう。また、これらの古墳のほかにアンモン山遺跡では、南九州系の土器を伴った古墳時代後期の住居址が確認されている。荒毛遺跡等では、地下式板石積石室墓が確認され、当該地域の南九州隼人社会との文化的関係性を示す資料として貴重である。

3節 基本土層

今回発掘調査を実施した城・馬場遺跡第2地点は、山田川左岸中段丘面に位置する。当該遺跡においては、アカホヤ火山灰を第Ⅲ層として8枚の土層が確認された(第4図)。

以下、各層ごとに説明を行う。

第Ⅰ層 表土層(耕作土)

層厚は、30~40cmである。

第Ⅱ層 黒褐色土層

粒子は細かく、サラサラとした土質を呈する。層厚は、10~15cmである。

第Ⅲ層 黄褐色火山灰層

アカホヤ火山灰層である。この層は、その土質の違いによって、さらに第Ⅲa層と第Ⅲb層の2枚の垂層に細分できる。

第Ⅲa層は、調査区西端部を除きほぼ全面に堆積が認められる。フカフカとした細かい砂粒のアカホヤ火山灰層である。この層の成因については、大丸藤ノ迫遺跡や狸谷遺跡でも記載されているとおり、アカホヤ火山灰の土壌化した二次堆積層であると考えられる。層厚は、10~15cmである。

第Ⅲb層の堆積とその分布は、第Ⅲa層と同様である。この層は、a層に比べ粒子がやや粗くジャリジャリとした質感を呈する。非常に固くしまった土層で、アカホヤ火山灰の一次堆積と考えられる。層厚は、15~20cmである。A、b両層とも無遺物層である。

第Ⅳ層 暗褐色土層

粒子は細かく、やや粘性を帯びる。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚は、15~20cmである。

第Ⅴ層 黒褐色土層

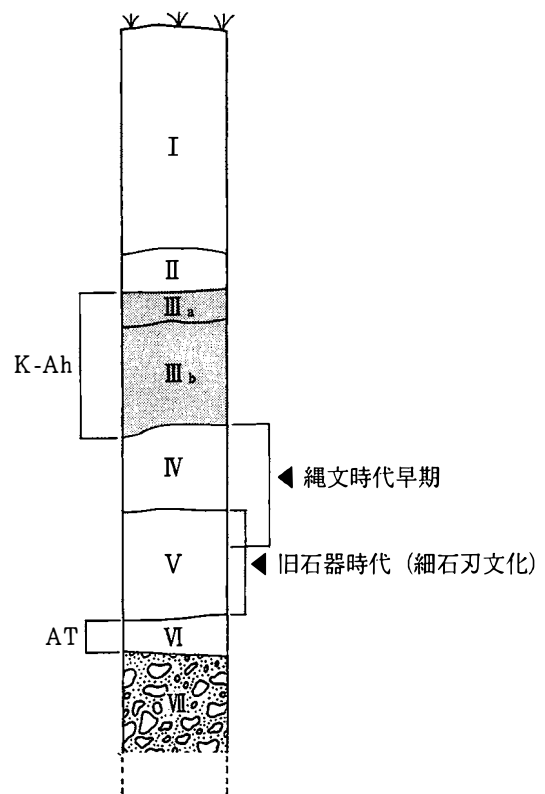
粒子は細かく第Ⅳ層に比べて色調も暗く粘性も強い。また、土層中に5~10mm程度の小礫を含む。縄文時代早期と旧石器時代細石刃文化の遺物包含層である。層厚は、15~20cmである。

第Ⅵ層 暗灰褐色土層

この層は、調査区西端部を除く全域に分布する。粒子は粗く、色調にはやや濁りがある。調査区西端部にはシラスが分布し、シラス(AT)の二次堆積層に相当するものと考えられよう。層厚は、10~15cmである。上位面には、細石刃文化の遺物を包含する。

第Ⅶ層 礫層

砂岩質の拳大の礫を多量に含む。礫層中には、粒子の粗い砂粒を含む。また、上層から下層へ徐々に含まれる礫や砂粒の大きさは小さくなる。遺物等の包含は認められなかった。



第3図 土層柱状図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代
1	城・馬場 1 oc,2	山江村大字山田字合戦峰	旧石器～中世
2	白鳥	山江村大字山田字白鳥	縄文
3	北峰	山江村大字山田字北峰	縄文
4	石坂	山江村大字山田字石坂	縄文
5	一本松	山江村大字山田字一本松	縄文
6	高中	山江村大字山田字高中	縄文
7	寺山	山江村大字山田字寺山	縄文～古代
8	濱谷	山江村大字山田字濱谷	縄文
9	味園A	山江村大字山田字味園	縄文
10	味園B	山江村大字山田字味園	縄文
11	合戦峰A	山江村大字山田字合戦峰	縄文～古代
12	合戦峰B	山江村大字山田字合戦峰	縄文～古代
13	城下	山江村大字山田字城下	弥生
14	本城	山江村大字山田字本城	旧石器～中世
15	長ヶ峰	山江村大字山田字長ヶ峰	縄文
16	堂園	山江村大字山田字堂園	縄文
17	東章鹿倉	山江村大字山田字東章鹿倉	縄文
18	西章鹿倉	山江村大字山田字西章鹿倉	縄文
19	手石方	山江村大字山田字手石方	縄文
20	西永シ切	山江村大字山田字西永シ切	縄文
21	南永シ切	山江村大字山田字南永シ切	縄文
22	北永シ切	山江村大字山田字北永シ切	縄文
23	前畑	山江村大字山田字前畑	縄文
24	穴平	山江村大字山田字穴平	縄文
25	大丸	山江村大字山田字大丸	旧石器～中世
26	新立	山江村大字山田字新立	縄文
27	藤ノ迫	山江村大字山田字藤ノ迫	旧石器～中世
28	屋敷下	山江村大字山田字屋敷下	縄文
29	大王神社跡	山江村大字山田字屋敷下	縄文・中世
30	小山田	山江村大字山田字小山田	縄文
31	炭床	山江村大字山田字炭床	縄文
32	東蓑原	山江村大字山田字東蓑原	縄文
33	西蓑原	山江村大字山田字西蓑原	縄文
34	南蓑原	山江村大字山田字南蓑原	縄文
35	耳取	山江村大字山田字耳取	縄文
36	柴野	山江村大字山田字柴野	縄文
37	上坂野	山江村大字山田字上坂野	縄文・古墳
38	京塚	山江村大字山田字京塚	縄文
39	円蔵	山江村大字山田字円蔵	縄文
40	別府	山江村大字山田字別府	縄文
41	塚原古墳群	山江村大字山田字塚原	縄文・古墳
42	塚原	山江村大字山田字塚原	縄文
43	狐石	山江村大字山田字狐石	縄文
44	中辻	山江村大字山田字中辻	縄文
45	辻	山江村大字山田字辻	縄文
46	中尾	山江村大字万江字中尾	縄文
47	林田	山江村大字山田字林田	縄文
48	上別府	山江村大字万江字上別府	縄文
49	上段	山江村大字万江字上段	縄文
50	湯原	山江村大字山田字湯原	縄文
51	岩ヶ野	山江村大字山田字岩ヶ野	縄文
52	淵ヶ谷	山江村大字山田字淵ヶ谷	縄文
53	新造	山江村大字山田字新造	縄文
54	保石	山江村大字山田字保石	旧石器・縄文
55	東大谷	山江村大字山田字東大谷	縄文
56	油免	山江村大字山田字油免	縄文・古墳
57	平原	山江村大字山田字平原	縄文
58	桐木	山江村大字山田字桐木	縄文・古墳
59	久保内	山江村大字山田字久保内	縄文・古墳
60	庚申	山江村大字山田字庚申	縄文
61	狸谷	山江村大字山田字狸谷	旧石器・縄文
62	中山	山江村大字山田字中山	旧石器・縄文
63	山洪	山江村大字山田字山洪	旧石器・縄文
64	山洪谷	山江村大字山田字山洪谷	縄文

番号	遺跡名	所在地	時代
65	山口	山江村大字山田字山口	縄文
66	カンノ平	山江村大字山田字カンノ平	縄文
67	鍋ノ平	山江村大字山田字鍋ノ平	縄文
68	船尾	山江村大字山田字船尾	縄文
69	段岡A	山江村大字山田字段岡	旧石器・縄文
70	段岡B	山江村大字山田字段岡	旧石器・縄文
71	段岡C	山江村大字山田字段岡	旧石器・縄文
72	段平	山江村大字山田字段平	縄文
73	又ヶ野	山江村大字山田字又ヶ野	縄文
74	中尾	山江村大字山田字中尾	縄文
75	西平原	山江村大字山田字西平原	縄文
76	内角	山江村大字山田字内角	縄文
77	樺木	山江村大字山田字樺木	縄文
78	一丸	山江村大字山田字一丸	縄文
79	上椎屋	山江村大字山田字上椎屋	縄文
80	城内	山江村大字万江字城内	縄文
81	神園	山江村大字万江字神園	縄文
82	丸岡	山江村大字万江字丸岡	縄文
83	平山	山江村大字万江字平山	縄文
84	光永	山江村大字万江字光永	縄文
85	涼松	山江村大字万江字涼松	縄文
86	庚申洞穴	山江村大字山田字庚申	縄文
87	三石	相良村大字柳瀬字三石	縄文・弥生
88	十鳥	相良村大字柳瀬字十鳥	縄文
89	覚井	相良村大字柳瀬字覚井	縄文～中世
90	蓑毛	相良村大字柳瀬字蓑毛	縄文～中世
91	沖原	相良村大字柳瀬字沖原	縄文～中世
92	八田	相良村大字柳瀬字八田	縄文～中世
93	西原	相良村大字川辺字西原	縄文
94	中ノ口	相良村大字柳瀬字中ノ口	弥生
95	人吉ゴルフクラブ	相良村大字柳瀬字十鳥	縄文～中世
96	永谷	相良村大字柳瀬字永谷	縄文
97	一丸	錦町大字西字一丸	縄文
98	上の寺A	人吉市願成寺町上の寺	縄文
99	石清水	人吉市願成寺町上の寺	旧石器・縄文
100	蓬萊ヶ迫	人吉市西間下町蓬萊ヶ迫	縄文
101	奥山入	人吉市合ノ原町奥山入	縄文
102	下山入	人吉市合ノ原町下山入	縄文
103	尾園	人吉市城本町観音堂	縄文
104	永田	人吉市瓦屋町永田	縄文
105	善生院	人吉市鬼木町善生院	縄文
106	杉園	人吉市願成寺町杉園	弥生
107	血気ヶ峰	人吉市鬼木町血気ヶ峰	旧石器
108	南打水	人吉市鬼木町南打水	弥生
109	鼓ヶ峰	人吉市願成寺町鼓ヶ峰	縄文～中世
110	稲荷山	人吉市西間下町蓬萊ヶ迫	縄文
111	捨君畑	人吉市西間下町捨君畑	縄文
112	上の寺B	人吉市願成寺町上の寺	縄文
113	尾丸	人吉市七地町尾丸	縄文・古代
114	赤池原	人吉市七地町赤池原	縄文・古墳
115	南目	人吉市七地町南目	縄文～中世
116	天道ヶ尾	人吉市七地町天道ヶ尾	旧石器～古代
117	花立	人吉市七地町花立	縄文・古墳
118	上の寺C	人吉市願成寺町上の寺	縄文・弥生
119	釜屋	人吉市願成寺町釜屋	縄文
120	里田清明	人吉市七地町里田	縄文・古代
121	七地水田	人吉市七地町迫田	縄文・古代
122	原畑	人吉市七地町原畑	縄文
123	牛塚	人吉市上原町牛塚	縄文
124	村山	人吉市上林町蟹ヶ谷	縄文
125	羽田口	人吉市上原町羽田口	縄文
126	村山開谷	人吉市上林町村山	旧石器・縄文
127	矢黒	人吉市西園・下矢黒	縄文

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 旧石器時代の遺物

1 遺物

当該遺跡において検出された旧石器時代の遺物は、すべて細石刃文化期に属するものである。出土層位は、第Ⅳ～Ⅵ層上部であり、その中心は第Ⅴ層中位面から第Ⅵ層にかけて存在する。

しかし、その出土状況は後続する縄文時代早期の遺物と混在するため、両時期の石材利用の在り方から細石刃核及び細石刃以外の石器類について、具体的に時期区分を行うことは困難である。

そのため、当該期に所属する資料としては、第5図～第7図・第9図に図示した細石刃核23点、細石刃75点、槍先形尖頭器2点にとどめ、その他の石器については縄文時代早期の項で一括して報告を行う。

以下、器種ごとに説明を行う。

1) 細石刃核 (第5図1～第6図23)

出土した細石刃核は、すべて黒曜石製である。これらの石器は、側面か背面、底面に素材となった原石の礫面あるいは転礫面を有す共通した特徴をもつ。

また、透明度が高く鉛色～漆黒色を呈する良質の石材が利用され、礫面の性状が類似することから、同一の産地によるものと考えられ、その石質の特徴により

桑ノ木津留を原産地とするものと推定される。

これらの細石刃核は、打面部に調整を施し背面に傾斜する共通した形態的特徴をもつ。このことから、野岳・休場型細石刃核の技術的範疇に入るものと考えられる。

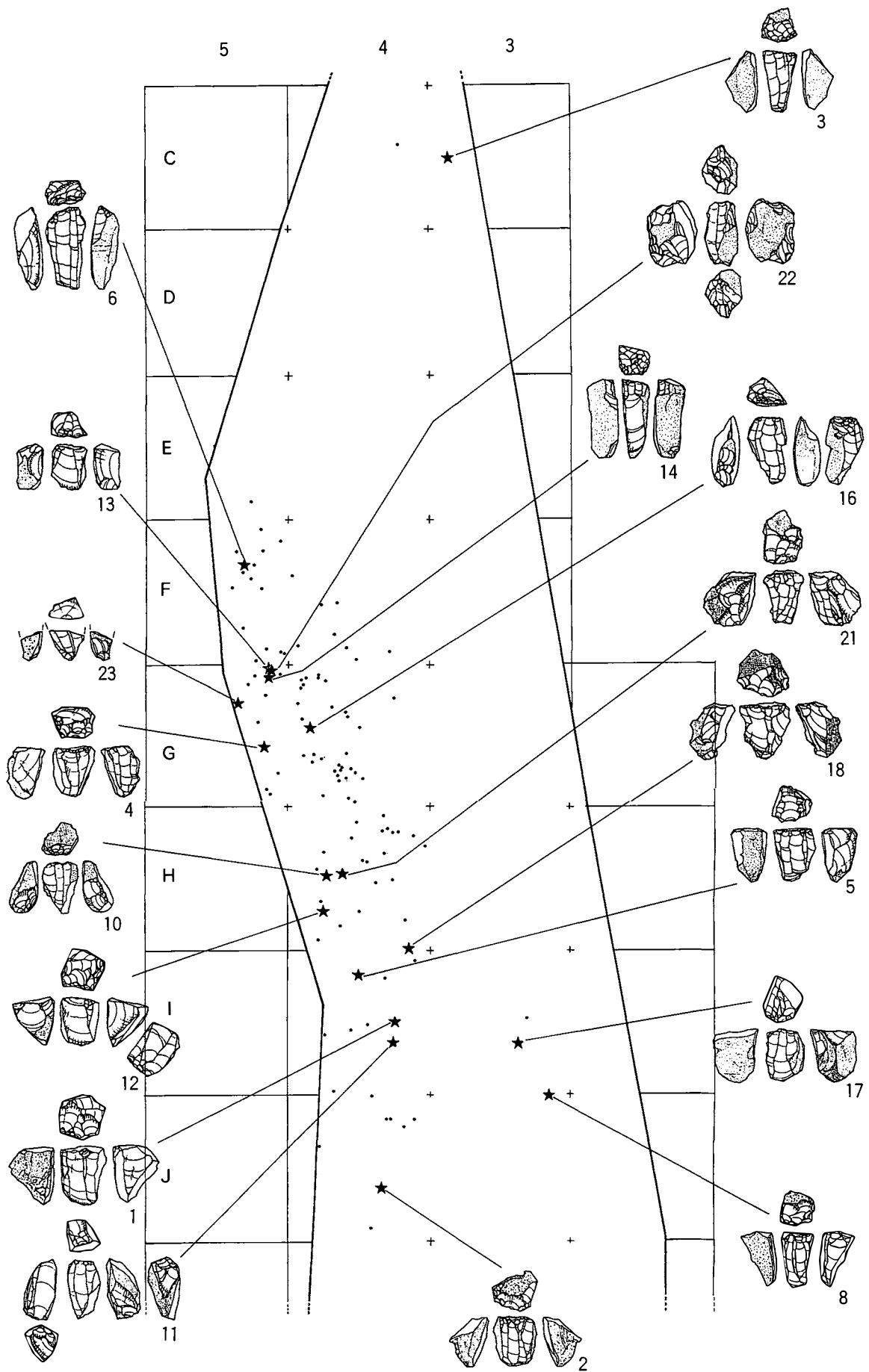
正面形は、逆台形を呈するものが多いがバリエーションが認められ、作業面幅が狭く高さのあるA類(3, 6, 8, 11, 14～16, 20)と作業面幅に比べて高さの低いずんぐりとした体型をするB類(1, 2, 4, 5, 7, 9, 10, 12, 13, 17～19, 21, 22)に区分される。A類は、比較的打面の奥行がなく扁平である。このように、作業面の高さによる差異は認められるものの、作業面幅は全資料を通じて概ね1～1.2cmで安定している。

また、作業面に残る剥離痕から剥出された細石刃の幅は、0.5cm前後でまとまり、さほどの差はない。このことから、二者の形態的差異は、獲得された原材料の形状的特徴を反映するものと考えられる。これらの中には、打面が上下2面に認められるもの(11, 20)や、打面を新たに作業面として転移するもの(12)もみられる。

打面と作業面との角度は、A類で60度前後に、B類

第2表 細石刃核計測表

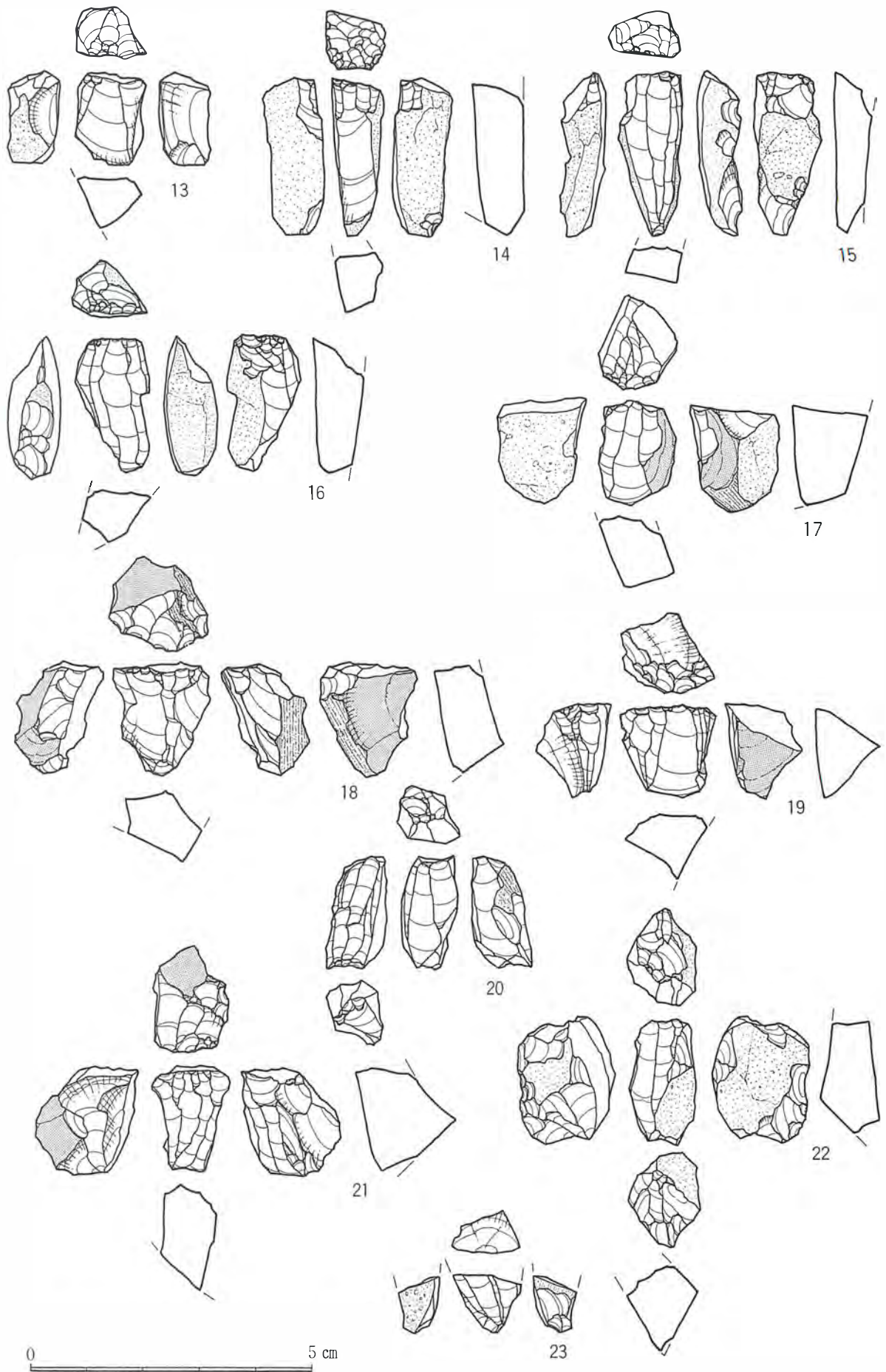
No.	器種	石材	計測値		奥行(cm)	重さ(g)	打角	登録番号
			高さ(cm)	幅(cm)				
1	細石刃核	黒曜石	1.95	1.60	1.55	4.7	81	I-4 2382
2	〃	〃	1.70	1.55	1.45	3.1	74	J-4 3003
3	〃	〃	2.15	1.15	1.20	2.1	53	C-3 824
4	〃	〃	1.70	1.40	1.15	3.1	84	G-5 1422
5	〃	〃	1.80	1.45	1.30	3.0	85	I-4 3553
6	〃	〃	2.80	1.40	0.85	3.3	57	F-5 393
7	〃	〃	1.60	1.45	1.15	1.9	67	P-3 3877
8	〃	〃	1.90	1.15	1.20	2.0	86	I-3 3204
9	〃	〃	1.90	1.25	1.10	2.6	74	SB01 覆土
10	〃	〃	1.80	1.25	1.15	1.9	81	H-4 897
11	〃	〃	2.05	1.15	1.10	3.1	70	I-4 1075
12	〃	〃	1.70	1.35	1.45	3.4	78	H-4 3574
13	〃	〃	1.50	1.20	0.90	1.9	77	G-5 1398
14	〃	〃	2.70	0.90	1.00	2.7	81	G-5 1399
15	〃	〃	2.80	1.10	0.80	2.6	59	N-3 2468
16	〃	〃	2.35	1.30	1.00	2.1	55	G-5 1498
17	〃	〃	1.80	1.30	1.60	3.5	77	I-3 3305
18	〃	〃	1.90	1.70	1.65	3.5	75	I-4 2758
19	〃	〃	1.60	1.65	1.40	2.4	70	一括
20	〃	〃	1.95	1.00	1.05	2.0	63	SB01 覆土
21	〃	〃	1.75	1.40	1.80	3.8	64	H-4 1589
22	〃	〃	2.20	1.20	1.70	4.1	83	G-5 875
23	〃	〃	(1.10)	(1.20)	(0.75)	0.7	---	G-5 1397



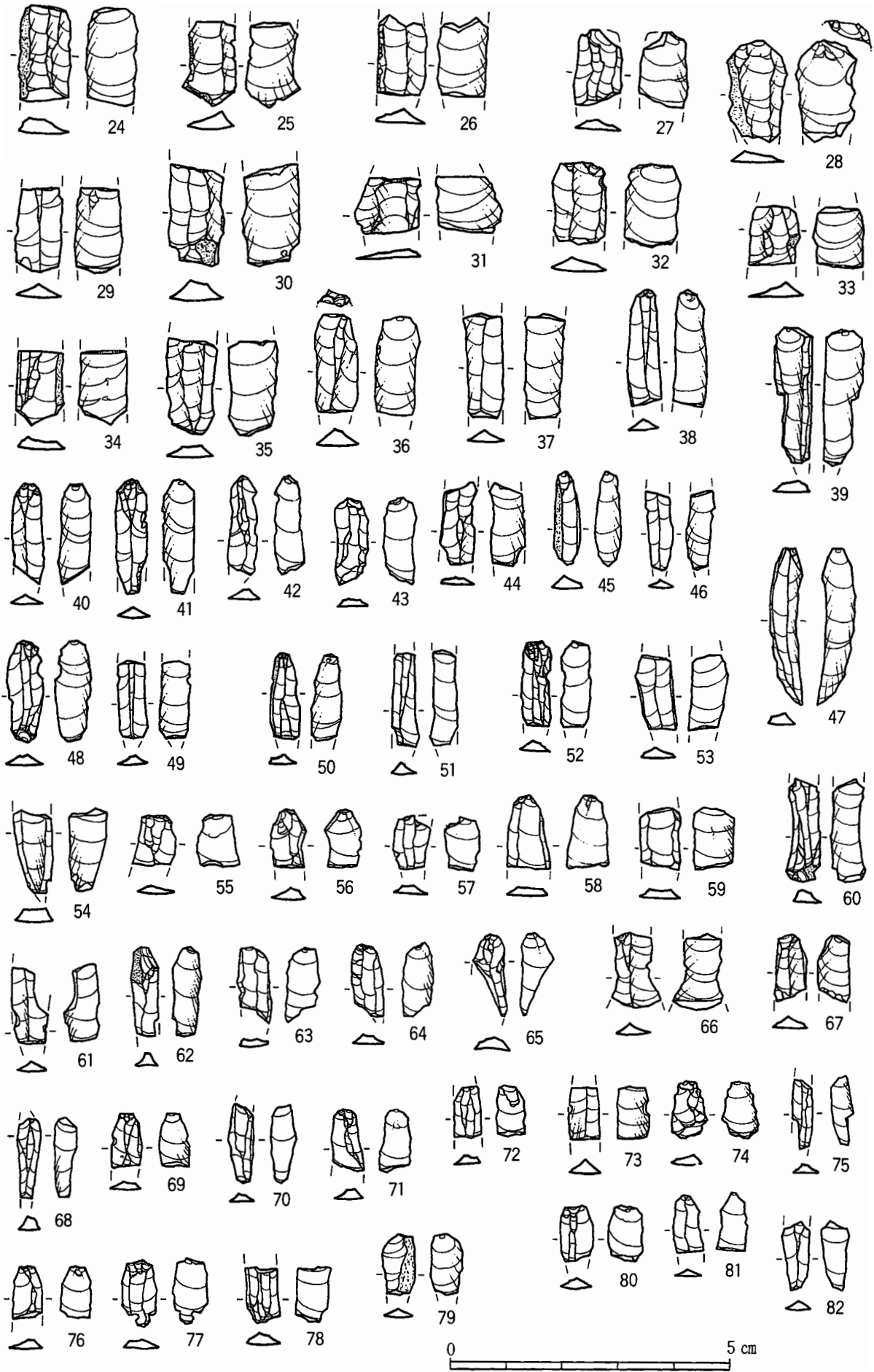
第4圖 遺物分布圖



第5図 細石刃核実測図①



第6図 細石刃核実測図②



第7図 細石刃実測図

で80度前後にまとまる。このことは、打面の奥行き
の短いA類と長いB類との差として認識される。この
ことから、当該遺跡において検出された細石刃核は、形
態的バリエーションは認められるものの、剥出され
ている細石刃の長さに関する規格の差以外相違点は認
められない。

2) 細石刃 (第7図24~82)

細石刃は115点検出され、すべて黒曜石製である。
これらの中には、背面に一部礫面を有するものも認め
られる。このことは、細石刃剥離工程の比較的初期の
段階の所産であると考えられる。

細石刃の残存部位では、頭部~中間部あるいは中間
部が、最も多く65.2%を占める。完形の比率は11.3%
で、頭部7.0%、尾部4.3%とともに低い。このことは、
逆に折り取りがなされるものの比率が88.7%と高いこ
とを示している。

これらの資料は前述したように完形が少なく、その
形態に関して長幅比の分析が意味をもたない。そこで、
幅の頻度分布を分析することで、検出されている細石
刃核の剥離痕の形状との比較検討を行う。第8図②に

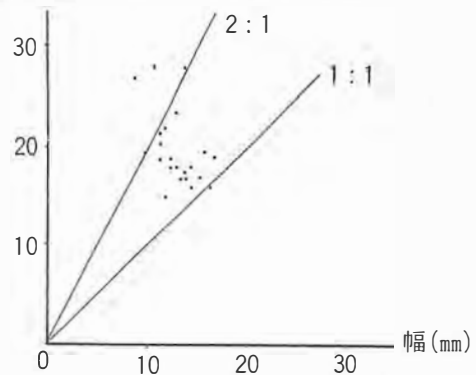
示したように、細石刃の幅では大きく2つのピークが
認められる。1つは0.31~0.70cmにまとまり81.7%、
もう1つは0.71~1.00cmで17.4%である。前者は、細
石刃核の剥離痕観察から類推された数値にはほぼ合致す
るが、後者については大きい。

全資料の幅の平均値は、0.59cmであるが、それぞれ
のピークごとに平均値を求めると、前者が0.52cm、後
者が0.87cmとなる。また、それぞれの背面に観察され
る剥離面の数は、2~4面で複数の稜が観察される点
ではほぼ共通した状況が看取されるが、前者の中には
稜が1本のみのものが認められる。稜と稜との間隔は、
前者では狭く、後者では広い。このことから、両者は、
剥離作業の進行の過程による差異ではなく、細石刃核
の大きさといった形態的な差から生じる相違点である
可能性が指摘できよう。しかし、後者の剥離作業を類
推する細石刃核資料は検出されておらず、詳細につい
ては不明である。

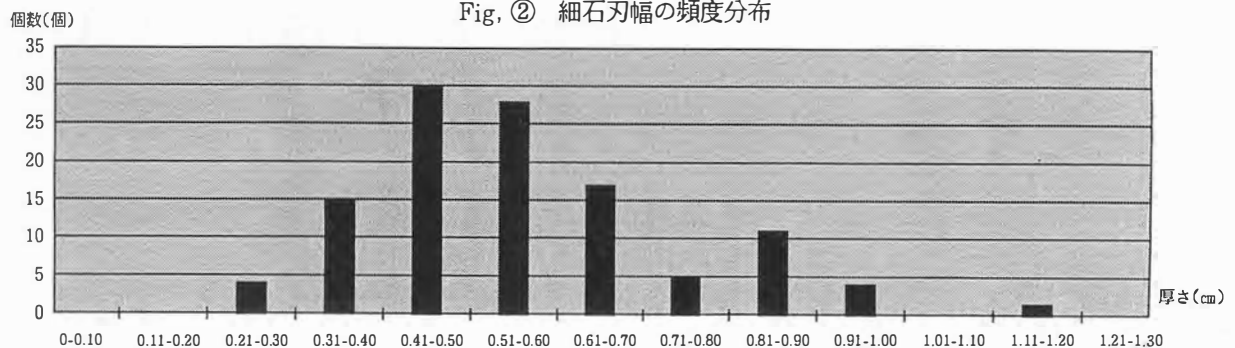
Fig, ① 細石刃の残存部位



高さ (mm) Fig, ③ 細石刃核の高幅比



Fig, ② 細石刃幅の頻度分布



第8図 細石刃分析図

第3表 細石刃計測表①

No.	器種	石材	計測値				部位	登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
24	細石刃	黒曜石	1.65	0.95	0.30	0.5	頭部	351
25	〃	〃	1.50	0.95	0.30	0.3	尾部	1343
26	〃	〃	1.35	0.90	0.25	0.3	中間部	3616
27	〃	〃	1.30	0.85	0.15	0.2	頭部	1367
28	〃	〃	1.80	1.00	0.20	0.5	頭～中間部	1600
29	〃	〃	1.50	0.85	0.25	0.3	中間部	3607
30	〃	〃	1.75	0.90	0.20	0.2	中間部	1440
31	〃	〃	0.95	1.20	0.15	0.2	中間部	1388
32	〃	〃	1.45	1.00	0.20	0.3	頭～中間部	1574
33	〃	〃	1.10	0.90	0.30	0.3	中間部	3605
34	〃	〃	1.30	0.90	0.20	0.2	中間部	3671
35	〃	〃	1.65	0.90	0.20	0.3	中間～尾部	一括
36	〃	〃	1.75	0.75	0.30	0.4	頭～中間部	1465
37	〃	〃	1.85	0.65	0.20	0.2	中間部	3643
38	〃	〃	2.00	0.60	0.20	0.2	頭～中間部	3099
39	〃	〃	2.40	0.65	0.20	0.3	頭～中間部	1314
40	〃	〃	1.75	0.55	0.20	0.1	頭～中間部	1532
41	〃	〃	2.00	0.60	0.20	0.2	頭～中間部	3205
42	〃	〃	1.75	0.50	0.20	0.1	頭～中間部	1381
43	〃	〃	1.55	0.60	0.15	0.1	頭～中間部	3545
44	〃	〃	1.85	0.60	0.15	0.1	中間部	1390
45	〃	〃	1.65	0.50	0.25	0.1	完形	898
46	〃	〃	1.45	0.40	0.15	0.1	中間部	1533
47	〃	〃	2.30	0.55	0.20	0.3	完形	3622
48	〃	〃	1.80	0.65	0.20	0.2	完形	1370
49	〃	〃	1.35	0.50	0.15	0.1	中間部	1311
50	〃	〃	1.60	0.50	0.15	0.1	頭～中間部	3627
51	〃	〃	1.65	0.40	0.20	0.1	中間部	1470
52	〃	〃	1.45	0.50	0.20	0.1	頭～中間部	1525
53	〃	〃	1.35	0.65	0.20	0.1	中間部	3530
54	〃	〃	1.45	0.70	0.25	0.2	中間～尾部	854
55	〃	〃	0.90	0.70	0.10	0.1	頭部	一括
56	〃	〃	1.05	0.65	0.20	0.2	頭～中間部	1576
57	〃	〃	0.90	0.55	0.15	0.1	頭～中間部	一括
58	〃	〃	1.30	0.80	0.10	0.1	頭～中間部	3556
59	〃	〃	1.10	0.70	0.20	0.1	中間部	1563
60	〃	〃	1.80	0.55	0.20	0.2	中間～尾部	1540
61	〃	〃	1.40	0.60	0.20	0.1	中間部	920
62	〃	〃	1.60	0.50	0.25	0.2	頭～中間部	1556
63	〃	〃	1.35	0.65	0.15	0.1	頭～中間部	一括
64	〃	〃	1.30	0.55	0.15	0.1	頭～中間部	1461
65	〃	〃	1.45	0.55	0.20	0.1	頭～中間部	一括
66	〃	〃	1.30	0.85	0.20	0.2	中間部	1562
67	〃	〃	1.20	0.50	0.20	0.1	頭～中間部	1330
68	〃	〃	1.40	0.40	0.25	0.1	中間部	971
69	〃	〃	0.95	0.55	0.15	0.1	頭～中間部	883
70	〃	〃	1.40	0.45	0.15	0.1	中間～尾部	1480
71	〃	〃	1.10	0.55	0.20	0.1	頭～中間部	1301
72	〃	〃	0.90	0.50	0.15	0.1	頭～中間部	1475
73	〃	〃	0.90	0.55	0.25	0.1	中間部	854-2
74	〃	〃	1.05	0.60	0.20	0.1	完形	1486
75	〃	〃	1.25	0.40	0.15	0.1	中間部	3688
76	〃	〃	0.95	0.55	0.20	0.1	頭～中間部	3531
77	〃	〃	1.20	0.60	0.15	0.1	完形	1400
78	〃	〃	1.00	0.55	0.20	0.1	中間～尾部	1575
79	〃	〃	1.10	0.60	0.15	0.1	頭～中間部	3621
80	〃	〃	0.95	0.60	0.20	0.1	頭～中間部	394
81	〃	〃	1.05	0.50	0.10	0.1	頭～中間部	3636
82	〃	〃	1.25	0.45	0.15	0.1	中間～尾部	一括

第4表 細石刃計測表② (未掲載)

No.	器種	石材	計測値				部位	登録番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
B-1	細石刃	黒曜石	1.35	0.60	0.20	0.2	完形	1570
B-2	〃	〃	1.15	0.65	0.15	0.2	中間部	3585
B-3	〃	〃	1.30	0.55	0.15	0.1	頭～中間部	3702
B-4	〃	〃	1.05	0.45	0.10	0.1	尾部	1511
B-5	〃	〃	1.55	0.85	0.25	0.2	頭～中間部	896
B-6	〃	〃	1.30	0.55	0.20	0.2	完形	1307
B-7	〃	〃	1.20	0.50	0.25	0.2	中間部	1521
B-8	〃	〃	1.30	0.85	0.20	0.2	中間～尾部	1588
B-9	〃	〃	1.05	0.70	0.15	0.2	中間部	3631
B-10	〃	〃	1.60	0.50	0.20	0.2	完形	3699
B-11	〃	〃	1.35	0.80	0.25	0.3	頭部	870
B-12	〃	〃	1.60	0.40	0.20	0.1	頭～中間部	2727
B-13	〃	〃	0.90	0.40	0.10	0.1	中間部	709
B-14	〃	〃	1.15	0.40	0.20	0.1	頭～中間部	3132
B-15	〃	〃	0.85	0.45	0.10	0.1	中間部	1489
B-16	〃	〃	1.05	0.50	0.15	0.1	頭～中間部	379
B-17	〃	〃	0.95	0.45	0.20	0.1	頭～中間部	1493
B-18	〃	〃	1.45	0.65	0.10	0.1	中間～尾部	1622
B-19	〃	〃	1.00	0.45	0.10	0.1	頭～中間部	2761
B-20	〃	〃	1.10	0.45	0.15	0.1	中間～尾部	1681
B-21	〃	〃	0.70	0.35	0.10	0.1	頭部	1345
B-22	〃	〃	1.15	0.35	0.10	0.1	中間～尾部	3509
B-23	〃	〃	0.95	0.40	0.10	0.1	中間部	866
B-24	〃	〃	1.05	0.65	0.20	0.2	中間～尾部	1306
B-25	〃	〃	1.40	0.50	0.10	0.1	頭～中間部	3667
B-26	〃	〃	1.25	0.75	0.25	0.3	完形	3687
B-27	〃	〃	1.05	0.30	0.10	0.1	中間部	3551
B-28	〃	〃	0.75	0.45	0.10	0.1	頭部	1509
B-29	〃	〃	1.15	0.70	0.15	0.1	完形	2780
B-30	〃	〃	1.15	0.35	0.10	0.1	頭～中間部	838
B-31	〃	〃	0.55	0.50	0.10	0.1	中間部	4069
B-32	〃	〃	0.85	0.30	0.10	0.1	中間～尾部	723
B-33	〃	〃	0.65	0.35	0.10	0.1	中間部	1671
B-34	〃	〃	0.70	0.45	0.15	0.1	尾部	3606
B-35	〃	〃	0.90	0.45	0.10	0.1	完形	1582
B-36	〃	〃	0.70	0.50	0.10	0.1	頭～中間部	3135
B-37	〃	〃	1.10	0.90	0.25	0.3	中間部	1606
B-38	〃	〃	0.80	0.45	0.15	0.1	尾部	811
B-39	〃	〃	1.30	0.65	0.10	0.1	完形	3298
B-40	〃	〃	0.70	0.30	0.10	0.1	頭～中間部	一括
B-41	〃	〃	1.25	0.25	0.10	0.1	中間～尾部	1484
B-42	〃	〃	0.85	0.70	0.15	0.1	中間部	1485
B-43	〃	〃	1.15	0.55	0.10	0.1	頭～中間部	1664
B-44	〃	〃	1.00	0.75	0.10	0.1	頭部	1387
B-45	〃	〃	0.80	0.55	0.15	0.1	中間部	1441
B-46	〃	〃	0.80	0.40	0.15	0.1	尾部	一括
B-47	〃	〃	1.05	0.40	0.10	0.1	頭～中間部	1534
B-48	〃	〃	1.20	0.60	0.20	0.2	頭～中間部	1173
B-49	〃	〃	0.95	0.50	0.10	0.1	頭～中間部	2841
B-50	〃	〃	1.35	0.45	0.10	0.1	頭～中間部	1492
B-51	〃	〃	1.25	0.60	0.10	0.1	中間～尾部	3854
B-52	〃	〃	0.75	0.50	0.10	0.1	頭部	4067
B-53	〃	〃	1.10	0.40	0.10	0.1	頭～中間部	1543
B-54	〃	〃	1.10	0.45	0.10	0.1	中間部	1676
B-55	〃	〃	0.75	0.55	0.10	0.1	中間部	1352
B-56	〃	〃	1.70	0.65	0.10	0.1	完形	3628

3) 槍先形尖頭器 (第9図83~84)

槍先形尖頭器として分類できる資料は、2点確認された。これらの資料は、すべて先端部を欠失し基部のみであり全体の形状は不明である。石材は、黒曜石1点とチャート1点である。両者とも表裏両面に素材剥片の剥離面を大きく残し、縁辺に細かな調整加工が施される。このことから打面を固定せず、頻繁に転移を繰り返す石核から剥離される幅広剥片を素材としていることが理解される。83は、幅広で84に比べ大きい。これに対して84は、細長い形状で左側縁の表裏面に足長い小剥離による調整を施すことで断面凸レンズ状に作り上げている。

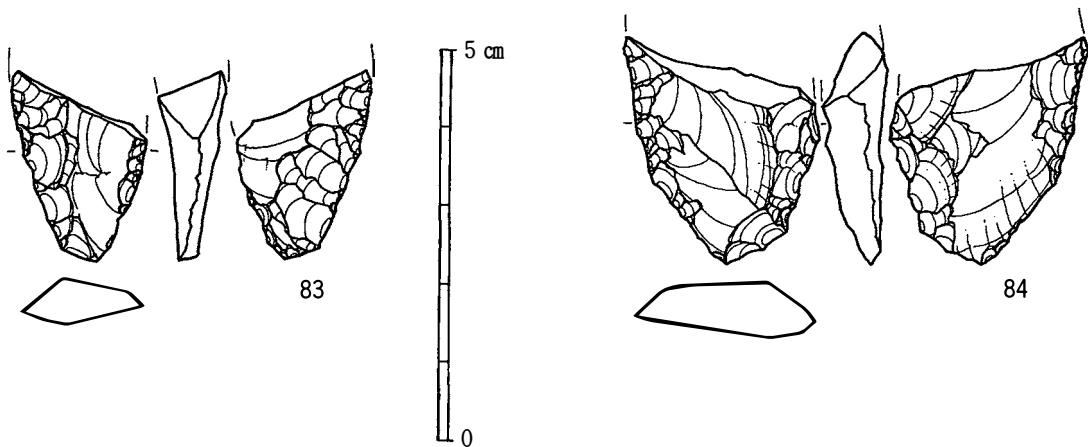
形状的に最も類似する石鏃とは、幅及び厚さ、重量といった点で大きく相違し、別器種として分類を行った。

4) まとめ

当該期に属する資料は、細石刃核23点、細石刃115点、槍先形尖頭器2点である。このことについては、前述したとおり後続する縄文時代早期の遺物と空間的に重なり、また層位的にも一部重複するためその他の石器については区分せず縄文時代に含めて報告を行った。そのため、当該期に属する全資料の組成については検討することができなかった。遺物の分布は、調査区の東側に集中する。細石刃核の形態的特徴について

は、次の点が指摘できる。①打面調整を有し、背面側に傾斜する共通点が認められる。②作業面の幅が狭いものと広いものとの二者が存在する。③側面調整を施すものは認められない。④左右両側面及び背面に礫面あるいは転礫面をもつものが多い。⑤小亜角礫を素材として利用する。⑥石材は、桑ノ木津留産黒曜石を利用している。

このことから野岳・休場型細石刃核の技術的範疇に含まれるものと理解されよう。また、細石刃核の作業面に残る剥離痕からは、細石刃の幅に大きな差異は認められず、細石刃核の作業面の高さの違いからくる長さの差異が存在するのみである。しかし、細石刃の幅には、細石刃核の作業面観察で得られたデータと合致するものが大半で全体の81.7%であるが、18.3%の幅の広い細石刃が認められる。後者の背面には、複数の先行する剥離痕が観察できることから、剥離を行った細石刃核は当該遺跡あるいは調査地点に残されなかった可能性も指摘できる。つまり、作業面の幅が広い所謂「位牌塔型細石刃核」が存在した可能性も考えられよう。また、縄文時代早期の土器に関する観察結果から、草創期に属する土器資料は確認されなかった。これらの点を含めて、今後、当該資料の時間的位置づけがなされるべきであると考えられる。



第9図 槍先形尖頭器実測図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

縄文時代早期に属する遺構としては、集石遺構10基、土坑1基が確認されている。その分布は、第32図に示したとおりである。その在り方は、調査区の東西に2つのまとまりとして認識される。このまとまりは、後述する土器型式ごとのまとまりとほぼ合致した状況を呈する。検出された遺構の多くは集石遺構であり、すべて土坑の掘り込みをもち礫を充填するものである。遺構を構成する礫は、拳大の破碎礫で共通した状況が確認されたが、その数の多寡には差異が認められる。

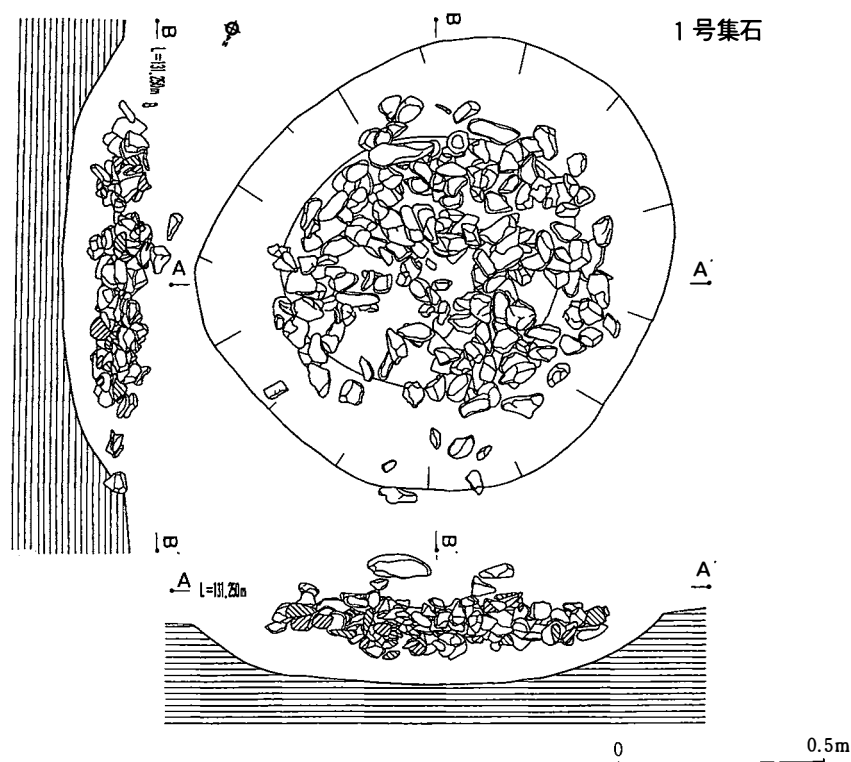
特に、西側に集中する遺構群では構成する礫が少なく、散乱した状況が窺える。また、土坑の床面上に大型の礫を配する石組炉は検出されていない。

この外、厚みのある大型の剥片を多量に包含する土坑が1基検出されている。石材は、チャートである。これらの石器類には、二次加工の認められるものはほとんどなく、1点のみスクレイパー(第25図27)が含まれている。接合関係は、確認されなかった。このことから、原石を粗割し、遺跡内に持ち込まれ土坑内に埋納されたものと考えられる。

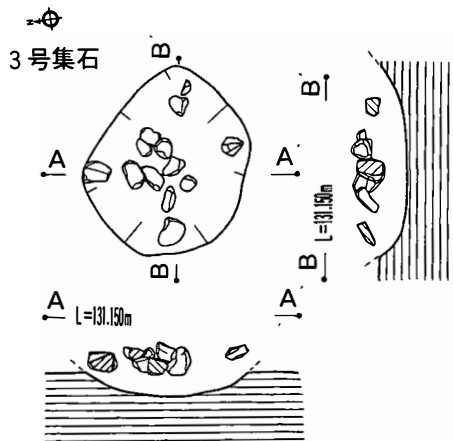
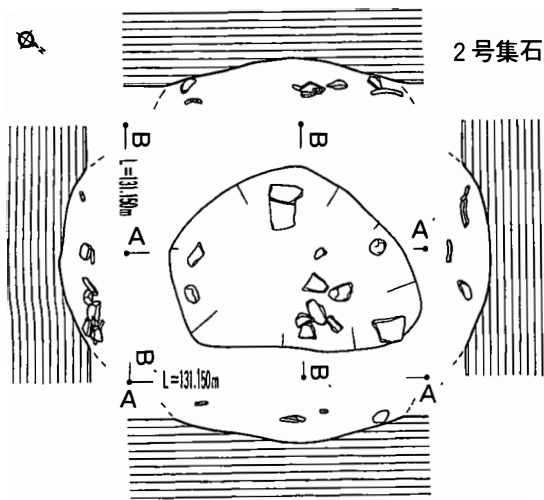
第5表 遺構観察表

【◎50個以上 ○25～49個 △24個以下】

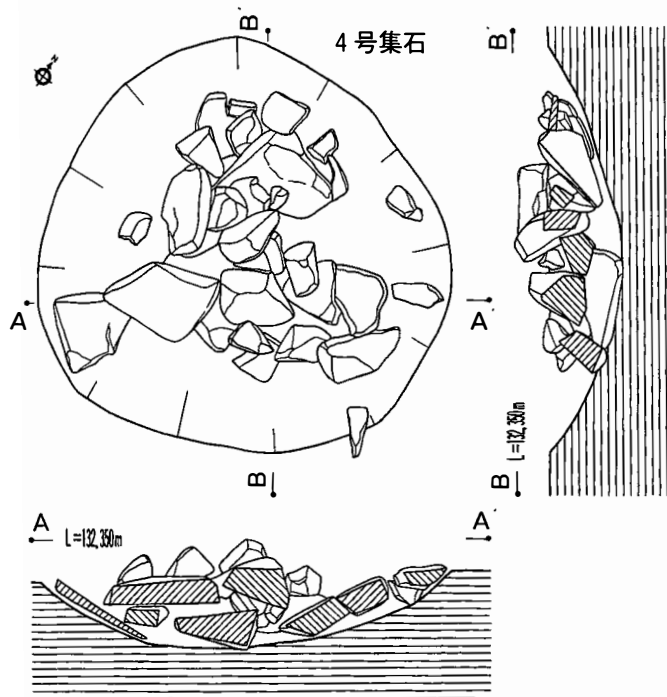
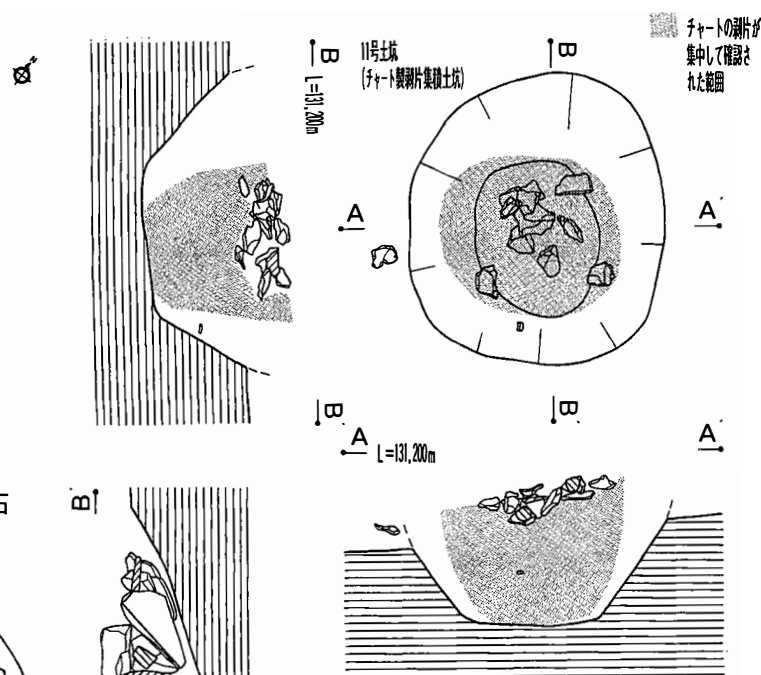
遺構名	グループ	土 坑 の 規 模				構成する 礫の数(個)	礫の 在り方
		有無	形態	規格(m)	深さ(m)		
1号集石	A群	○	円形	1.54×1.48	0.28	◎	集中
2号集石	B群	○	楕円形	0.69×1.00	0.15	△	散乱
3号集石	B群	○	◇	0.63×0.75	0.20	△	集中
4号集石	B群	○	円形	1.59×1.65	0.45	○	集中
5号集石	A群	○	◇	0.70×0.65	0.25	○	集中
6号集石	A群	○	楕円形	0.78×0.65	0.18	○	集中
7号集石	A群	○	円形	0.85×0.75	0.25	○	集中
8号集石	B群	○	不整楕円形	0.87×0.70	0.20	△	散乱
9号集石	B群	○	楕円形	0.95×1.30	0.10	△	散乱
10号集石	B群	○	円形	1.10×1.15	0.15	△	散乱



第10図 遺構実測図①

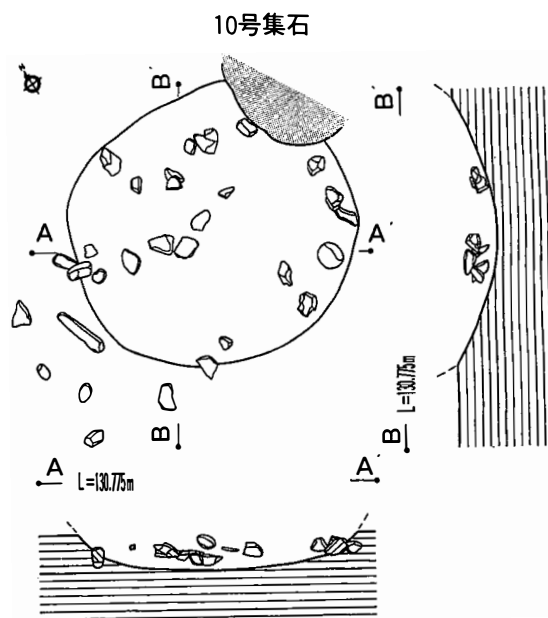
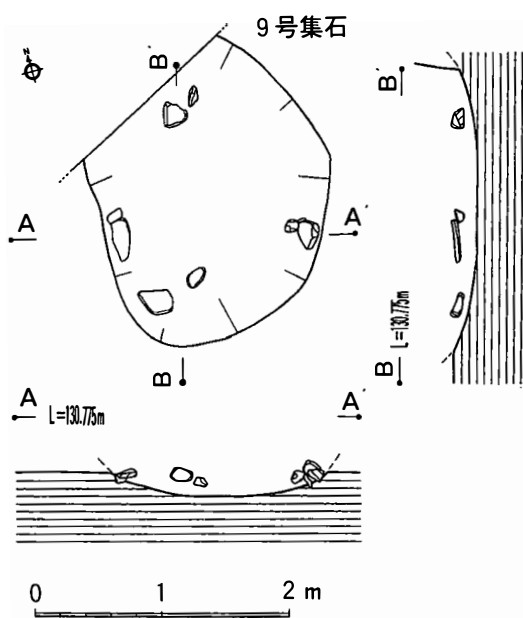
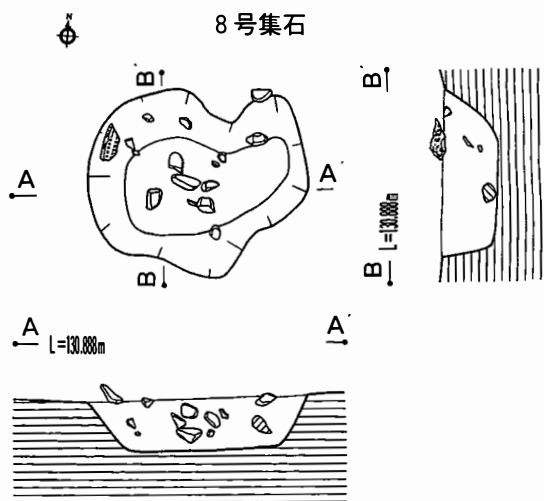
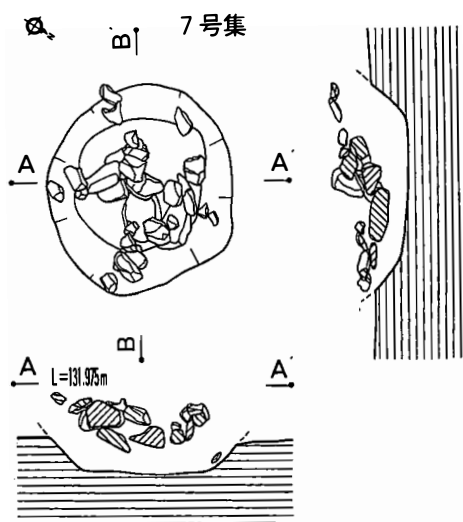
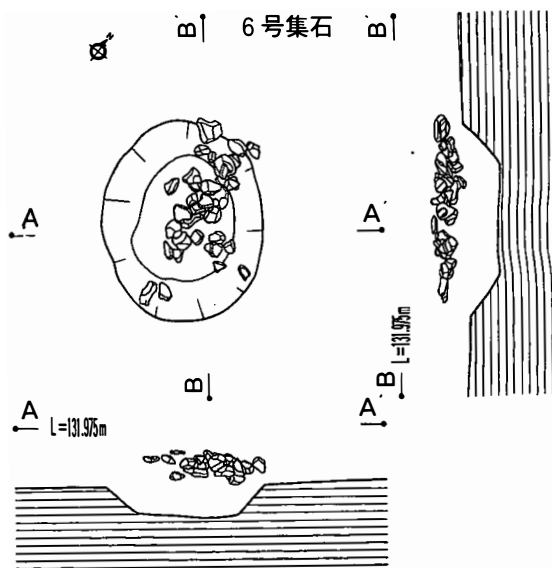
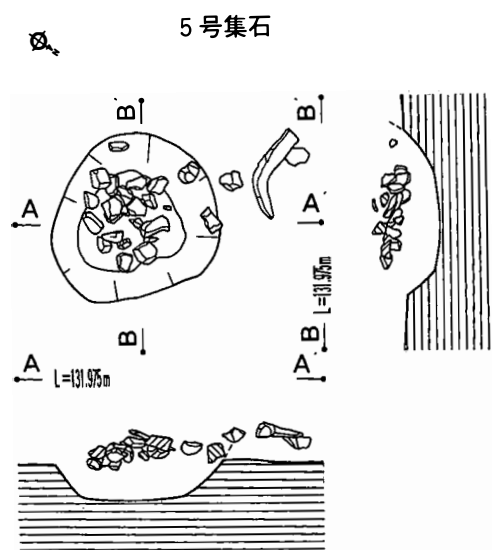


0 0.5 1 m



0 0.5m

第11図 遺構実測図②



第12図 遺構実測図③

2 土器

当該遺跡では、縄文時代早期に属する土器が大量に出土した。これらの資料は、接合等により器形の全体形が確認されたものはない。そのため、口縁部、胴部、底部等各部位ごとに観察を行い、様相把握に努めた。

特に、個体別で口縁部形態に特徴が認められ、型式ごとのまとまりを示すものと考えられる。

これらの土器の分布は、調査区西端を除き、東西2箇所とのまとまりが認められ集石遺構等の分布の在り方と一致する。

確認された土器型式には、手向山式土器、塞ノ神式土器、円筒形条痕文土器等である。土器型式別の分布の在り方は、手向山式土器が調査区東側に、塞ノ神式土器が調査区西側にそれぞれまとまる傾向が看取される。この様相は、遺構の集中するA、式との関係を示唆するものであろうか。以前、調査が実施された地点は、当該地点の南東側約100mの位置にあり、手向山式土器を主体とする遺物群が検出されている。このことから、当該遺跡の中心部に手向山式土器が分布し、西側周縁部に塞ノ神式土器が分布する様相が認められよう。

以下、分類ごとに説明を行う。

1) 手向山式土器 (第14図18～第16図97)

この種の土器群は、調査区東側にまとまりを持ち、遺構A群と合致している。今回、全体形が復元できる接合資料は認められなかったが、口縁部及び胴部の形態的特徴から、A胴部で屈曲し口縁部に向かって内湾しながら外に開く器形的特徴を有する土器、B胴部の屈曲部から口縁部に向け、内湾しながら立ち上がり口縁部が小さく窄まる所謂「壺形土器」とに区分できる。施される文様にはヴァリエーションがみられ、a山形やb同心円、c菱形といった押型文とd捺糸文、e微隆起線文、f沈線文、g条痕文、h凸帯上に刺突文が施されるもの等が認められる。

これらの土器の中には、城・馬場遺跡(大田、松舟1990)で報告されたように複数の施文原体を回転押捺するものもみられる。そのため、部分的に先行する文様が浮き出たように見えるものも存在する。文様は、縦位や斜位に施されるものが多く、間延びした形状を呈する。内外器面で異なる施文原体による回転押捺を施すものが認められ、複数の文様の組み合わせにより様々な文様が認められる。

2) 塞ノ神式土器 (第17図98～158, 160～第22図231)

この種の土器は、バケツ状の胴部から頸部で「くの字」に大きく屈曲し口縁部は外反する形態的特徴を有する土器である。頸部から口縁部にかけての文様には、a貝殻腹縁による押引文、b条線文、c捺糸文、d刺突文が認められる。この部位の文様は、a～dの組み合わせによりヴァリエーションがみられる。その在り方は、貝殻腹縁による押引文のみのもの(98,102～143)、2～3本の条線文とその上下に刺突文を連続的に施すもの(150～152,154,155)、条線文のみのもの(160)、2本の平行する条線文の間に捺糸文を充填するもの(162～166,168,169)とがみられる。胴部の文様は、貝殻腹縁による押引文のみのもの(170,173～175)、2～3本の条線文とその上下に刺突文を連続的に施すもの(176)、条線文のみのもの(189,201～226)、2本の平行する条線文の間に捺糸文を充填するもの(169,177,182,183,185～197)、縦位に捺糸文を施し2～3本の横走する沈線文を施すもの(198,199)とがみられる。これらの資料の中には、後述する平椀式土器との類縁性が指摘できるものも認められる。また、手向山式土器に分類した壺形土器の文様にも類縁性が指摘できる要素が認められることから、これらの土器群は密接な関係を有しているものと理解される。

3) 平椀式土器 (第19図159)

当該型式に比定できる資料は、1点確認された。頸部～口縁部にかけての資料である。条線文を幾何学的に施文し、刺突文を施す。頸部～口縁部にかけ、やや肥厚する。

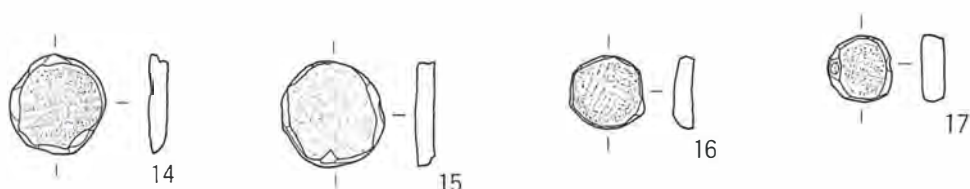
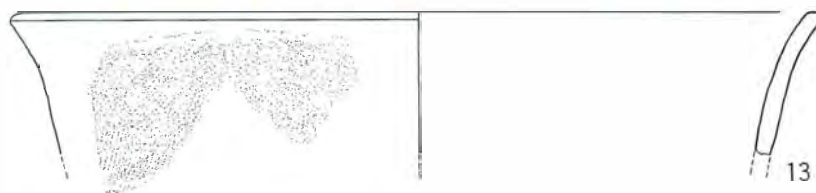
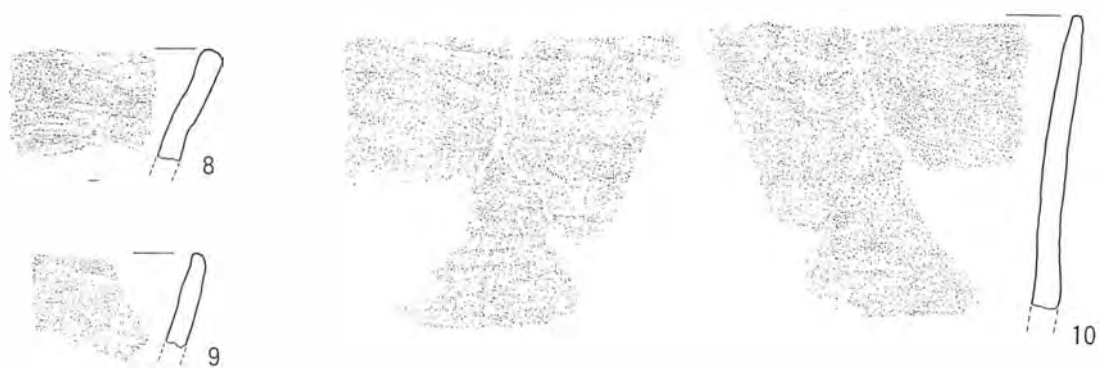
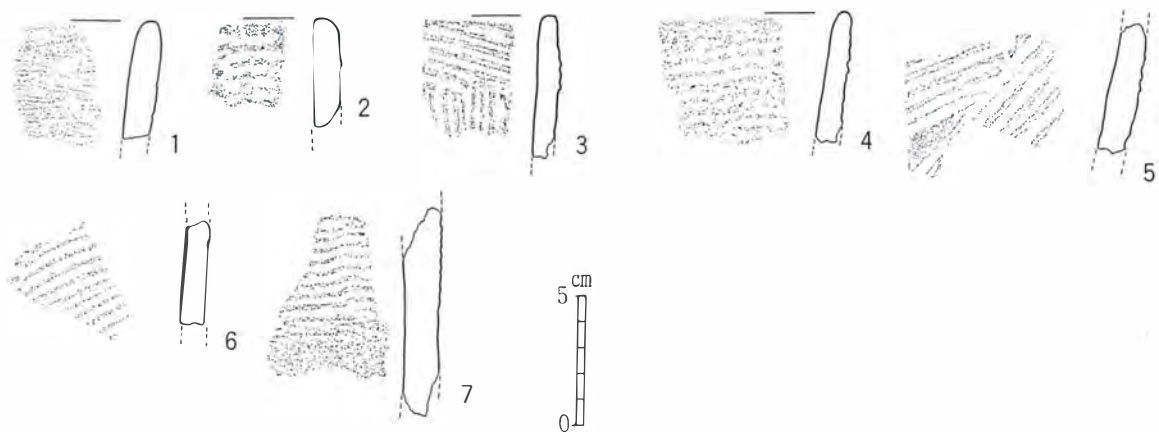
4) 円筒形条痕文土器 (第13図1～7)

器厚は厚く、口縁部が丸みを持つ。施される条痕は口縁部近くにまとまる。施文の方向には、縦位、横位、斜位とヴァリエーションが認められる。

5) 無文土器 (第13図8～13)

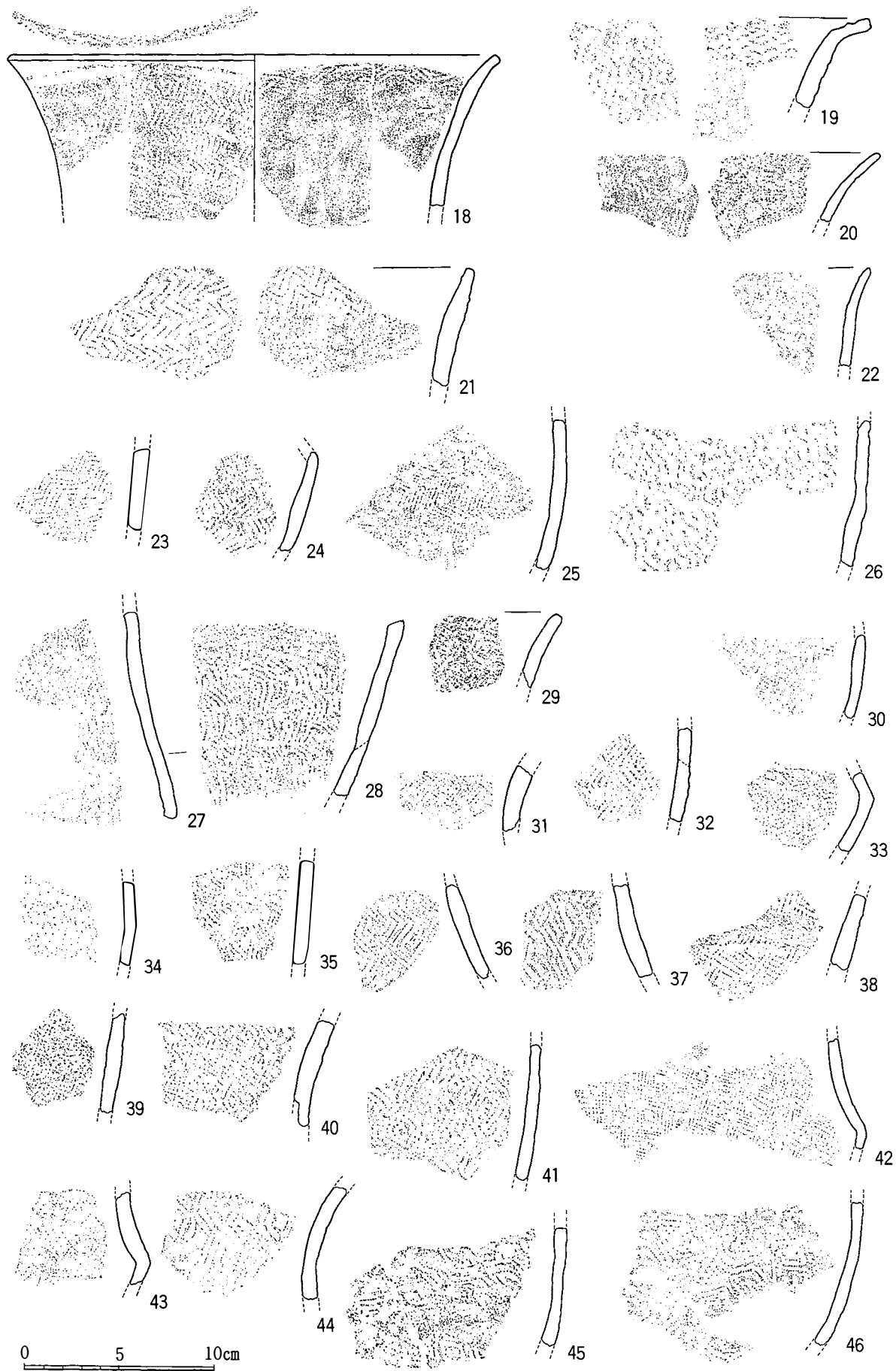
無文土器として分類できる資料には、様々な土器型式の無文部の破片が含まれている可能性が指摘できる。そのため、確実に無文土器として判断できる口縁部に限って報告を行った。

これらの形態的特徴では、直線的に口縁部へと立ち上がるもの(8～10,12)と緩やかに外反するもの(11,13)がみられる。また、口縁端部の形状が平滑に作り出されるものもみられる。

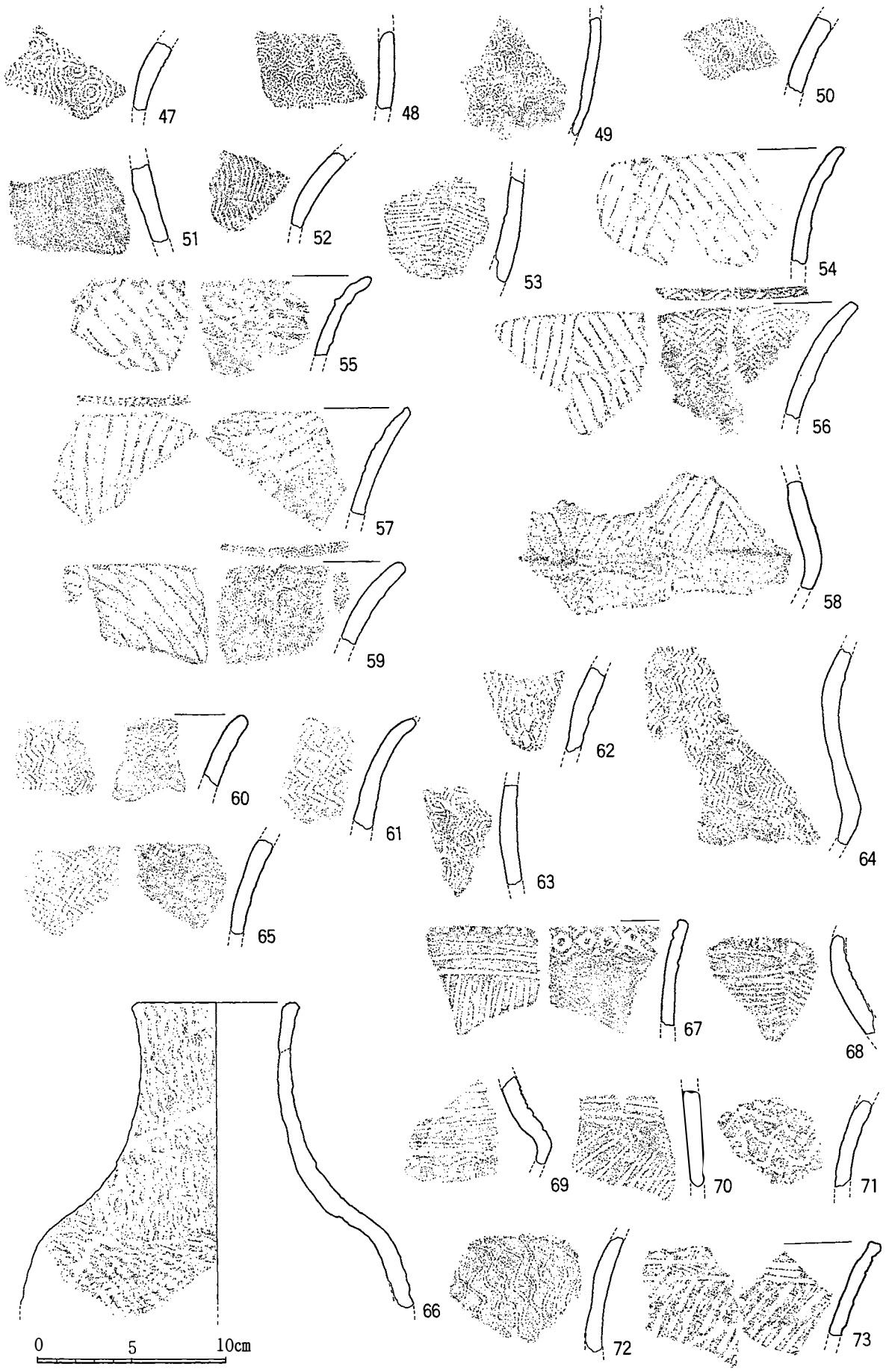


第13图 土器実測図①

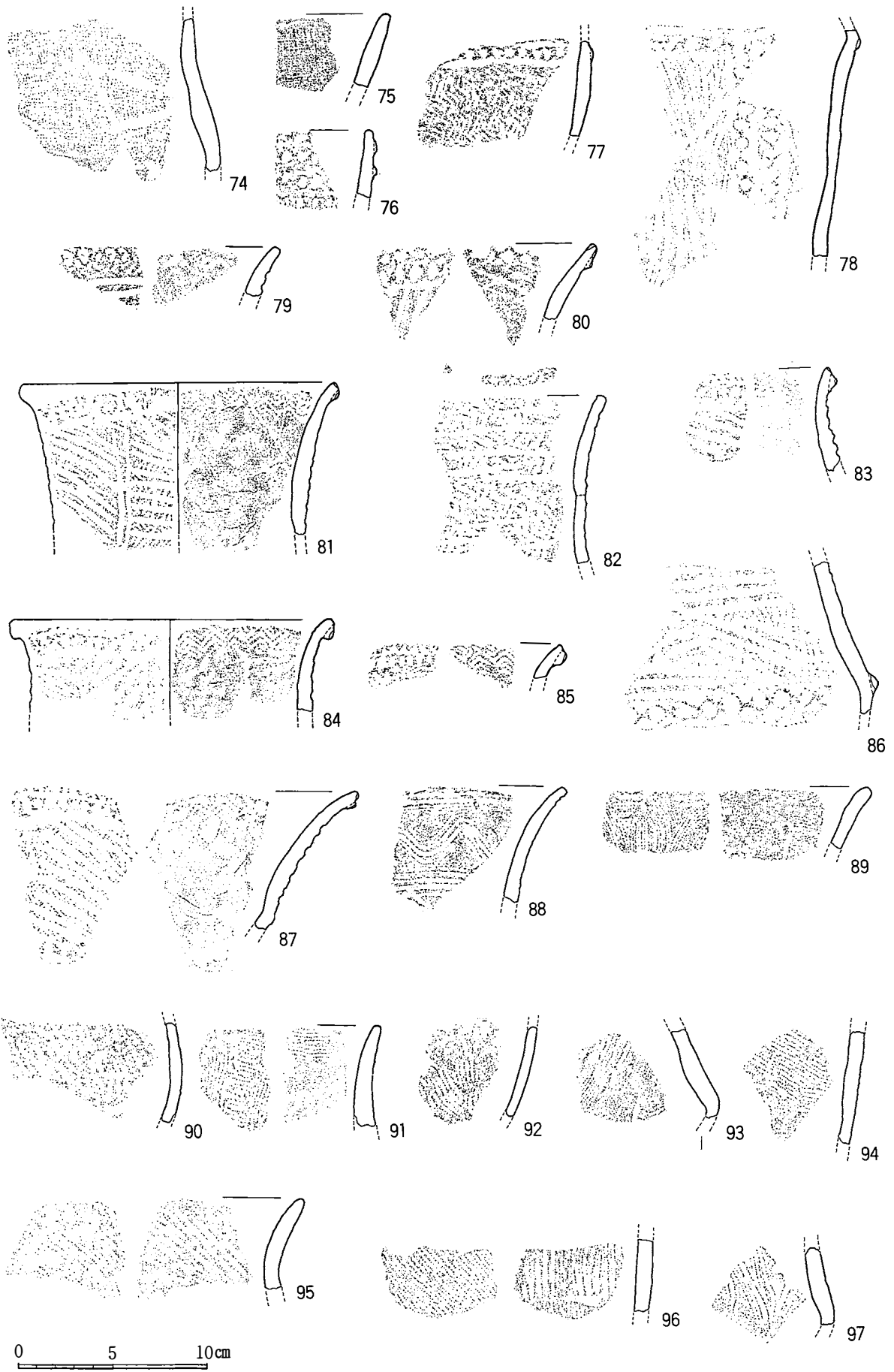
0 5 10cm



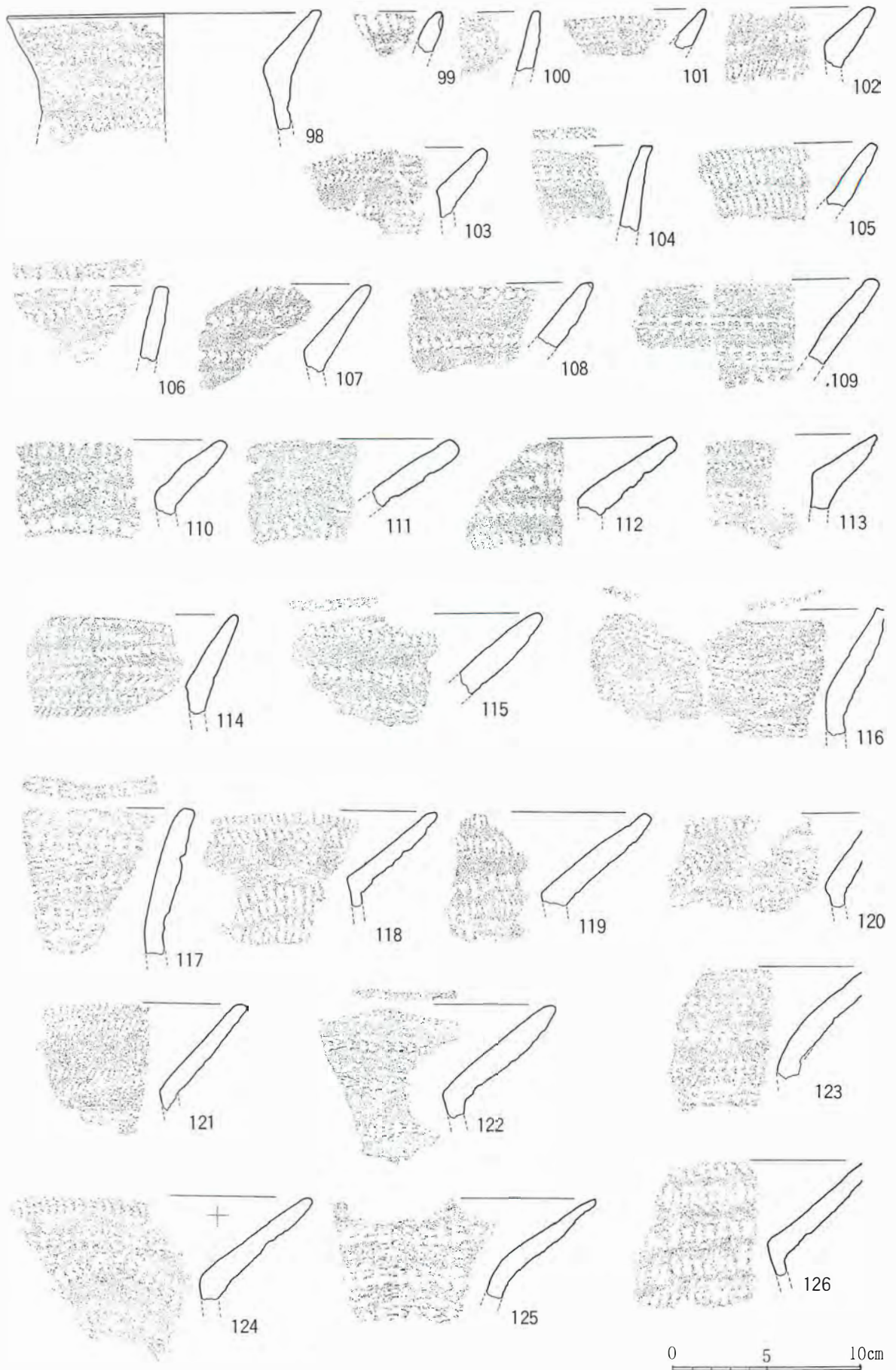
第14図 土器実測図②



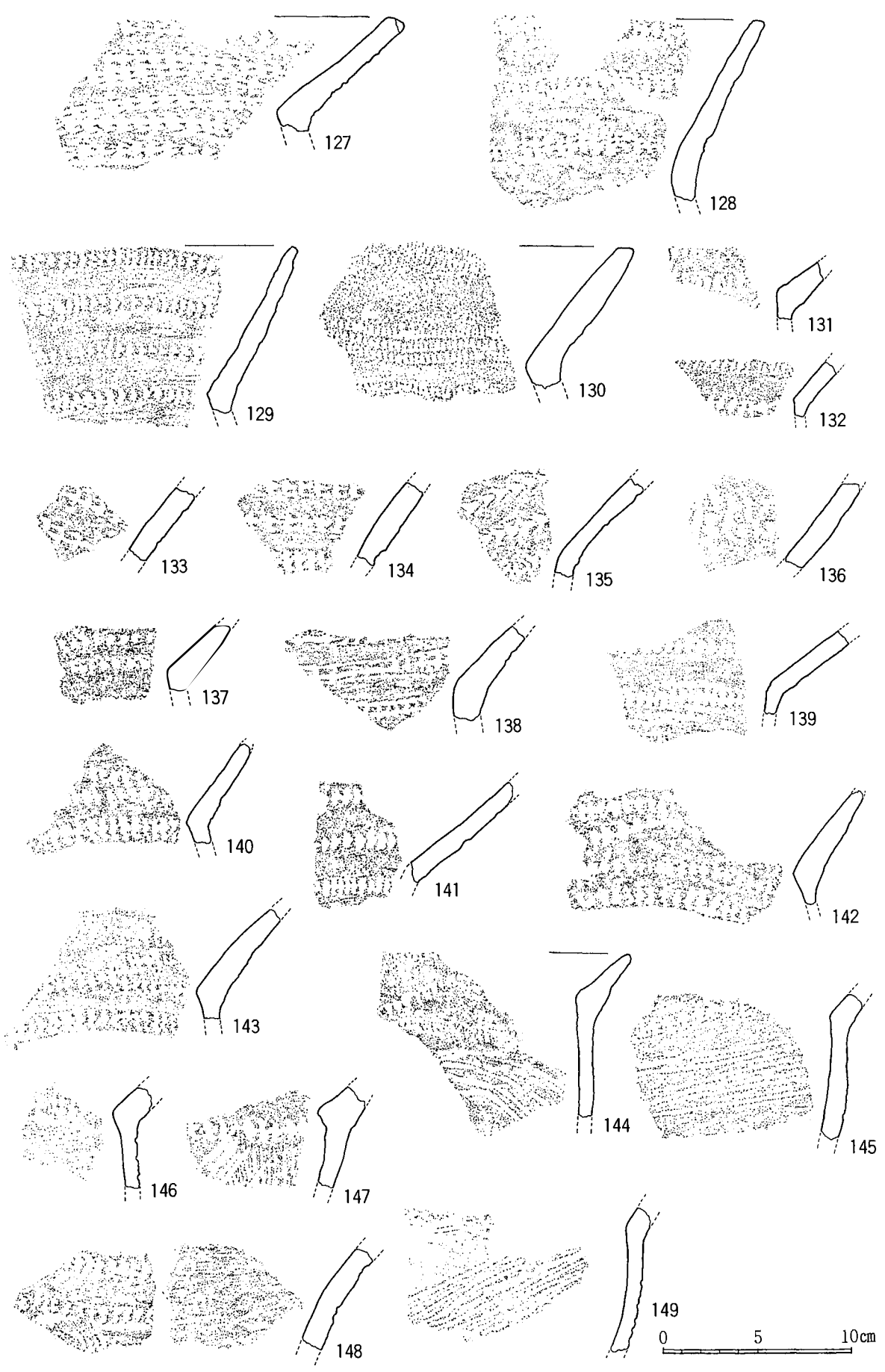
第15图 土器实测图③



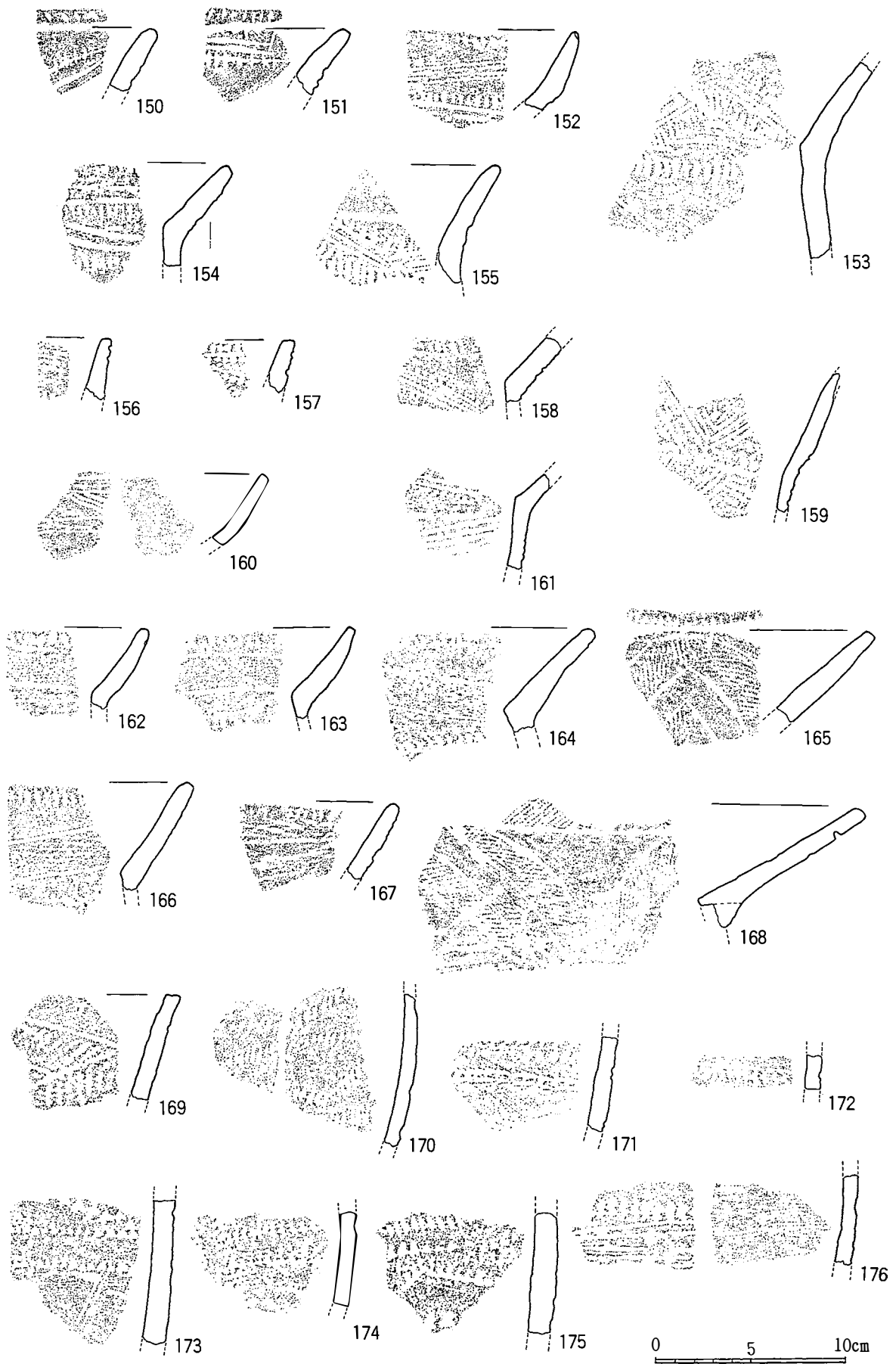
第16图 土器实测图④



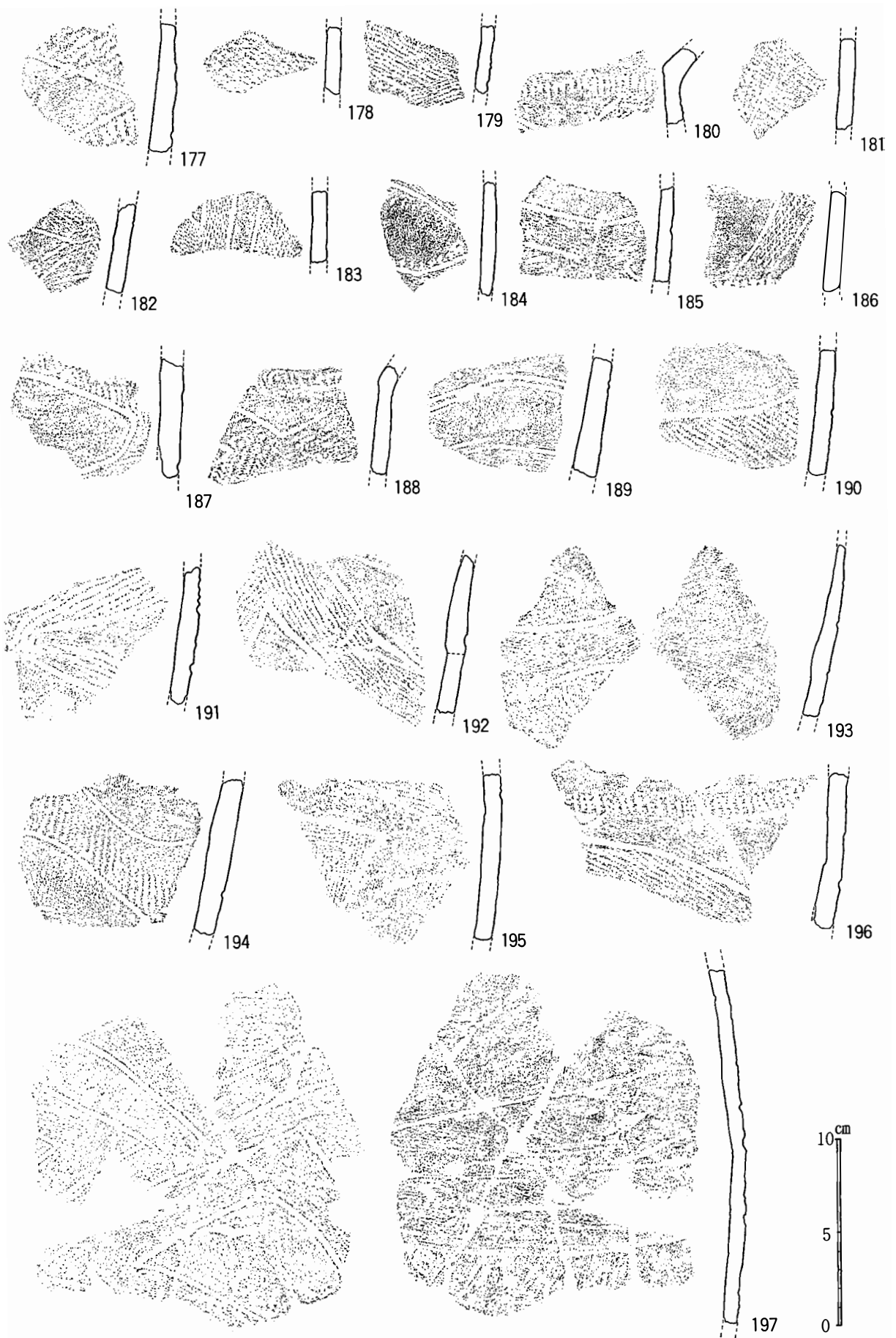
第17图 土器实测图⑤



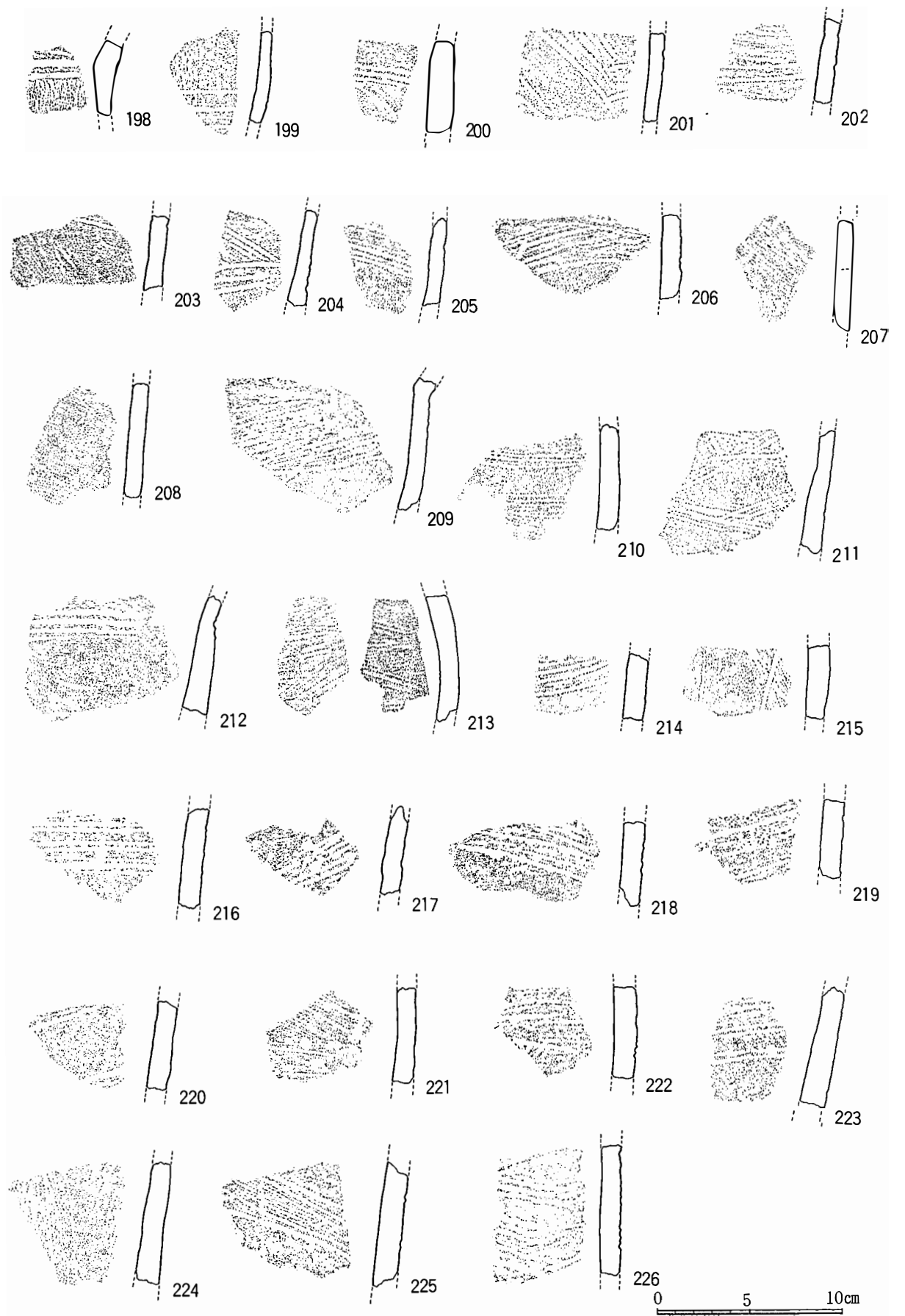
第18图 土器实测图⑥



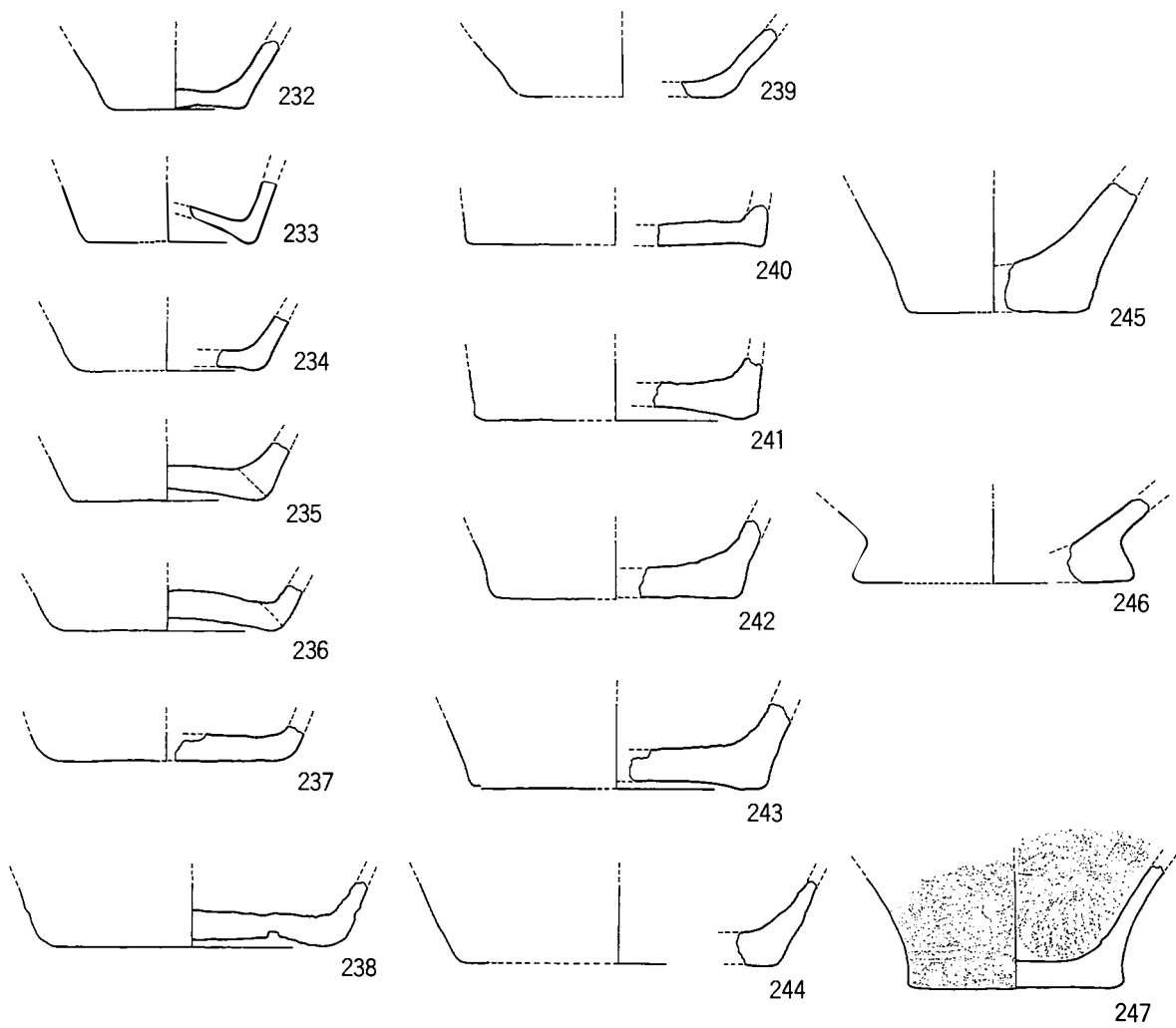
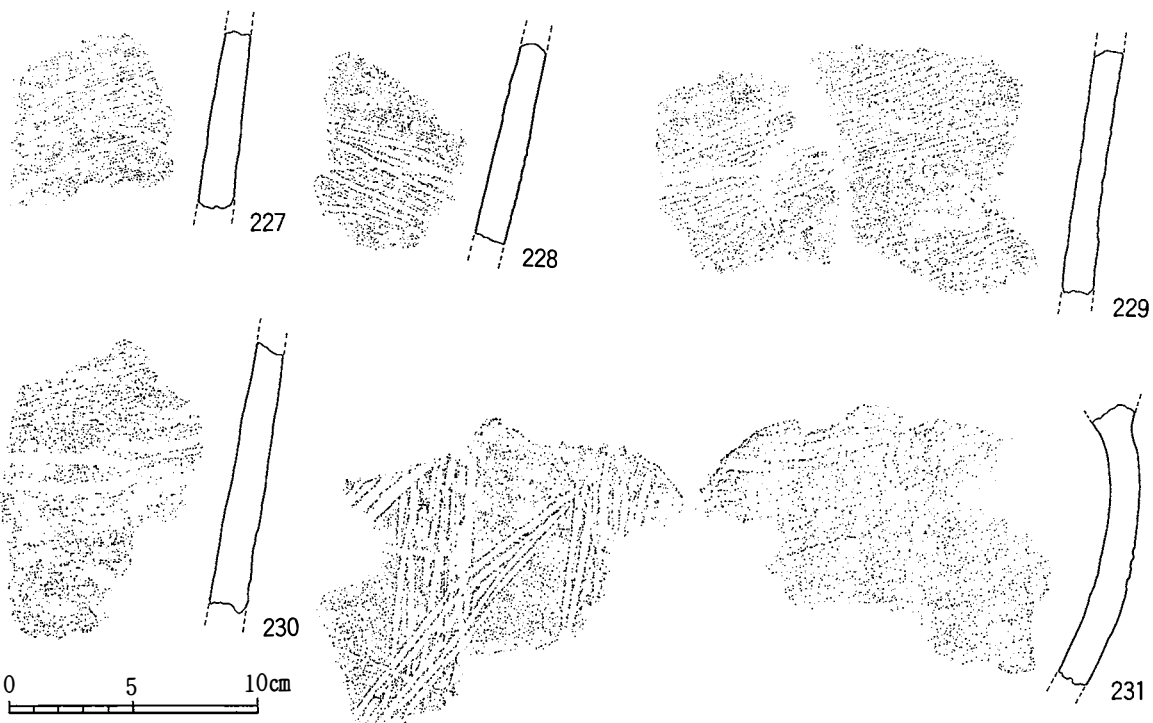
第19圖 土器実測図⑦



第20图 土器实测图③



第21图 土器実測图⑨



第22図 土器実測図⑩

3 石器

当該遺跡では、多量の石器が出土した。層位別では、第Ⅳ層～第Ⅵ層にかけて出土している。しかし、その中心は第Ⅳ層下部から第Ⅴ層上部にかけて認められる。

検出された石器に利用されている石材は、チャートが圧倒的に多く、その他では黒曜石、安山岩、黒色硬質頁岩等があり、石材選択や利用の在り方には偏りがみられる。また、利用される黒曜石の大半は、狭雑物をほとんど含まず飴色を呈する透明度の高い良質の黒曜石であり、桑ノ木津留産に比定できるものであろう。

このように、石材利用の在り方は、近距離で獲得できるものを多用する傾向が窺える。

検出された石器の器種は、石鏃、石匙、石錐、削器、磨製石斧、二次加工ある石器、使用痕ある剥片、磨石・敲石、剥片、碎片、石核、異形石器である。

以下、器種ごとに説明を行う。

1) 石鏃 (第23図1～17)

この種の石器は、全部で22点が出土した。石材は、黒曜石6点、チャート5点、安山岩4点、サヌカイト3点である。形態的には凹基のものが大半を占めるが、1点のみ平基のものがみられる。それらの大きさと形状には、ヴァリエーションが認められる。大まかには、大型と小型に分けられ、前者には、当該期に特徴的な「鋏型鏃」が認められる。しかし、その数量は少ない。

全資料に認められる挟入は、浅いものと深いものがある。

これらの資料の中には、表裏面のいずれかに素材剥片の剥離面を残すものが認められる(4,5,7,10,11)。腹面側に認められる剥離面から、基部側に打点部が位置するもの(4,5,7)と、側縁部に打点部が位置するもの(10,11)とがみられる。

2) 石匙 (第24図18～26)

この種の石器は、全部で18点が出土した。石材は、チャート17点、珪質岩1点である。形態的には、つまみ部と刃部の設定から、縦型(18～21,24)と横型(23,25,26)に分けられる。つまみ部は、素材剥片の打点部側に設定されその作りは大きいものが大半を占める。また、調整加工は、周縁に入念に施されるが、石器の表裏面中央には素材剥片の剥離面を大きく残す。このことから、素材剥片には幅広・横広の剥片が選択されていることが窺える。また、調整加工の在り方には、表裏両面より施されるものといずれか一方から施されるものとがみられる。

3) 石錐 (第27図43)

この種の石器に分類できるものは、1点確認された。

石材は、チャートである。幅広剥片を素材とし、先端部の両側縁を表裏両面から細かな調整剥離を施し、錐部を作り出している。表面右側縁部に折れ面が観察され、折れによって調整剥離が切られていることから、製作後使用に伴う可能性が指摘できる。また、裏面側において折れ面側縁から細かな調整加工を施し最終的な全体形を整えている。このことから、欠損後のリダクションと考えられる。長さ3.40cm、幅1.30cm、厚さ0.50cm、重さ1.8gを測る。

4) 削器 (第25図27～第26図42)

この種の石器は、16点検出された。石材は、チャート14点、サヌカイト1点、黒色硬質頁岩1点である。素材剥片には、幅広・横広剥片が選択的に利用され、その背面に観察される剥離面構成は求心的である。刃部は左右両側縁及び先端部に作り出され、調整加工の在り方には一面あるいは両面のものが認められる。素材剥片の厚みによって急斜度をなすものもみられる。

これらのことから剥片剥離技術は、打面を固定せず剥離面を打面としながら転移を頻繁に繰り返す石核や厚みのある剥片素材の石核で周縁から剥離をおこなうものが大半を占めるものと理解される。

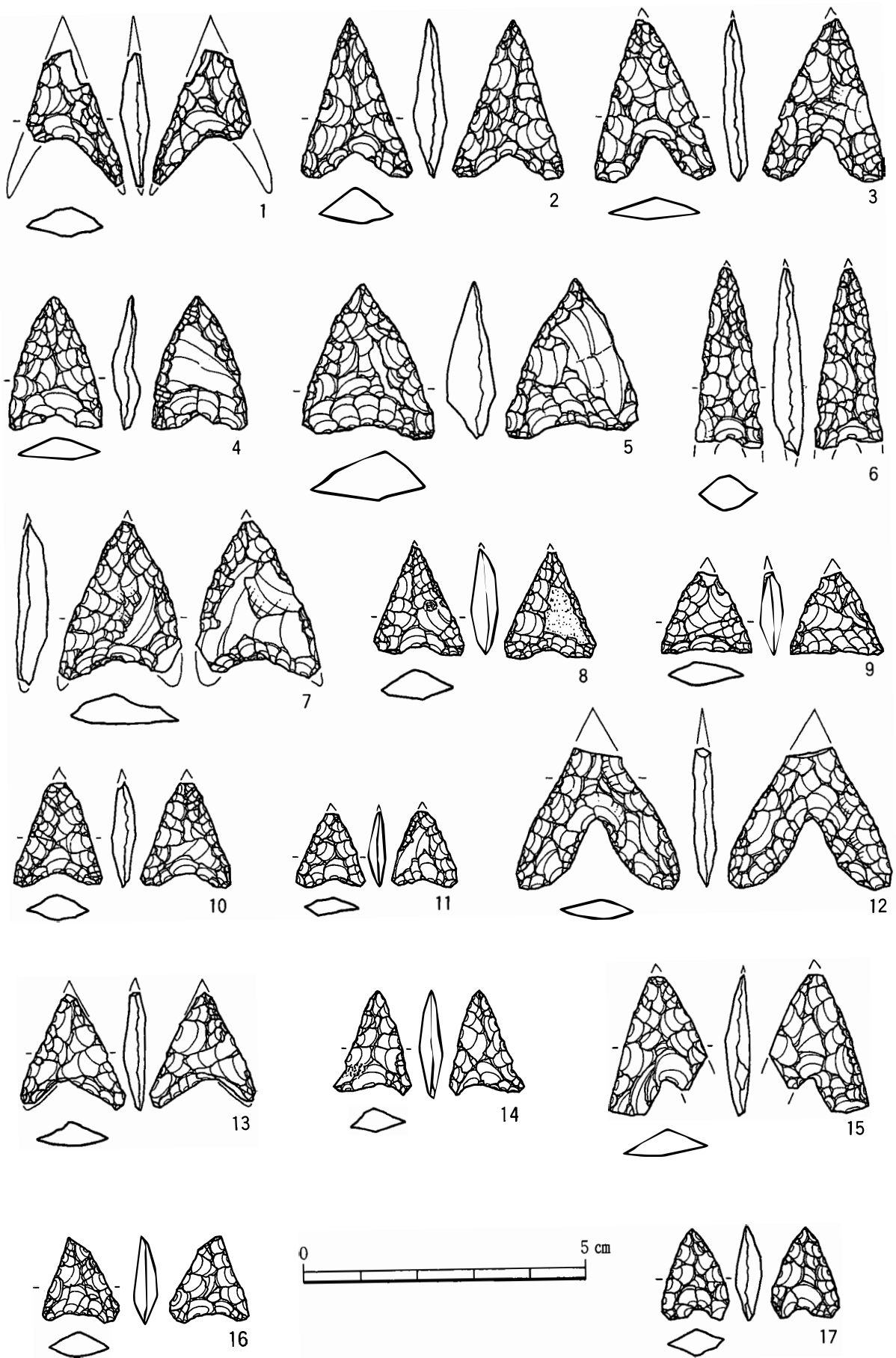
これらの石器は、縦長の幅広剥片を素材とするもの(27,28,30,31,35～39,41,42)と横長剥片を素材とするもの(32,33)、縦横が拮抗する幅広剥片を素材とするもの(40)とがみられる。このことは、機能上最も類似する石匙と相違しない。ただし、両者を比較した場合、その最大厚の平均値では石匙が1.00cmであるのに対し、削器が1.26cmであり、少なからず削器が厚みのある素材が選択されていると理解することが可能であろうか。つまり、両者は素材剥片の形状的には厚みの点で僅かな差異が認められるのみであり、つまみ部を作り出す打点部直下の剥片の厚みが大きく影響している可能性が指摘できよう。

5) 磨製石斧 (第27図47,49)

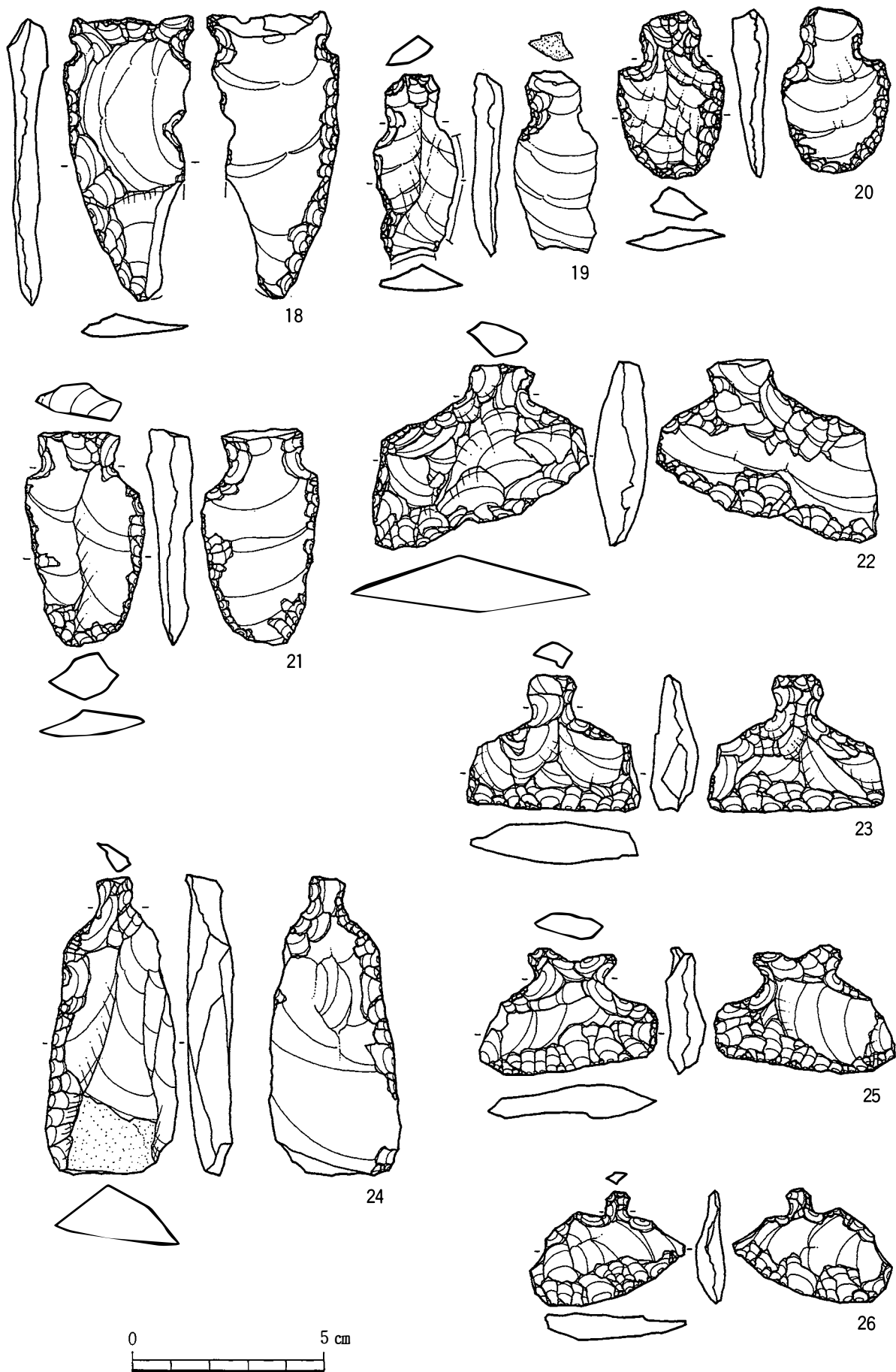
この種の石器は、2点確認された。石材は、玄武岩質安山岩と粘板岩である。47は、表面に礫面を大きく残すが、刃部裏面側に僅かに研磨痕が認められ、円刃である。49は、表裏面とも摩耗が激しくトロトロとした質感を呈し、刃部形態はやや膨らむ程度で直刃である。

6) 打製石斧 (第27図48)

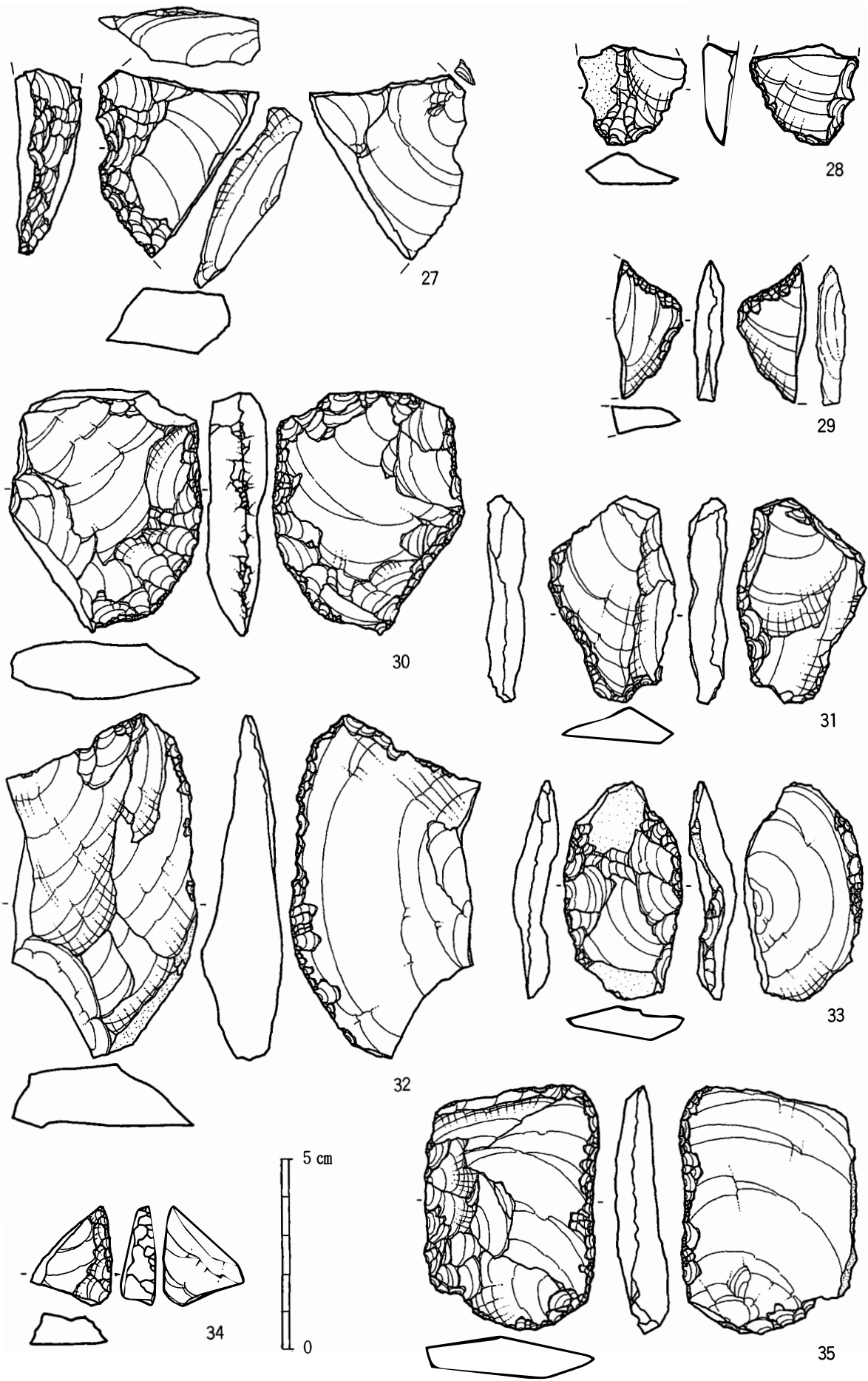
この種の石器は、1点確認された。石材は、安山岩である。薄い横広剥片を素材とし、周縁に粗い調整加工を施している。刃部は、先端が浅く折れている。



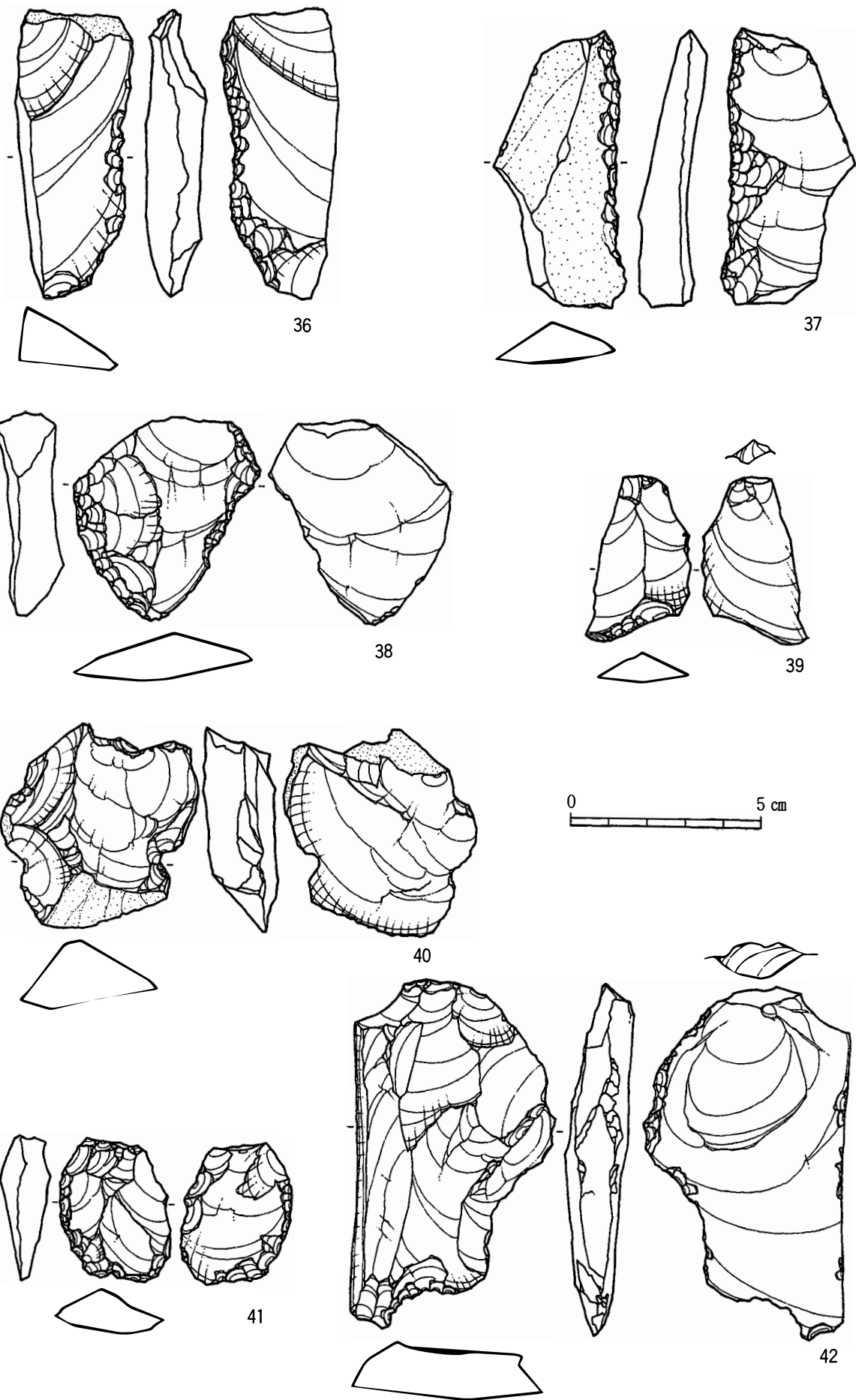
第23图 石器实测图①



第24图 石器实测图②



第25图 石器实测图③



第26图 石器实测图④

7) 環状石斧 (第27図50)

この種の石器は、1点確認された。長軸径が6.1cmで短軸径が5.3cmを測るやや楕円形を呈する石器である。中心部に径1cmの孔を穿つ。周縁部は、全周にわたって潰れ痕や擦れ痕が確認される。

8) 二次加工ある石器 (第27図44,46,51)

この種の石器は、二次加工の部位とその在り方から器種分類が困難なもの、あるいは部分的であるもの等を分類上取り扱った。そのため、二次加工が表面あるいは表裏両面の側縁部に一定程度認められるものに対しては削器として分類した外、できる限り類縁性の認められる石器器種に分類を試みている。そのため、当該器種として報告を行う石器は、3点のみである。

46は、長さ7.50cm、幅3.80cm、厚さは石器中央部で突出して1.70cmを測る。二次加工は、表面両側縁に粗く大まかに施され、右側縁裏面側において細かな剥離が認められる。表面中央に礫面が残り、その下部に研磨痕が認められる。このことから、局部磨製石斧として分類することも可能であるが、石器が比較的小型であるため、ここでは二次加工のある石器として報告を行っておく。重さは、39.2gである。

44は、長さ3.30cm、幅2.40cm、厚さ0.50cm、重さ4.4gを測る。幅広剥片を素材とし、二次加工は表裏両面とも側縁部に細かな剥離が施される。先端部を僅かに欠失しているが本来は尖る可能性も考えられる。このことから、尖頭器あるいは石鏃として分類することも可能であろう。しかし、両器種のいずれかに区分することが困難なため二次加工のある石器として取り扱った。また、51は表面に求心状の剥離痕を残し、甲高な幅広の剥片を素材とする。裏面側に大まかな調整剥離を施し鋸歯状を呈する部分と細かな調整剥離を施す部分が認められる。長さ5.25cm、幅4.05cm、厚さ1.35cm、重さ26.2gを測る。

9) 使用痕ある剥片 (第28図52~64)

使用痕ある剥片は、刃こぼれ状の痕跡のみが観察されるもので、13点を図示した。石材は、チャート12点、安山岩1点である。これらの石器に使用される素材剥片の形状は、幅広の縦長剥片が多く、不整形の横広剥片は1点のみである。使用による微細な剥離痕は、前者において側縁部の一辺ないしは両辺に認められ、後者では先端部付近に認められる。また、背面の剥離面の痕跡から打面を固定するものは認められず、石核の周縁を巡るように剥離が進行した結果、求心的な剥離面構成がみられる。

10) 磨石・敲石 (第29図65~第30図83)

磨石・敲石は、20点を図示した。石材は、すべて砂岩である。これらの石器は、その形態的特徴から円形、楕円形、棒状、不整形に分類される。また、使用部位からは長軸の一端かもしくは両端に敲打痕が観察されるものと、敲打痕が全縁に観察されるもの、敲打痕が石器中央部にも観察されるものと、敲打痕と併せて磨痕が観察されるものがある。

以下、分類ごとに説明を加えていく。

第Ⅰ類

第Ⅰ類は、石器の一端ないしは両端に敲打痕が観察されるものである。石器の形状は楕円形、不整形、棒状のものがある。

第Ⅱ類

第Ⅱ類は、石器の側縁部に敲打痕が観察されるものである。石器の形状は、楕円形、不整形のものがある。大きさは、比較的均質である。敲打痕の状態では、側縁部の広い範囲に認められるものとそうでないものがある。

第Ⅲ類

第Ⅲ類は、敲打痕が全縁に観察されるものである。形状は、楕円形と棒状、不整形がある。

第Ⅳ類

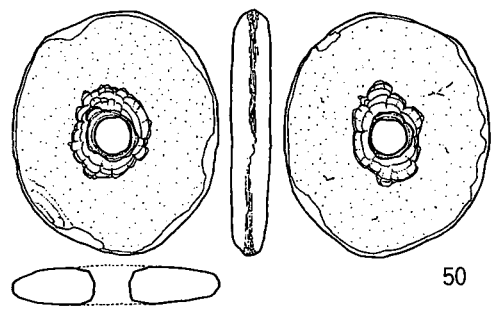
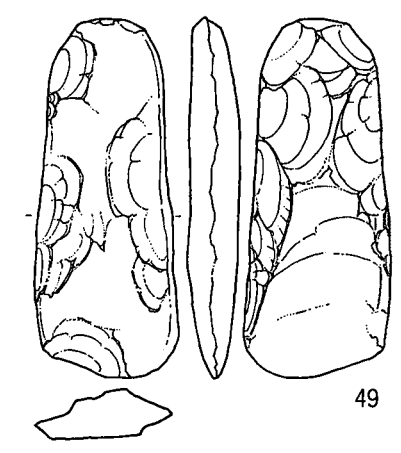
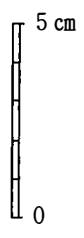
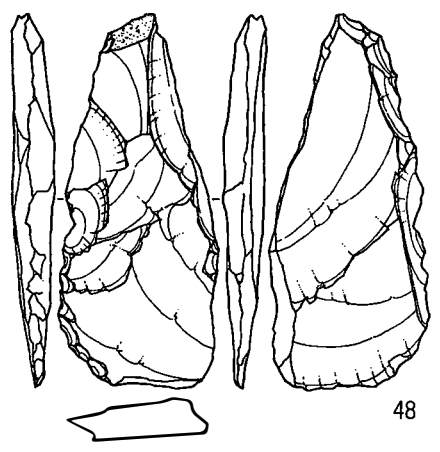
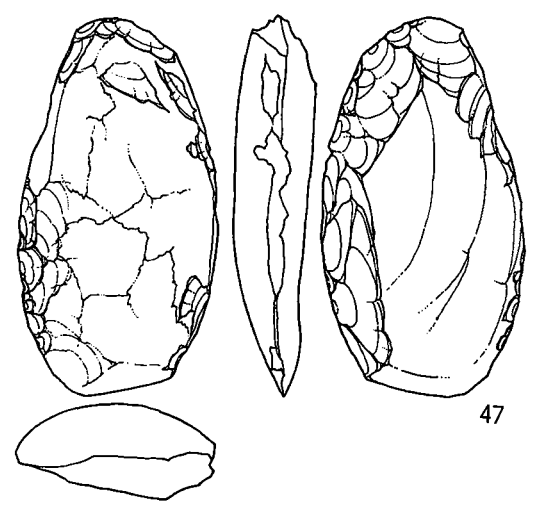
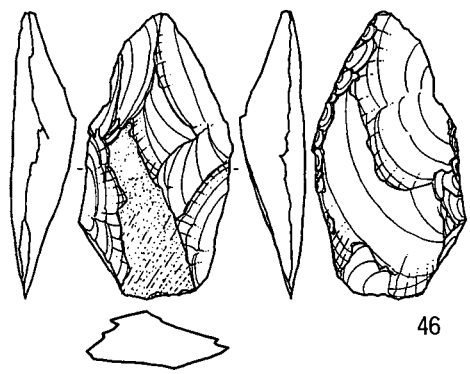
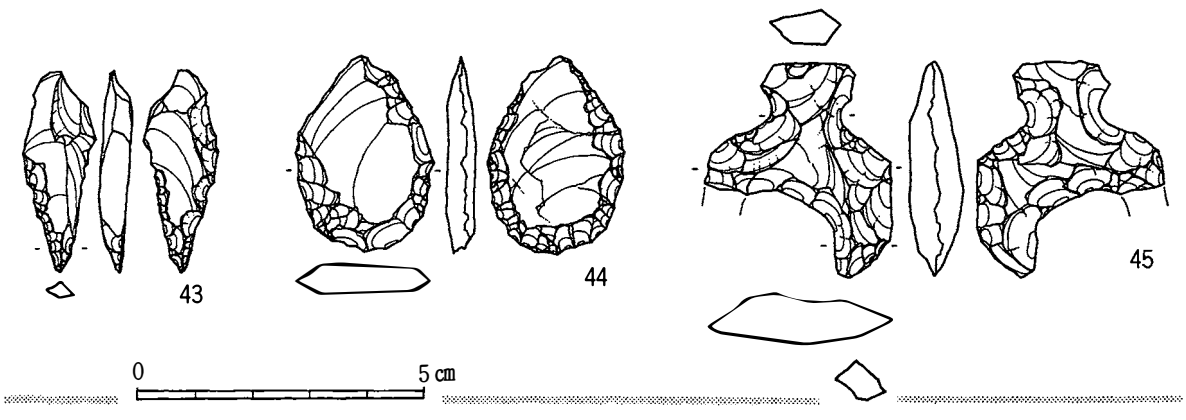
第Ⅳ類は、縁辺の敲打痕が顕著に観察されないものである。石器の形状は、円形、楕円形、不整形のものがある。

11) 石核 (第31図84~87)

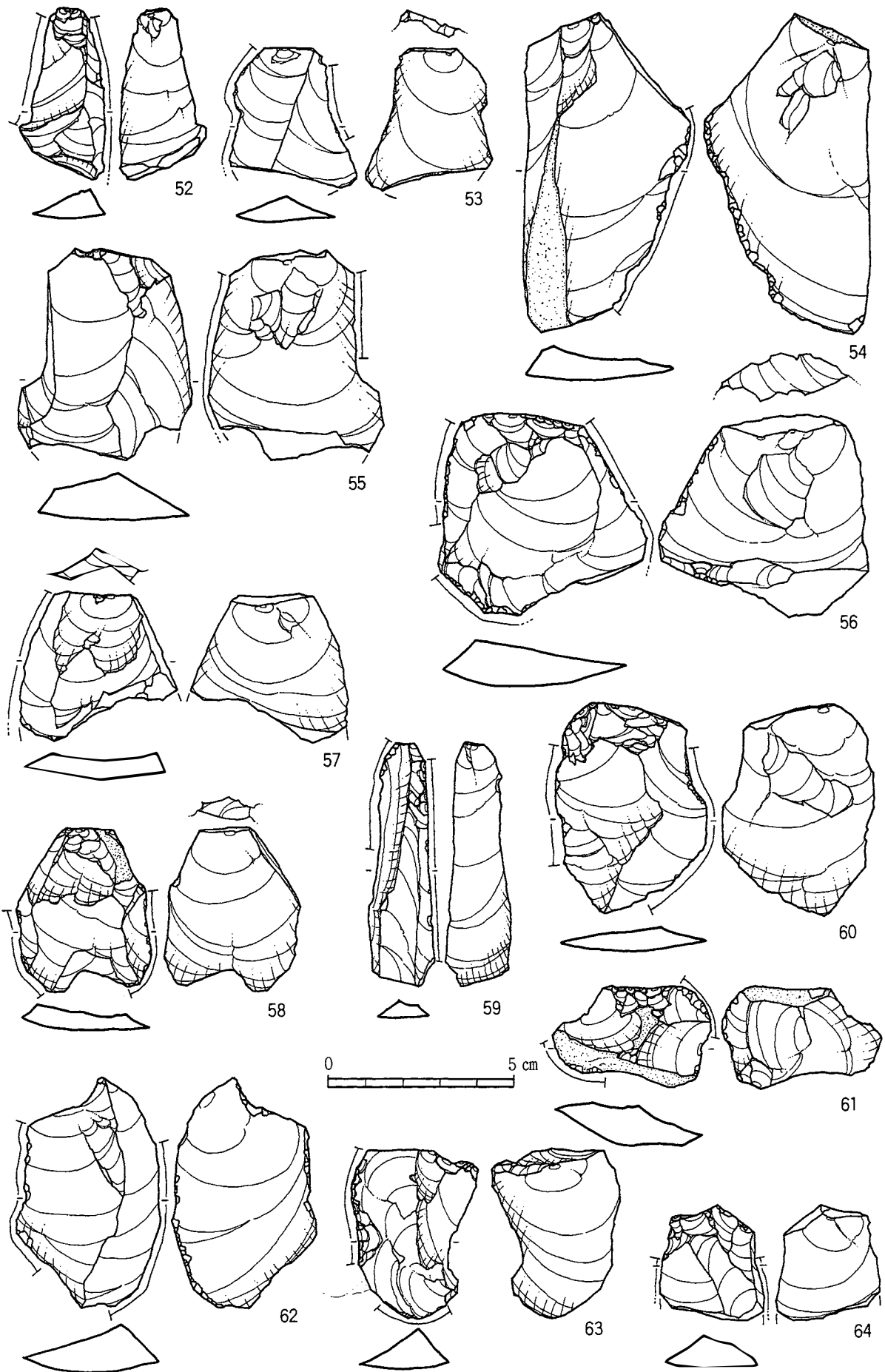
この種の石器として分類される資料の大半は、チャートを素材とするものである。また、図化した資料に共通する点として、一面に主要剥離面を有し、僅かに礫面を残す。このことから、原石を粗割りし厚みのある剥片を生産し石核の素材としていることが理解される。剥片剥離は、周縁から求心状に行われ結果的に幅広剥片が剥出されることになる。また、一部には、表裏両面で剥片剥離作業が進行し、チョッピングツール状を呈するものも認められる。

12) 異形石器 (第27図45)

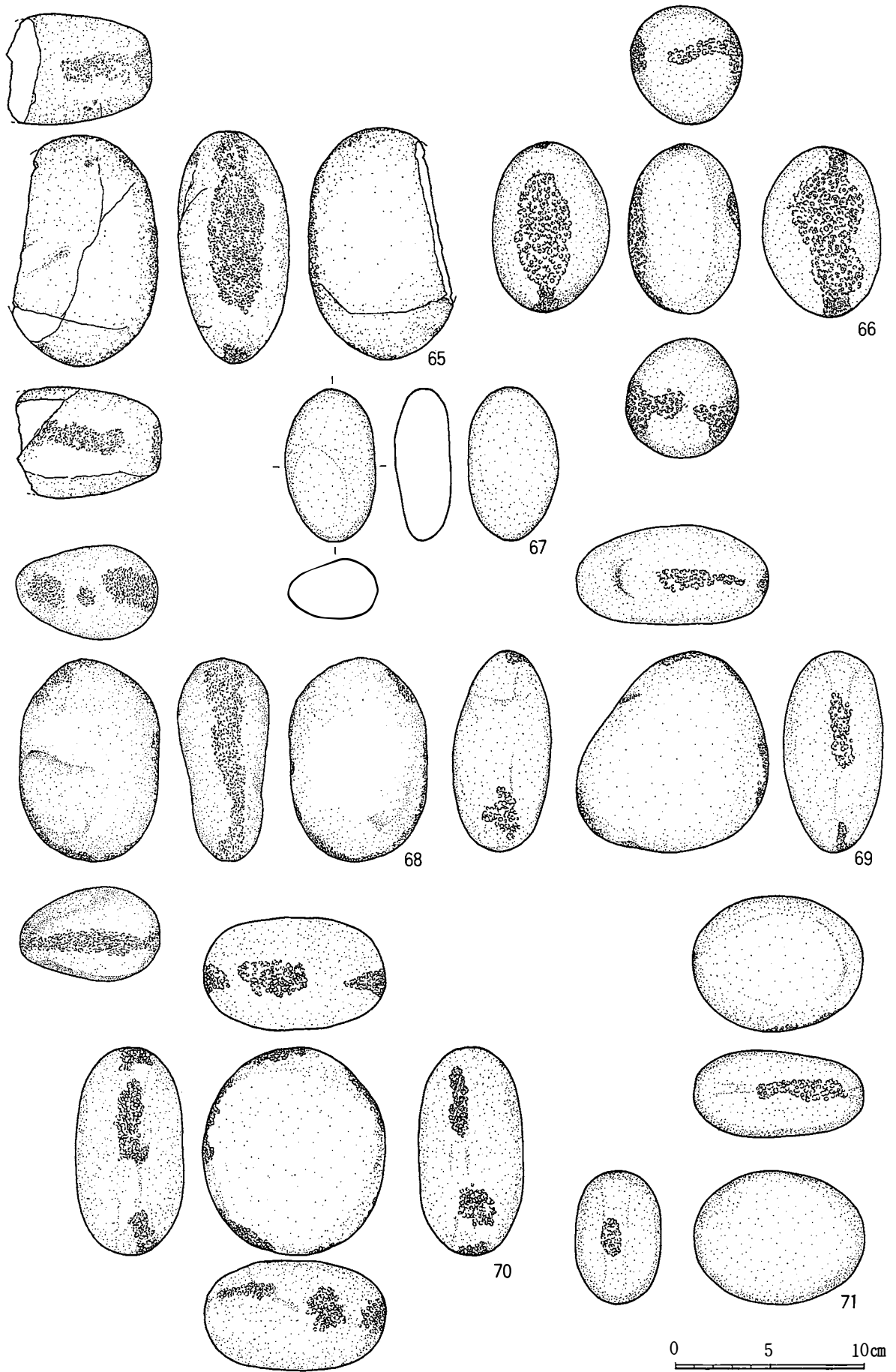
この種の石器としては、図化した1点のみである。形態的には石匙に類似した特徴を有し、明確なつまみ部を作り出している。下半部の左右は脚状に突出し、その結果刃部に相当する部位が大きく内湾する。左側突出部を欠失している。大まかな剥離により全体形を整えている。



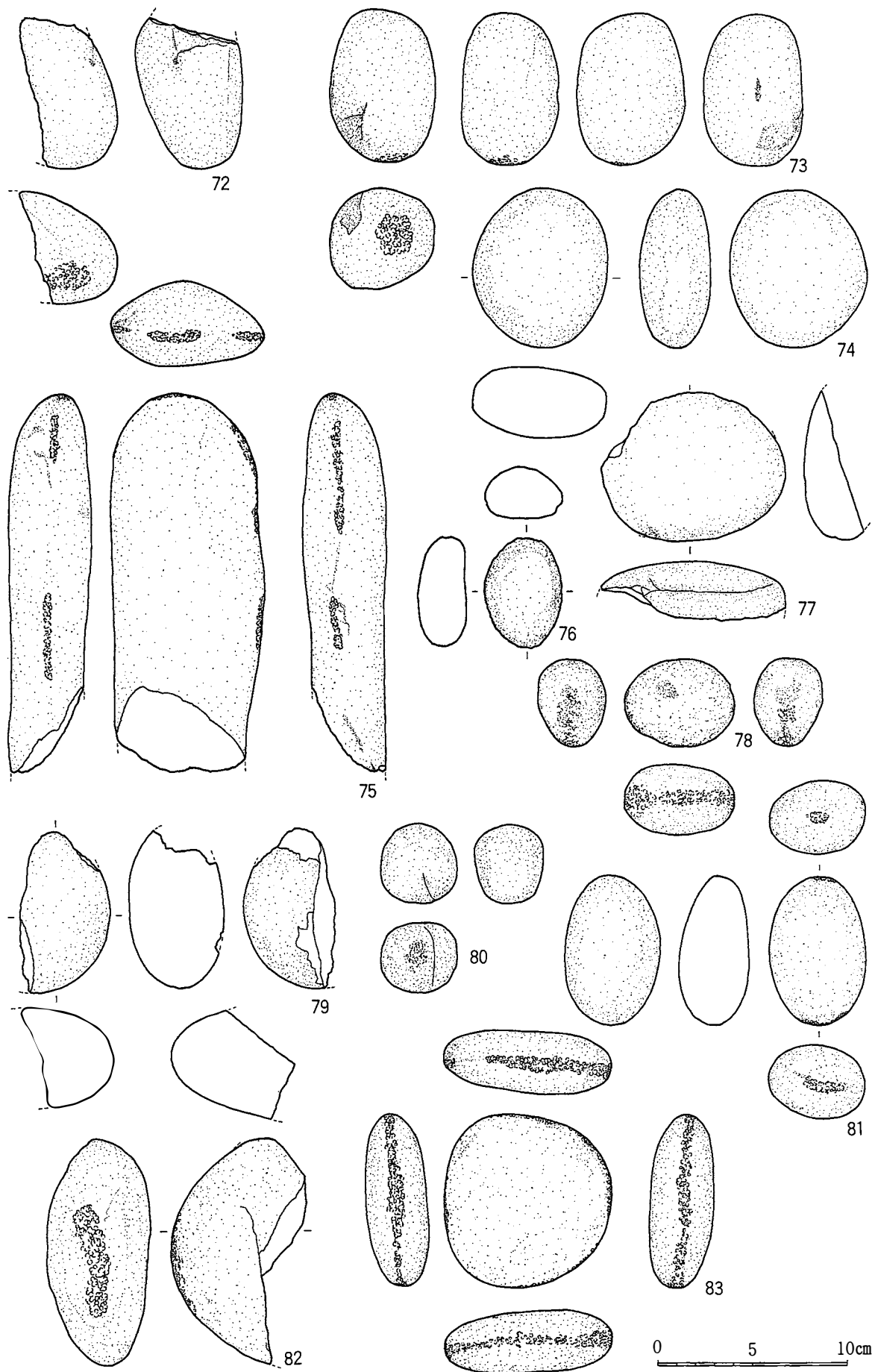
第27图 石器实测图⑤



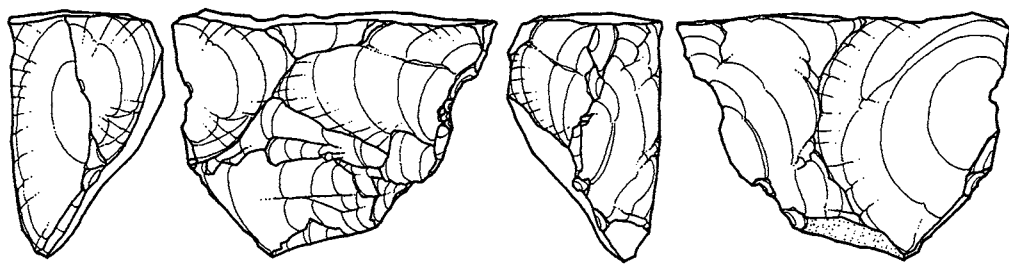
第28図 石器実測図⑥



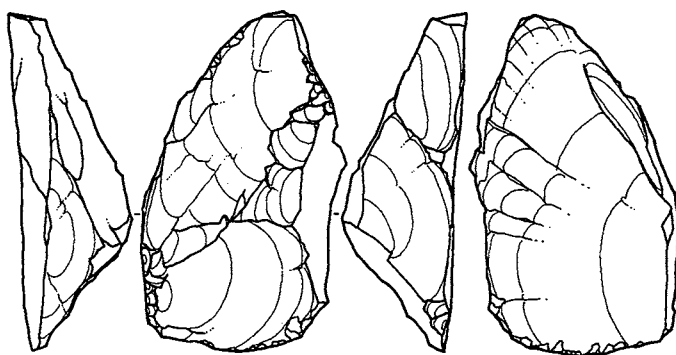
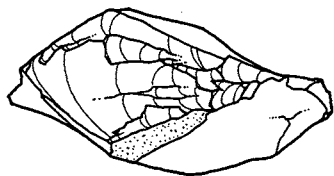
第29图 石器实测图⑦



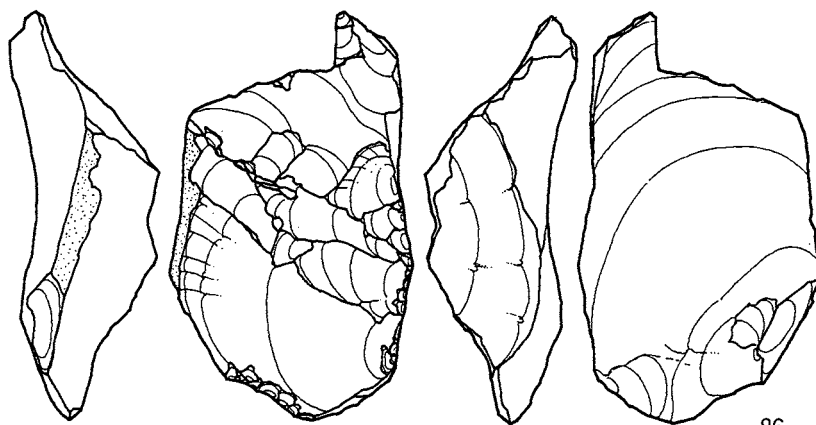
第30图 石器实测图⑧



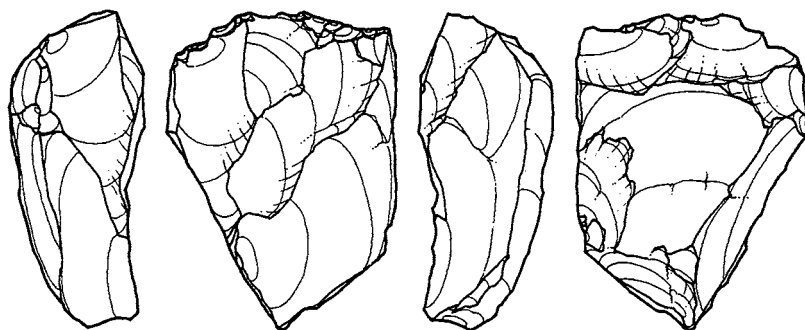
84



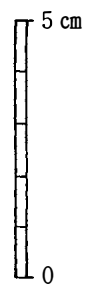
85



86



87



第31图 石器实测图⑨

第6表 石器計測表①

No.	器種	石材	計 測 値				欠失部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	石 鏃		2.30	1.70	0.50	0.8	先端、片脚	SB-01埋土
2	〃	安山岩	2.70	1.95	0.60	1.4	完形	189
3	〃	チャート	2.80	2.10	0.35	1.4	〃	一括
4	〃		2.25	1.65	0.45	1.2	〃	1380
5	〃	チャート	2.65	2.30	0.85	3.1	〃	1178
6	〃		3.10	1.20	0.55	1.5	両脚	1691
7	〃	チャート	2.70	2.15	0.50	2.4	片脚	2262
8	〃	黒曜石	1.80	1.55	0.50	0.9	完形	3483
9	〃	チャート	1.40	1.65	0.40	0.6	先端	1959
10	〃	〃	1.80	1.55	0.40	0.7	〃	一括
11	〃		1.30	1.15	0.30	0.3	完形	〃
12	〃	サヌカイト	2.45	2.85	0.35	1.4	先端	3516
13	〃	黒曜石	1.90	1.80	0.35	0.7	先端、片脚	3816
14	〃	〃	1.75	1.25	0.35	0.5	〃	398
15	〃	サヌカイト	2.40	1.60	0.40	1.2	片脚	1514
16	〃	〃	1.45	1.25	0.45	0.5	完形	3050
17	〃	安山岩	1.55	1.10	0.30	0.5	〃	585
未掲	〃	安山岩	1.75	1.40	0.30	0.5	〃	768
未掲	〃	〃	1.90	1.60	0.40	0.9	完形	1962
未掲	〃	サヌカイト	1.70	1.45	0.30	0.5	片脚	SB-01埋土
未掲	〃	黒曜石	1.15	1.15	0.35	0.4	両脚	3429
未掲	〃	〃	1.20	1.20	0.30	0.4	片脚	900
18	石 匙	チャート	7.20	3.30	1.00	17.4	右側縁先端	B-4区一括
19	〃	〃	4.60	2.20	0.80	6.3	完形	1号集石埋土
20	〃	〃	4.25	2.80	0.85	7.7	〃	809
21	〃	〃	5.60	3.05	1.20	15.1	〃	3176
22	〃	〃	4.60	5.35	1.20	27.2	完形	一括
23	〃	〃	3.40	4.55	0.95	15.3	刃部左側	1264
24	〃	〃	7.75	3.40	1.45	30.2	刃部	1653
25	〃	〃	3.10	4.65	0.65	9.3	完形	1737
26	〃	〃	2.65	4.05	0.50	5.2	完形	I-3区一括
未掲	〃	〃	6.45	3.70	1.35	29.2	〃	1890
未掲	〃	〃	7.35	3.25	0.80	17.5	未完成品	1733
未掲	〃	〃	6.70	3.30	1.00	36.1	刃部	1633
未掲	〃	〃	3.30	5.70	1.00	13.1	〃	229
未掲	〃	〃	3.90	3.25	0.80	10.4	〃	2935
未掲	〃	〃	3.70	3.65	1.05	10.7	刃部右側	410
未掲	〃	珪質岩	5.10	5.90	1.15	23.1	〃	2435
未掲	〃	チャート	3.35	3.90	0.75	10.4	刃部右側	1220
27	削 器	〃	3.70	2.85	1.30	30.7	先端部	埋納土坑一括
28	〃	〃	2.60	2.85	0.90	5.3	打点部	2893
29	〃	〃	4.80	4.20	1.45	4.1	打点部	2210
30	〃	〃	6.35	5.10	1.55	53.2	完形	H-4区IV層上
31	〃	〃	2.60	2.85	0.90	14.9	〃	一括
32	〃	〃	5.40	3.35	1.05	66.8	〃	1551
33	〃	〃	5.75	3.10	0.90	15.3	〃	3256
34	〃	〃	2.65	2.15	0.85	4.1	打点部	2084
35	〃	〃	6.45	4.50	1.20	40.6	完形	320
36	〃	サヌカイト	7.45	3.05	1.45	32.3	左側縁部	一括
37	〃	チャート	7.05	3.30	1.45	24.0	完形	3150
38	〃	〃	5.30	4.85	1.55	31.6	〃	3595
39	〃	〃	4.25	2.70	0.75	7.9	〃	4044
40	〃	〃	5.25	5.10	1.90	40.9	〃	1254
41	〃	〃	3.70	2.90	1.30	12.1	〃	3248
42	〃	硬質頁岩	9.10	5.20	1.60	71.4	〃	一括
43	石 鏃	チャート	3.40	1.25	0.55	1.8	完形	1号土坑埋土
44	二次加工ある石器	〃	3.35	2.40	0.50	4.4	先端	1092
45	異形石器	安山岩	3.60	3.25	0.90	4.9	片脚	79
46	二次加工ある石器	硬質頁岩	7.45	4.10	1.70	39.2	完形	〃
47	磨製石斧	玄武岩質	9.85	5.20	2.05	126.5	〃	2434

第7表 石器計測表②

No.	器種	石材	計 測 値				欠失部位	登録番号
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
48	打製石斧	安山岩	9.80	4.10	1.10	45.0	刃部端	5号集石埋土
49	磨製石斧	泥 岩	9.35	3.75	1.35	62.7	完形	Ⅲ層一括
50	環状石斧	砂岩	6.10	5.30	1.05	42.3	〃	一 括
51	二次加工ある石器	チャート	5.30	4.05	1.50	26.2	〃	1049
52	使用痕ある剥片	〃	4.50+ α	4.55	1.50	6.6	先端部	164
53	〃	〃	3.75+ α	3.45	0.65	6.9	〃	73
54	〃	〃	8.50	4.35	0.90	38.5	完形	3197
55	〃	〃	5.65+ α	4.65	1.20	33.0	先端部	72
56	〃	〃	5.25+ α	5.60	1.05	39.5	〃	756
57	〃	〃	3.90+ α	4.20	0.45	9.4	〃	74
58	〃	〃	4.35	3.45	0.50	10.2	完形	2232
59	〃	安山岩	6.40	1.75	0.45	6.9	〃	O-3区V層上
60	〃	チャート	5.55	3.85	0.60	17.1	〃	O-2区VI層上
61	〃	〃	2.70	4.20	1.05	10.7	〃	2681
62	〃	〃	6.00	3.60	1.20	23.7	〃	2543
63	〃	〃	4.50	3.45	1.05	16.3	〃	387
64	〃	〃	3.15+ α	2.80	0.90	6.1	先端部	3341
65	磨石・敲石	砂 岩	12.00	7.20+ α	5.70	759.8	左半部	2767
66	〃	〃	5.85	6.15	6.15	412.1	完形	3659
67	〃	〃	7.85	4.80	2.95	163.2	〃	2392
68	〃	〃	10.55	7.20	4.80	415.7	〃	2458
69	〃	〃	10.50	9.95	5.15	740.7	〃	2459
70	〃	〃	10.80	9.65	5.70	872.7	〃	4000
71	〃	〃	8.85	6.90	4.50	413.6	〃	1721
72	〃	〃	7.80+ α	4.35+ α	5.70	232.7	上半部	637
73	〃	〃	8.10	5.70	5.15	346.2	完形	一括
74	〃	〃	8.40	7.20	3.75	330.9	〃	759
75	〃	〃	19.80+ α	8.10	4.45	984.6	下半部	926
76	〃	〃	5.70	4.15	2.70	80.7	完形	3250
77	〃	〃	9.65	7.80	3.00+ α	219.5	上半部	3253
78	〃	〃	5.85	4.55	3.60	129.9	完形	J-3区一括
79	〃	〃	8.10+ α	4.95+ α	5.15	218.1	左半部	3596
80	〃	〃	4.20	4.15	3.75	85.5	完形	3676
81	〃	〃	8.10	5.05	3.65	201.5	〃	4022
82	〃	〃	12.00+ α	7.05+ α	5.40	398.0	右半部	790
83	〃	〃	9.00	9.05	3.30	399.9	完形	M-3区一括
84	石 核	チャート	6.20	8.50	4.00	74.9	〃	J-4区土坑埋土
85	〃	〃	8.80	4.90	2.90	55.7	〃	1246
86	〃	〃	10.40	6.25	3.30	83.6	〃	1240
87	〃	〃	8.10	6.00	3.50	75.4	〃	1243

4 まとめ

当該遺跡における縄文時代早期の遺構、遺物はⅣ～Ⅴ層上位面にかけて検出された。この包含層の上位には、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰(Ⅲ層)が厚く堆積し、保存状態は極めて良好である。

遺構の分布は、大きくA、とが可能である(第32図)。検出された遺構は、集石遺構と土坑である。集石遺構の特徴から、構成する礫の数が多く土坑内に充填するもの(集中)と、礫の数が少なく土坑の内外に散在した状態のもの(散乱)に細分される。

これらの集石遺構の分布は、前者のタイプがA群に多く、後者のタイプはB群にまとまる。

また、土器型式別の分布では、手向山式がA群に塞ノ神式がB群にそれぞれ集中する傾向が窺える。

このため、遺構の分布と併せて考えると、A群が手向山式を主体として、構成する礫が多く集中的に充填される集石遺構を伴い、B群が塞ノ神式を主体として、構成する礫が少なく散乱した状態の集石遺構を伴うものと二分される。両者の違いが、時間的な差か、集団の差異によるものか、場の機能と利用の差異によるものか今後検討していかなければならない課題であろう。

当該遺跡において検出された塞ノ神式土器は、施文される文様にいくつかのヴァリエーションが認められる。特に、頸部から口縁部にかけての文様では、①貝殻による連続する刺突文を横位あるいは山形に施文するものと、②は①と同様の文様を施文しながら凹線文間に燃糸文あるいは縄文を充填させる胴部の文様が屈曲部以上にも認められるもの、③数条の凹線あるいは沈線文を横位もしくは山形や曲線的に施し、その凹(沈)線の上下に連続する刺突文を施文するものとがみられる。また、胴部文様では(a)凹線文間に燃糸文あるいは縄文を充填させるものと、(b)縦位に施文された燃糸文帯と無文帯を交互に施し、その上から数条の凹(沈)線を横位に施文するもの、(c)数条の沈線文を縦位や斜位に施文するものが認められる。これらの文様の特徴は、接合による個体復元がなされていないため、明確な形状復元には至らないが、当該型式に係る調査例から類推すると継ぎのとおりまとめることが可能であろう。①+(a)は、所謂塞ノ神式土器であり新東氏の細分に従うならば「塞ノ神タイプ」となる。②+(a)は、同様に「鍋谷タイプ」、③+(b)は「石坂上タイプ」に区分されよう。このように当該土器群を細分し、その数量的頻度差を考慮すれば、塞ノ神タイ

プを主体とし鍋谷タイプが存在することになり、付随的に石坂上タイプが認められるといった組成を示すことになる。

手向山式土器は、施文される文様にヴァリエーションが多く、また、複数の施文が同一個体に認められる。その在り方は、部位による文様の違いのみでなく文様の重なりとしても認めることができる。このことと、平椀式に分類できる資料も認められることを考慮に入れるならば、当該型式の中で波状の沈線文を施すものや貼付した凸帯状に刺突文を施すものとは、形式的類縁性があるものと考えられようか。

手向山式土器は、施文される文様にヴァリエーションが多く、同一個体に複数の文様が施文される例が認められる。このことについては、城・馬場遺跡の調査報告において指摘されていることと合致する(大田、松舟1990)。また、その際、押型文を施文する壺形土器が確認されているが、同様のものが当該地点においても検出されている。この種の土器には、凸帯文を巡らしその上部に原体による刺突を連続的に施すもので、口縁部が窄まる形態の特徴を有する一群も認められる。

これらの文様を有する土器は、天道ヶ尾遺跡においても確認され、所謂「天道ヶ尾式」の型式設定となった土器と類似性を有する。

このことから、西住氏が述べるように平椀式土器との系統性を考慮する必要があるであろう(西住 1990)。

石器類では、石鏃の数量に比べて石匙や削器といったスクレイパー類や磨石・敲石類が多く組成する点の特徴として指摘できる。石匙には、両面調整を綿密に施す例が少なく、つまみ部の作り出しと周縁加工を施す点で共通している。このことから、表裏面に素材剥片の剥離面を残すものが認められ、機能上最も類似する削器に用いられる素材剥片の在り方との比較を可能にしている。その結果、素材剥片の形状には大きな差異は認められない。ただし、両者の最大厚の平均値は、石匙が1.00cmであるのに対して削器が1.26cmと、少なからず削器に厚みのある素材が用いられていることが窺える。

石匙は、つまみ部と刃部との位置関係や全体形から縦型、横型と両者の中間的なタイプの3者がみられ、素材剥片の形状の差によるものと理解される。このことから、石匙と削器は主要剥離面の打点部直下の厚さが大きく影響し、つまみ部の設定に適した厚みの剥片を目的的に選択し、石匙として作り上げていると理解できる。

第IV章 総括

第1節 旧石器時代（細石刃文化期）

細石刃文化期に属する資料は、細石刃核23点、細石刃115点、槍先形尖頭器2点である。これらの資料は、前述したように後続する縄文時代早期の遺物と空間的に重なり、また層位的にも一部重複する状況が認められた。そのため他の石器については区分せず縄文時代に含めて報告を行い、当該期の石器組成については検討することができなかった。遺物の分布は、調査区の東側に集中する。

第III章第1節1-4)において指摘したとおり、当該遺跡で検出された細石刃核は、形態的に①~②の特徴が認められ、重複するが再度記述しておく。①打面調整を有し、背面側に傾斜する共通点が認められる。②作業面の幅が狭いものと広いものと二者が存在する。③側面調整を施すものは認められない。④左右両側面及び背面に礫面あるいは転礫面をもつものが多い。⑤小亜角礫を素材として利用する。⑥石材は、桑ノ木津留産黒曜石を利用している。

このことから野岳・休場型細石刃核の技術的範疇に含まれるものと理解される。

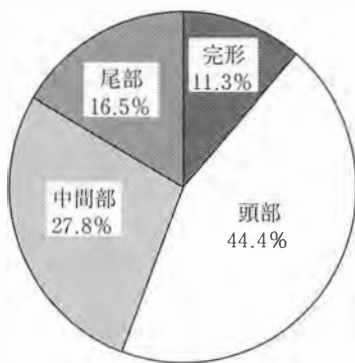
これらのうち④については、当該遺跡資料の特徴と

して特筆すべきものであろう。角柱形をなす細石刃核の複数の面に礫面や転礫面を残すことは、準備された石核素材の原石の大きさや形状、その利用の在り方といった情報を提供するものである。

また、細石刃核の作業面に残る剥離痕からは、細石刃の幅に大きな差異は認められず、細石刃核の作業面の高さの違いからくる長さの差異が存在するのみである。しかし、細石刃の幅には、細石刃核の作業面観察で得られたデータと合致するものが大半で全体の81.7%であるが、18.3%の幅の広い細石刃が認められる。後者の背面に残る稜からは、複数の先行する剥離痕が観察できる。両者の間で稜の数に違いが見られず、両者は同一の細石刃核から剥離されたものとは考えにくい。後者を剥離した細石刃核は当該遺跡あるいは調査地点に残されなかった可能性も指摘でき、作業面の幅が広い細石刃核が存在した可能性も考えられよう。

また、遺跡出土の土器に関する観察結果から、草創期に属する資料は確認されなかった。これらの点を含めて、今後、当該資料の時間的位置づけがなされるべきであると考えられる。

Fig. ① 細石刃の残存部位



高さ(mm) Fig. ③ 細石刃核の高幅比

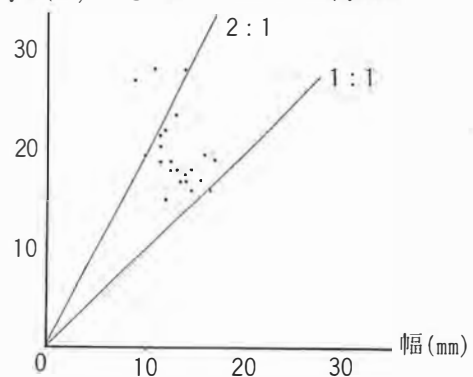
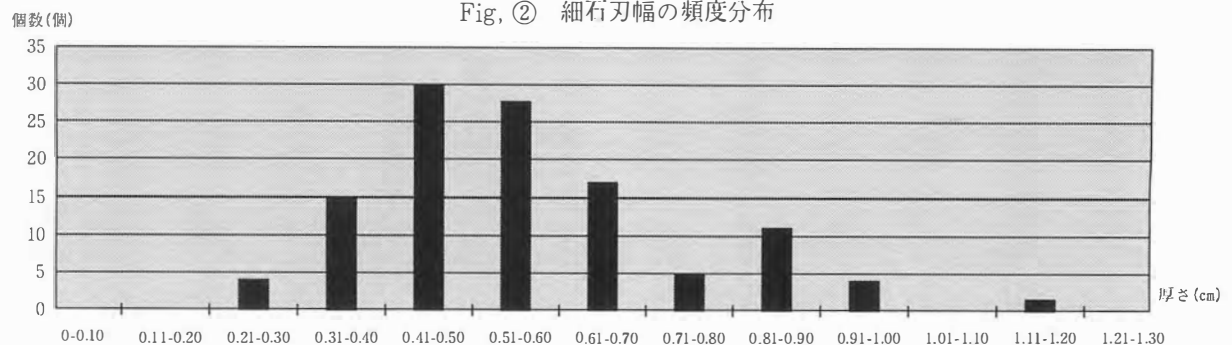


Fig. ② 細石刃幅の頻度分布



第2節 縄文時代早期

当該遺跡における縄文時代早期の遺構、遺物はⅣ～Ⅴ層上位面にかけて検出された。この包含層の上位には、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰(Ⅲ層)が厚く堆積し、保存状態は極めて良好である。

第Ⅲ章第2節-4において記述したとおりであるが、以下に項目ごとにまとめる。

1) 遺構と分布

遺構の分布は、大きくA、B群の2群に区分することが可能である(第32図)。検出された遺構は、集石遺構と土坑である。集石遺構の特徴から、構成する礫の数が多く土坑内に充填するもの(集中)と、礫の数が少なく土坑の内外に散在した状態のもの(散乱)に細分される。

これらの集石遺構の分布は、前者のタイプがA群に多く、後者のタイプはB群にまとまる。

また、土器型式別の分布では、手向山式がA群に塞ノ神式がB群にそれぞれ集中する傾向が窺える。

このため、遺構の分布と併せて考えると、A群が手向山式を主体として、構成する礫が多く集中的に充填される集石遺構を伴い、B群が塞ノ神式を主体として、構成する礫が少なく散乱した状態の集石遺構を伴うものと二分される。両者の違いが、時間的な差か、集団の差異によるものか、場の機能と利用の差異によるものか今後検討していかなければならない課題であろう。

11号土坑(チャート製剥片集積土坑)については、検出された遺物がすべてチャート製の大型剥片であることから、時期を決定する根拠がない。一括製の高い資料であるので、接合を試みたが結果的に接合する資料は確認されなかった。このことから、同一母岩に属するものではなく、別地点において粗割されたのち持ち込まれ、一括して集積されたものである可能性が高く、所謂「埋納遺構」と考えられる。

今後、類例の増加を待って検討すべき遺構であろう。

2) 土器型式と文様構成

当該遺跡において検出され土器型式には、手向山式、塞ノ神式、平橋式、円筒形条痕土器等が確認された。

a 塞ノ神式系土器

塞ノ神式土器には、施文される文様にいくつかのヴァリエーションが認められる。特に、頸部から口縁部にかけての文様では、①貝殻による連続する刺突文を横位あるいは山形に施文するものと、②は①と同様の文様を施文しながら凹線文間に燃糸文あるいは縄文を充

填させる胴部の文様が屈曲部以上にも認められるもの、③数条の凹線あるいは沈線文を横位もしくは山形や曲線的に施し、その凹(沈)線の上下に連続する刺突文を施文するものがみられる。また、胴部文様では(a)凹線文間に燃糸文あるいは縄文を充填させるものと、(b)縦位に施文された燃糸文帯と無文帯を交互に施し、その上から数条の凹(沈)線を横位に施文するもの、(c)数条の沈線文を縦位や斜位に施文するものが認められる。これらの文様的特徴は、接合による個体復元がなされていないため、明確な形状復元には至らないが、当該型式に係る調査例から類推すると継ぎのとおりまとめることが可能であろう。①+(a)は、所謂塞ノ神式土器であり新東氏の細分に従うならば「塞ノ神タイプ」となる。②+(a)は、同様に「鍋谷タイプ」、③+(b)は「石坂上タイプ」に区分されよう。このように当該土器群を細分し、その数量的頻度差を考慮すれば、塞ノ神タイプを主体とし鍋谷タイプが存在することになり、付随的に石坂上タイプが認められるといった組成を示すことになる。

b 手向山式土器

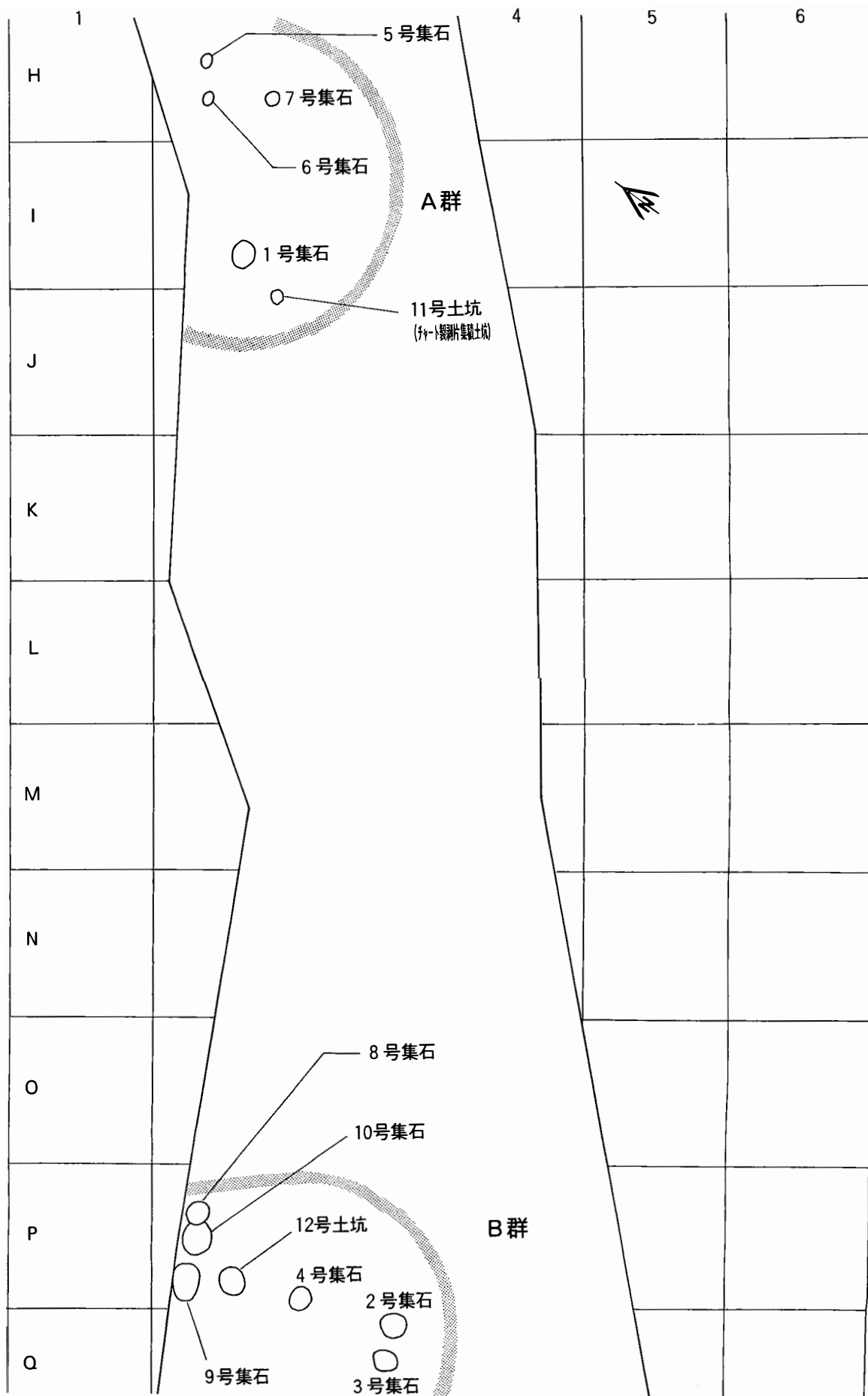
手向山式土器は、施文される文様にヴァリエーションが多く、また、複数の施文が同一個体に認められる。その在り方は、部位による文様の違いのみでなく文様の重なりとしても認めることができ、すでに城・馬場遺跡において指摘されていることである(大田・松舟1990)。また、天道ヶ尾遺跡においては、手向山式土器と平橋式土器との形式的類縁性が指摘され、両者の系統性について論究されている(西住1990)。

このことは、当該遺跡に認められる「平橋式」に分類できる資料やその文様構成等を考慮に入れるならば、当該型式の中で波状の沈線文を施すものや貼付した凸帯状に刺突文を施すものとは、型式的類縁性があるものと考えられようか。

3) 石器組成と技術的特徴

石器類では、石鏃の数量に比べて、石匙や削器といったスクレイパー類が多く、また磨石・敲石類が多く組成する点が特徴といえようか。

これらの石匙には、両面調整を綿密に施す例が少なく、つまみ部の作り出しと周縁加工を施す点で共通している。このことから、表裏面に素材剥片の剥離面を残すものが認められ、機能上最も類似する削器に用いられる素材剥片との比較を可能にしている。その結果、素材剥片の形状といった点では両者間に大きな相違点は認められない。ただし、両者の最大厚の平均値は、



第32図 縄文時代早期遺構配置図

石匙が1.00cmであるのに対し、削器が1.26cmであり、少なからず削器に厚みのある素材が選択されていることが窺える。石匙には、縦型、横型と両者の中間的なタイプの3者がみられ、素材剥片の打点部をつまみ部側に置くものが多い。このことを考慮に入れ両器種を比較するならば、両者は素材剥片の厚みといった点で僅かな差異が認められるのみであり、素材剥片の形状に差異は認められない。このことから、つまみ部を作り出すための打点部直下の厚みが大きく影響している可能性が指摘できよう。

【参考文献】

- | | | | | | |
|-------------|------|---------------------------------------|--------|------|--|
| 乙益 重隆 | 1965 | 「縄文文化の発展と地域性 九州西北部」『日本の考古学』第Ⅱ巻 | | | |
| 賀川 光夫 | 1965 | 「縄文文化の発展と地域性 九州東南部」『日本の考古学』第Ⅱ巻 | | | |
| 木崎 康弘 | 1981 | 「九州地方の細石核」『熊本史学』第55,56号合併号 | | | |
| 〃 | 1983 | 「東日本細石核技術展開についての一考察」『旧石器考古学』26 | | | |
| 〃 | 1986 | 『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告第80集 | | | |
| 〃 | 1987 | 『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告第90集 | | | |
| 〃 | 1990 | 「球磨・人吉地方の先石器時代」『九州上代文化論集』 | | | |
| 江本 直 | 1986 | 『熊本県旧石器時代調査報告書』熊本県文化財調査報告第81集 | | | |
| 肥後考古学会 | 1985 | 『肥後考古』第5号（特集：熊本県の旧石器文化） | | | |
| 西住欣一郎 | 1988 | 『鼓ヶ峰遺跡』熊本県文化財調査報告第96集 | | | |
| 〃 | 1990 | 『天道ヶ尾遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第111集 | | | |
| 鶴島 俊彦 | 1988 | 『村山閣谷遺跡』人吉市教育委員会 | | | |
| 大田 幸博・松舟 博満 | 1990 | 『城・馬場遺跡』熊本県文化財調査報告第110集 | | | |
| 大田 幸博・下村 智 | 1980 | 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』熊本県文化財調査報告第51集 | 新東 晃一 | 1981 | 『中尾田遺跡』鹿児島県文化財調査報告第15集 |
| | | | 〃 | 1982 | 「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ 雄山閣 |
| | | | 〃 | 1989 | 「塞ノ神・平栴式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館 |
| | | | 出口 浩 他 | 1990 | 『横井竹ノ山遺跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(10) |
| | | | 米倉 秀紀 | 1983 | 「縄文時代早期の生業と集団活動」『文学部論叢』第13号 熊本大学 |
| | | | 麻生 優 | 1984 | 『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会 |
| | | | 〃 | 1965 | 「細石器文化」『日本の考古学』Ⅰ 河出書房 |
| | | | 橘 昌信 | 1979 | 「九州地方の細石器文化」『駿台史学』第47号 駿台史学会 |
| | | | 〃 | 1973 | 「九州における細石器文化～細石核の分類と編年試論～」『考古学論叢』1 別府大学文学部 |
| | | | 〃 | 1983 | 「細石器(九州地方)」『季刊考古学』第4号 雄山閣 |
| | | | 〃 | 1984 | 「日本細石器文化の地域性」『駿台史学』第60号 駿台史学会 |
| | | | 池水 寛治 | 1968 | 「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』21 |
| | | | 小林 達雄 | 1970 | 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16 |
| | | | 〃 | 1978 | 「西日本の旧石器文化」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 |
| | | | 安蒜 政雄 | 1979 | 「日本の細石核」『駿台史学』第47号 駿台史学会 |
| | | | 〃 | 1984 | 「日本の細石器文化」『駿台史学』第60号 駿台史学会 |
| | | | 鈴木 忠司 | 1971 | 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8 |
| | | | 小畑 弘巳 | 1983 | 「九州の細石刃文化」『物質文化』41 |

版 图

図版 1



▲ 調査風景（北東から）



▲ 4号集石遺構検出状況



▲ 6号集石遺構検出状況



▲ 7号集石遺構検出状況

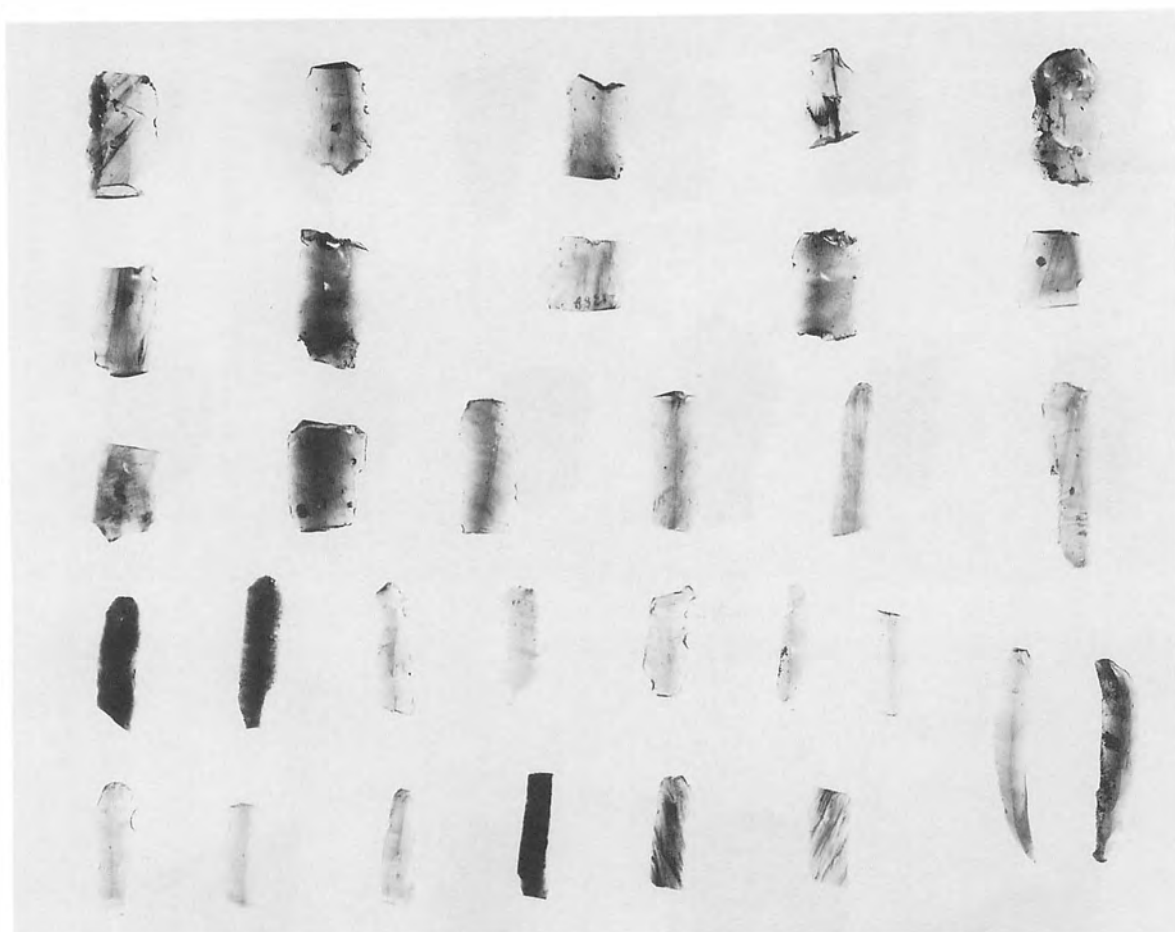


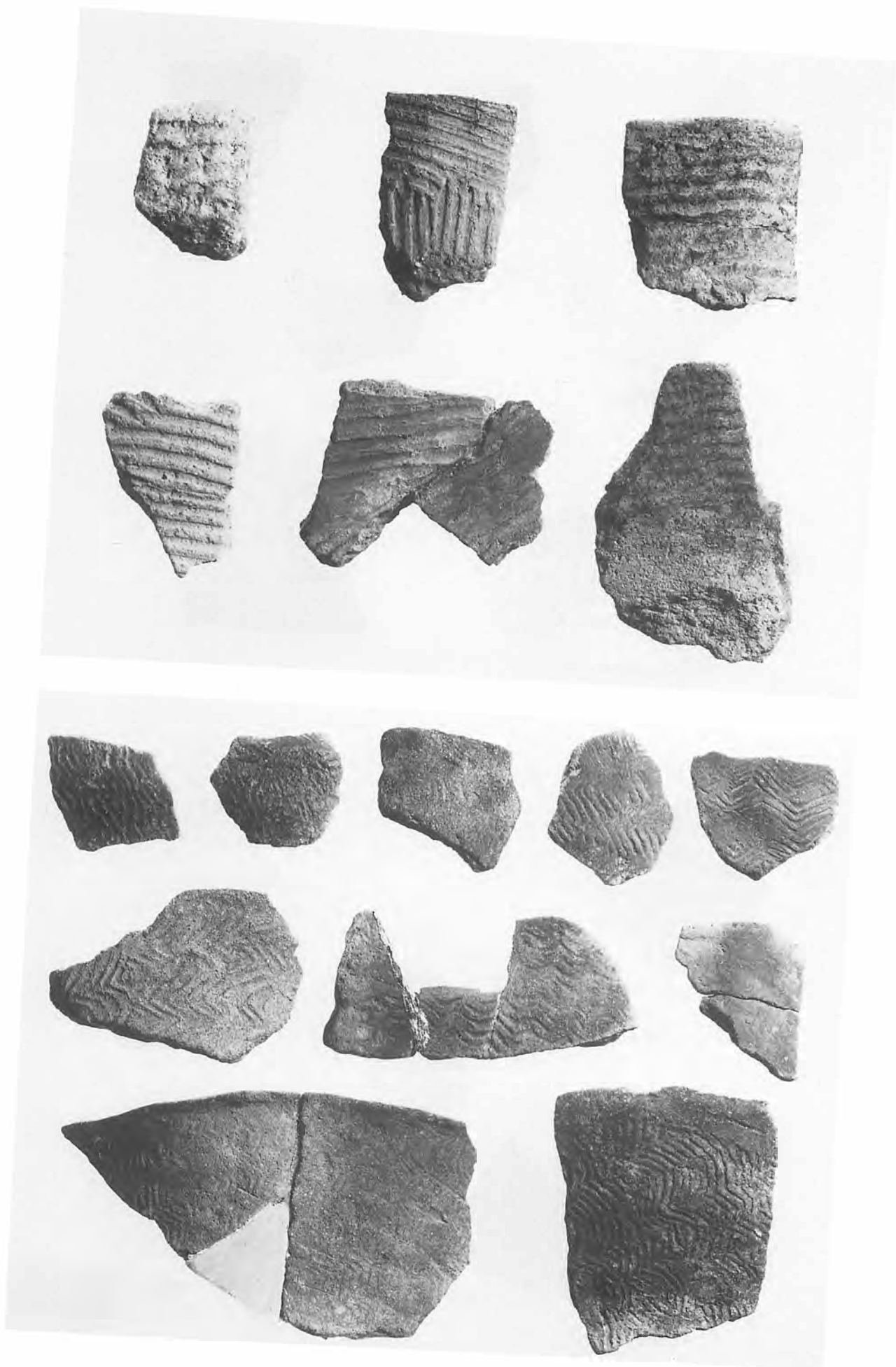
▲ 8号集石遺構検出状況

图版 2

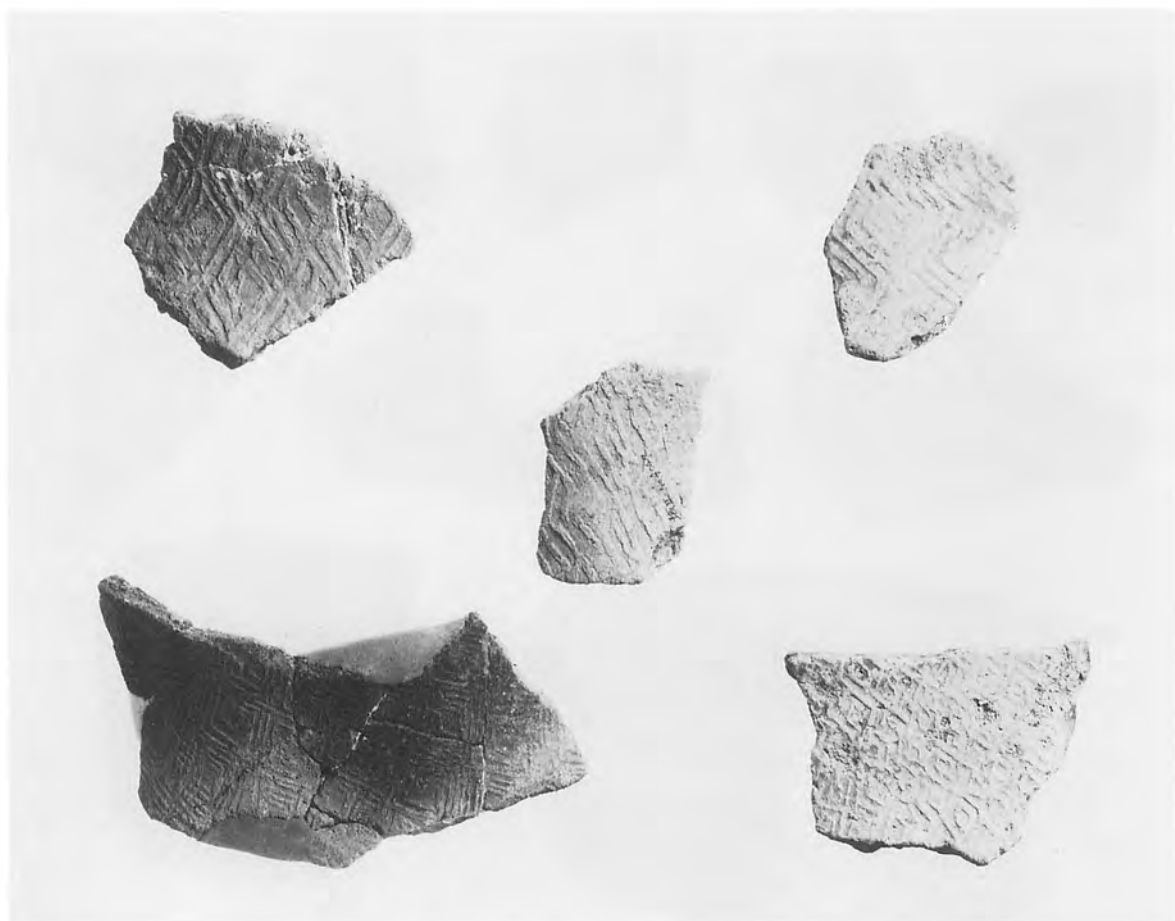


图版 3

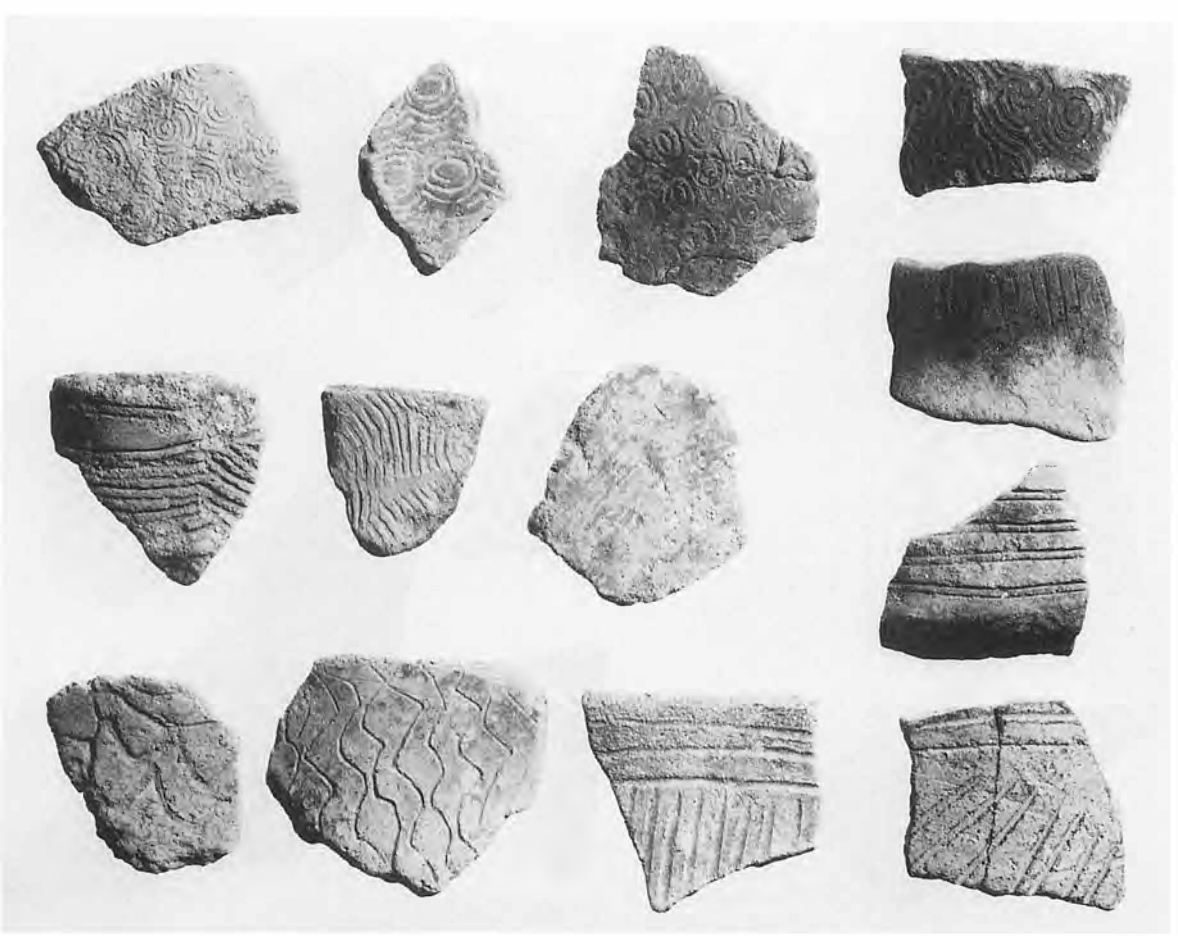
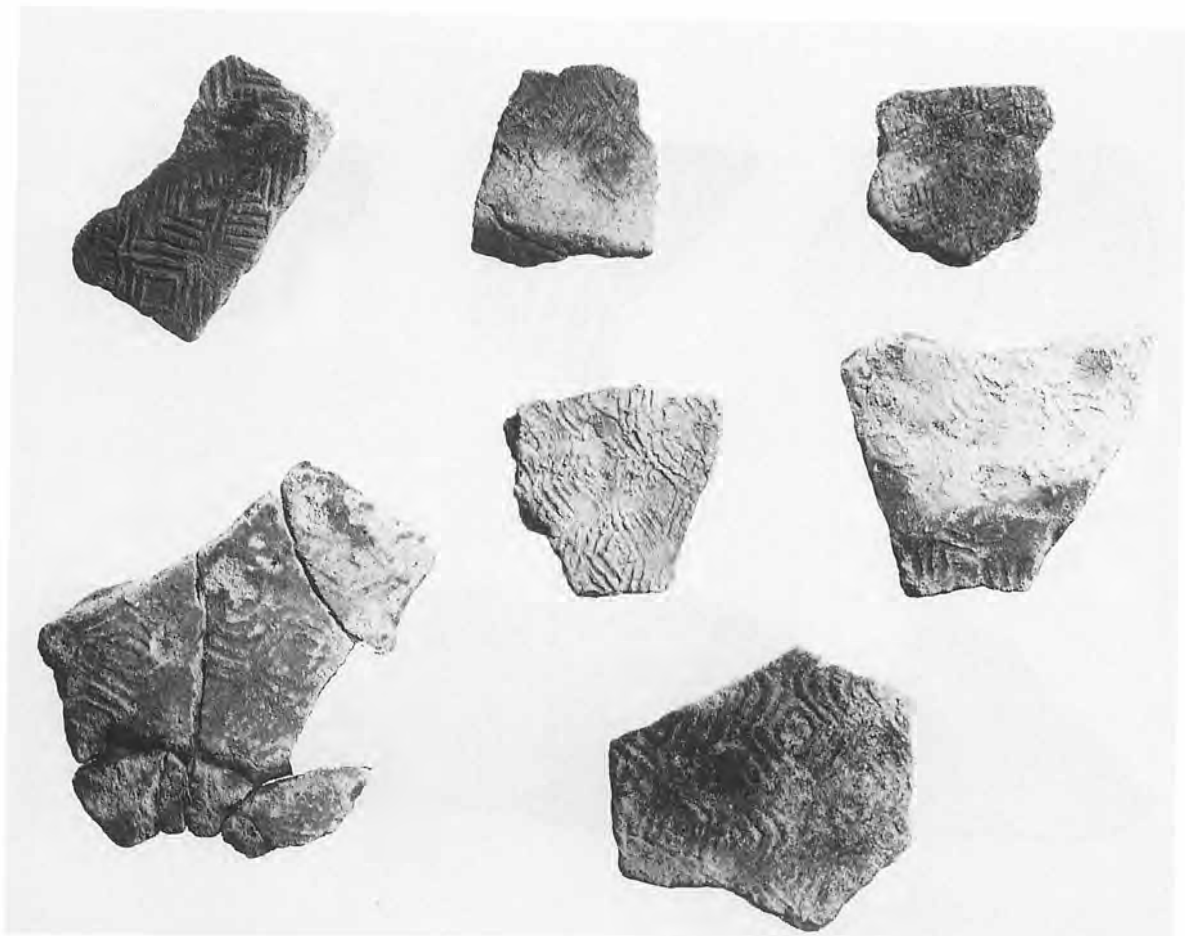




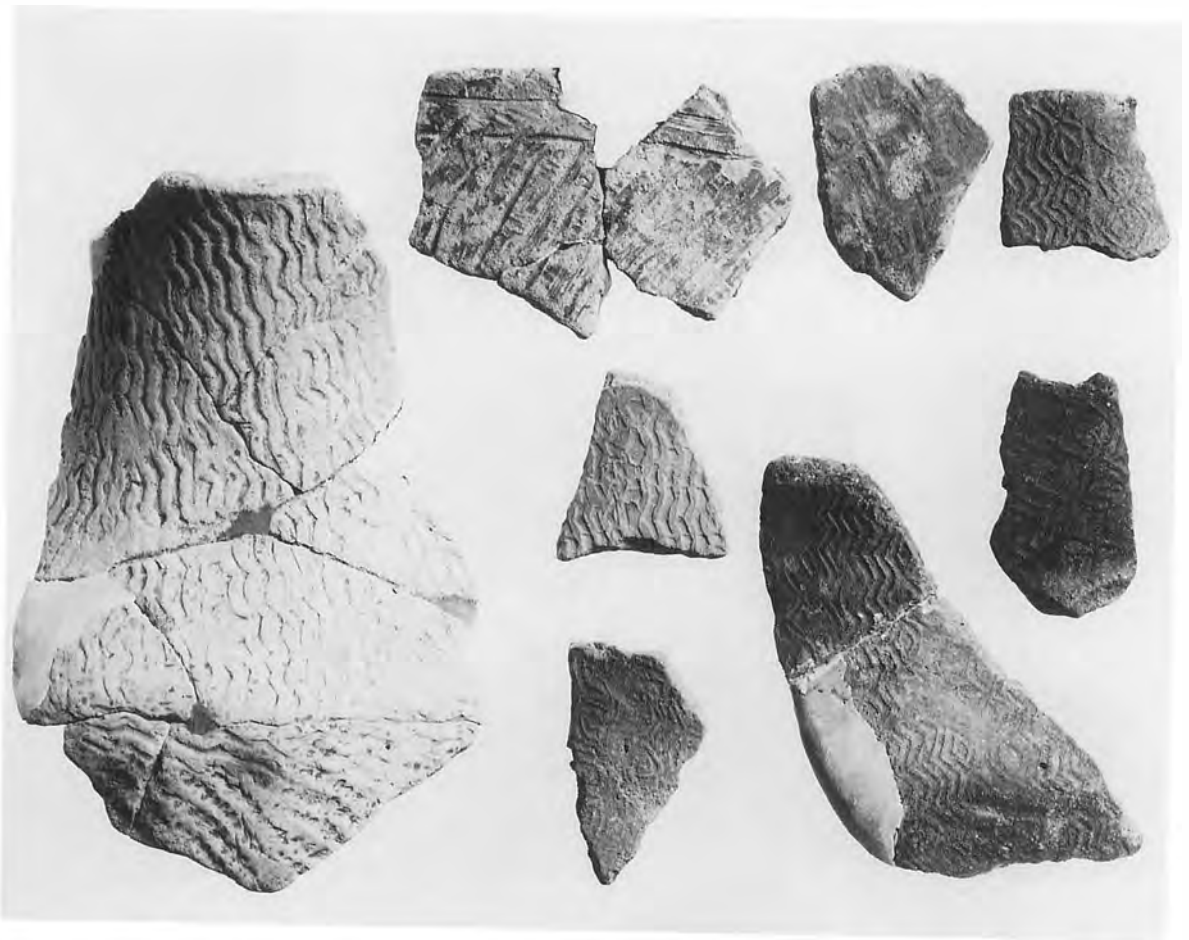
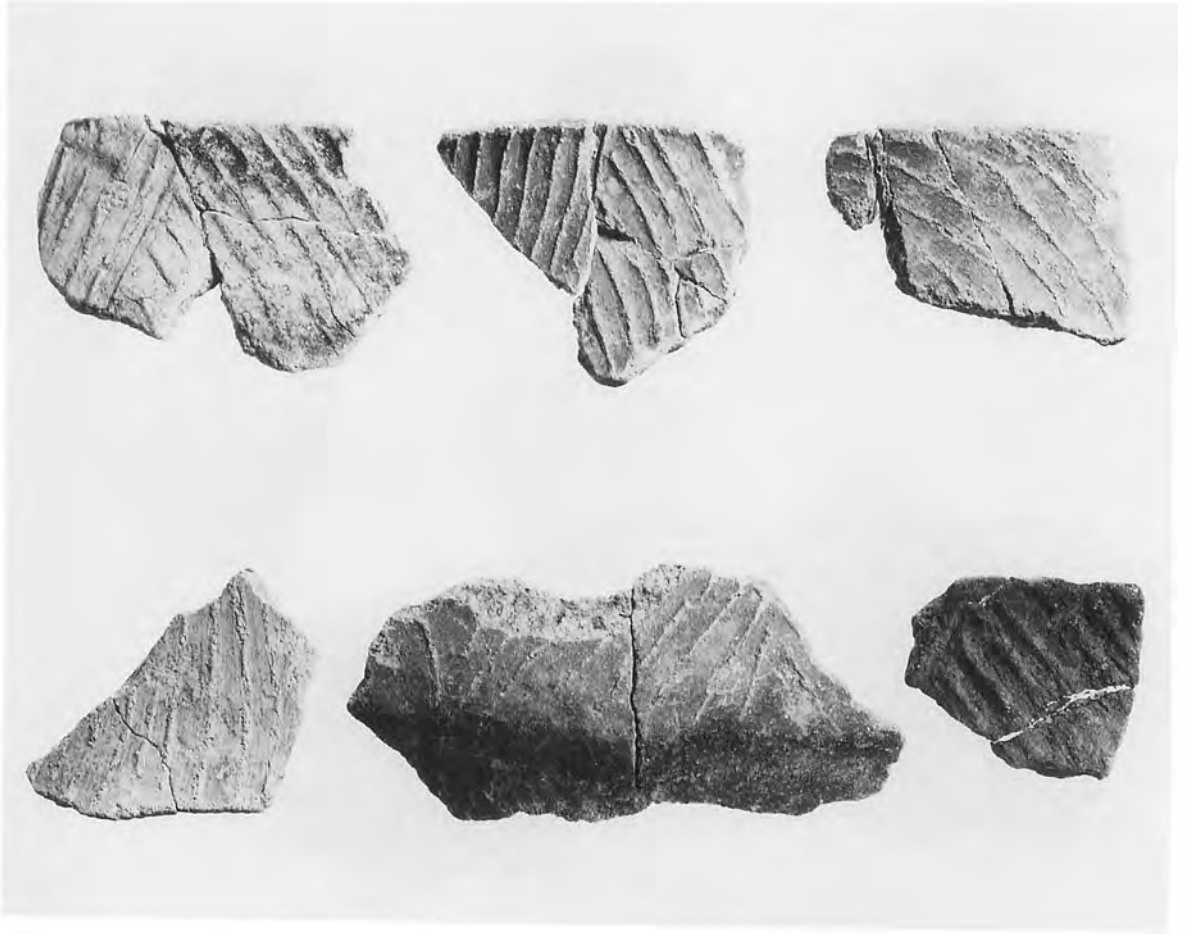
图版 5



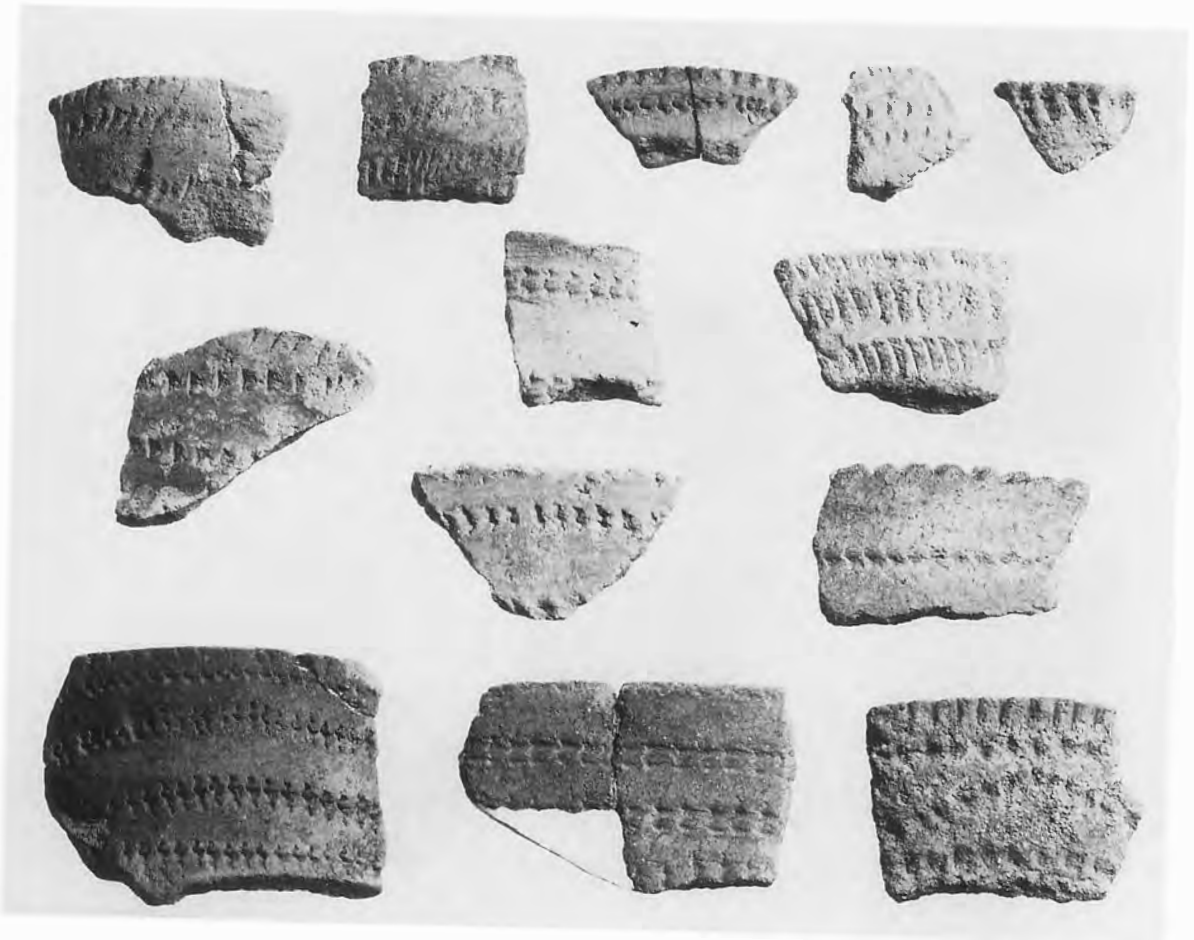
图版 6



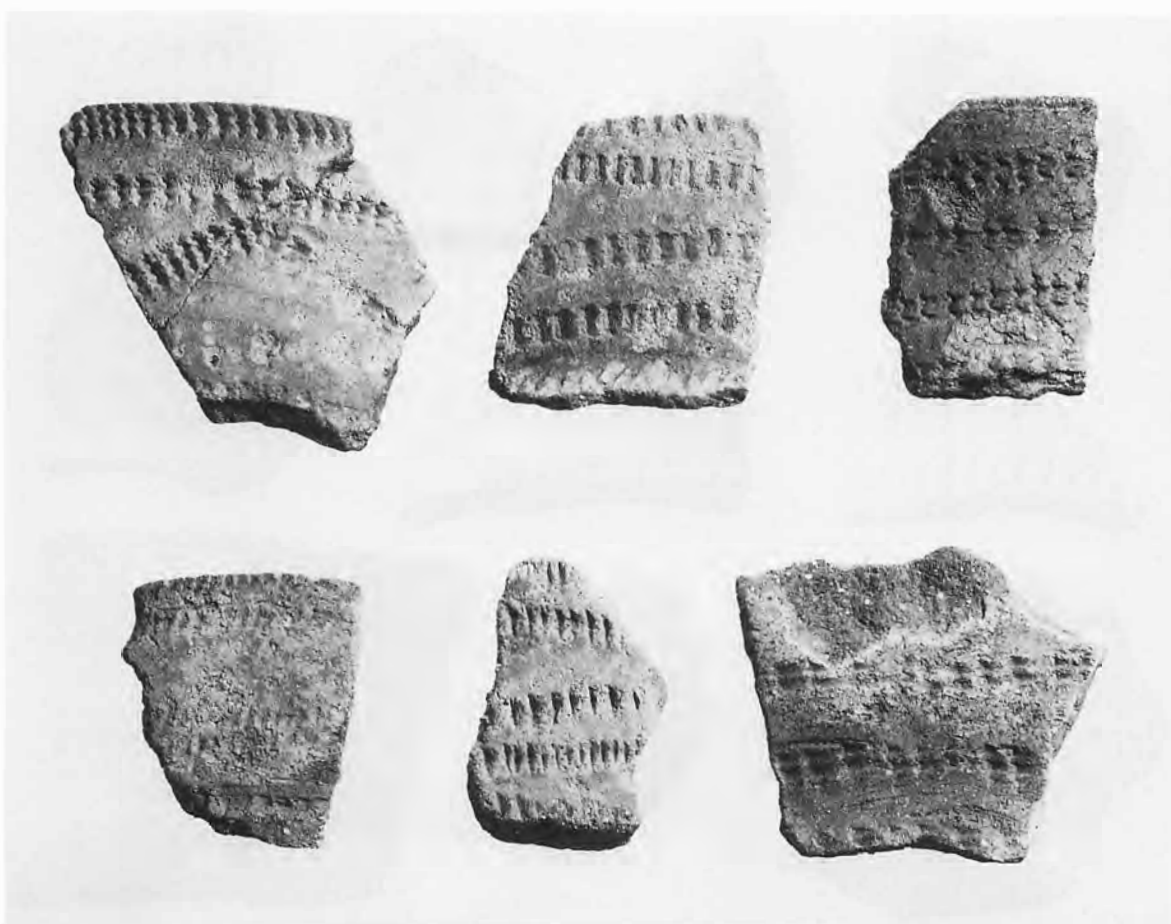
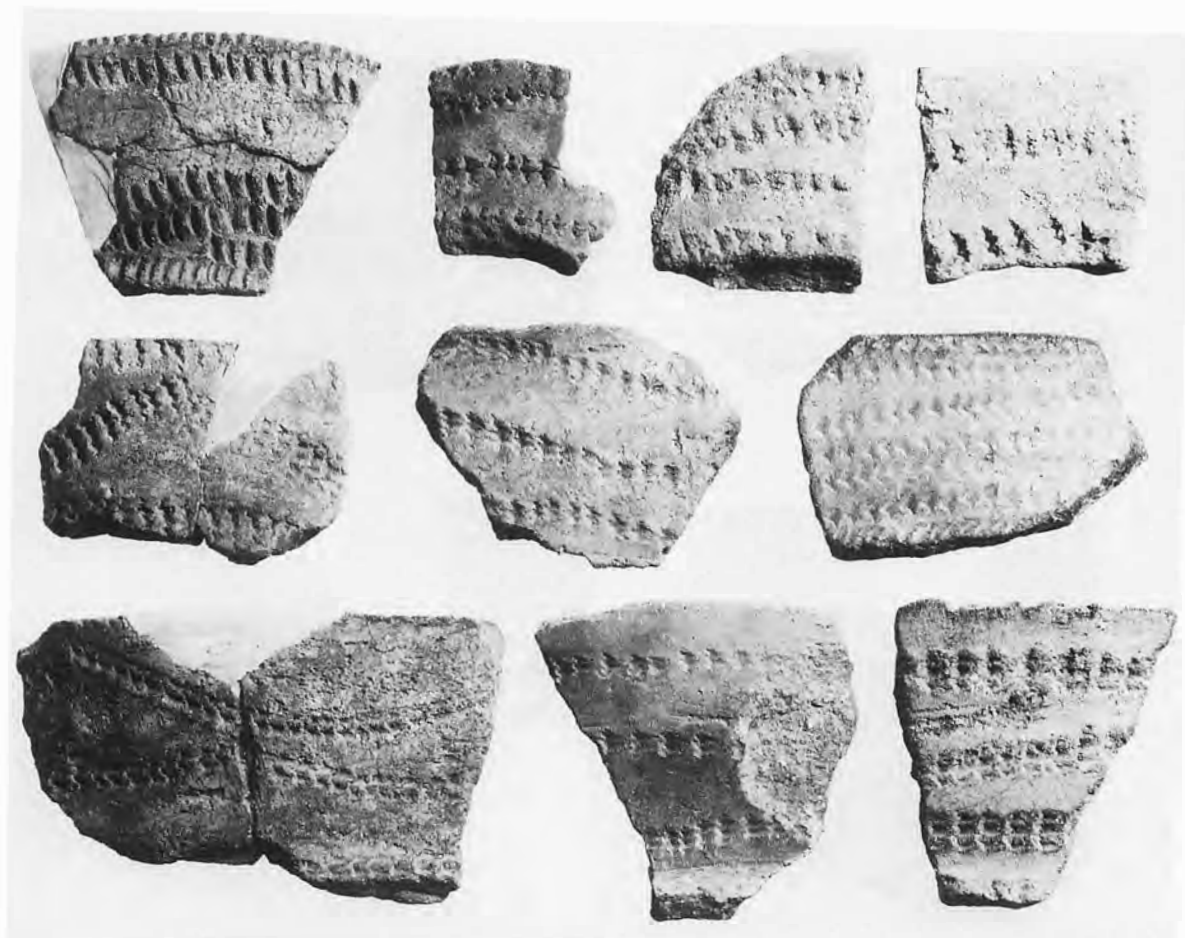
图版 7

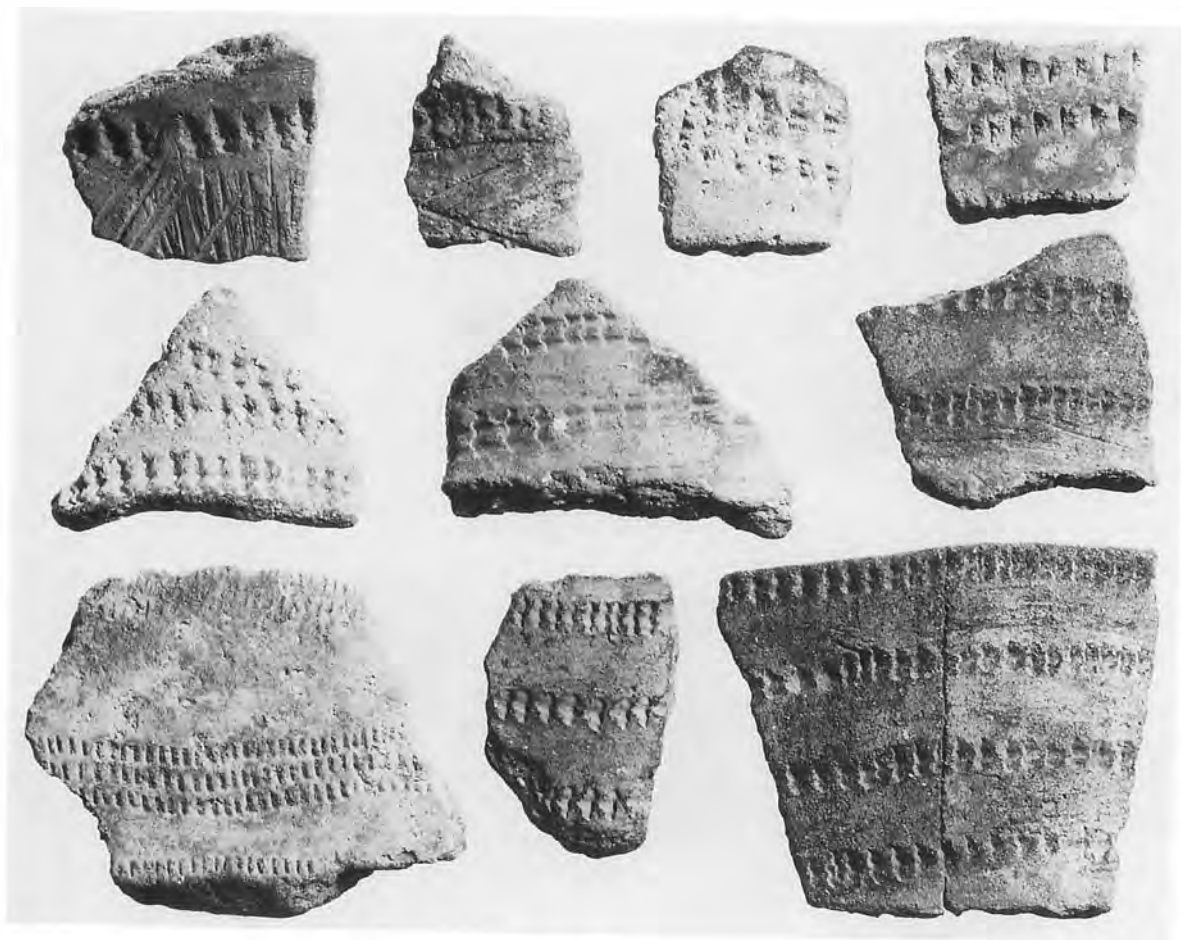
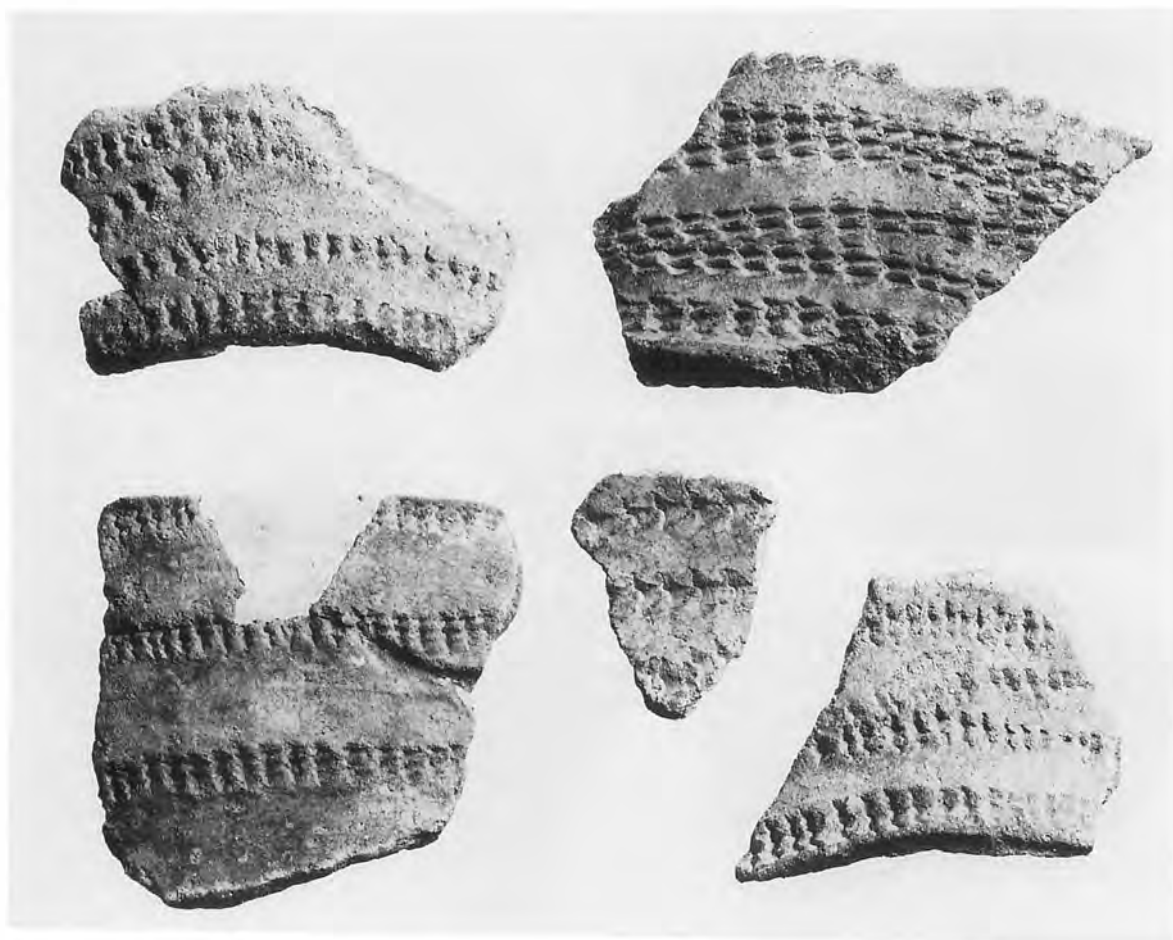


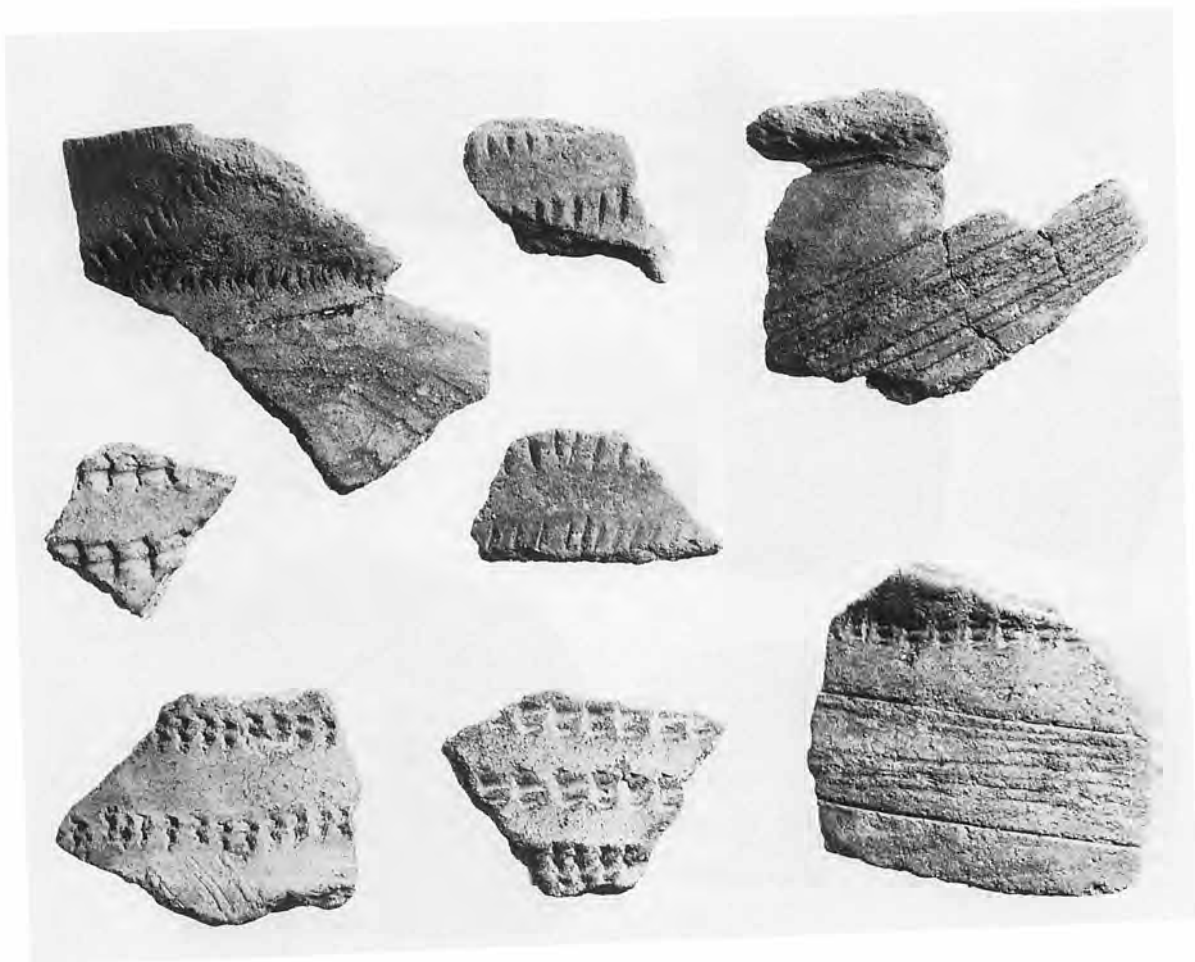


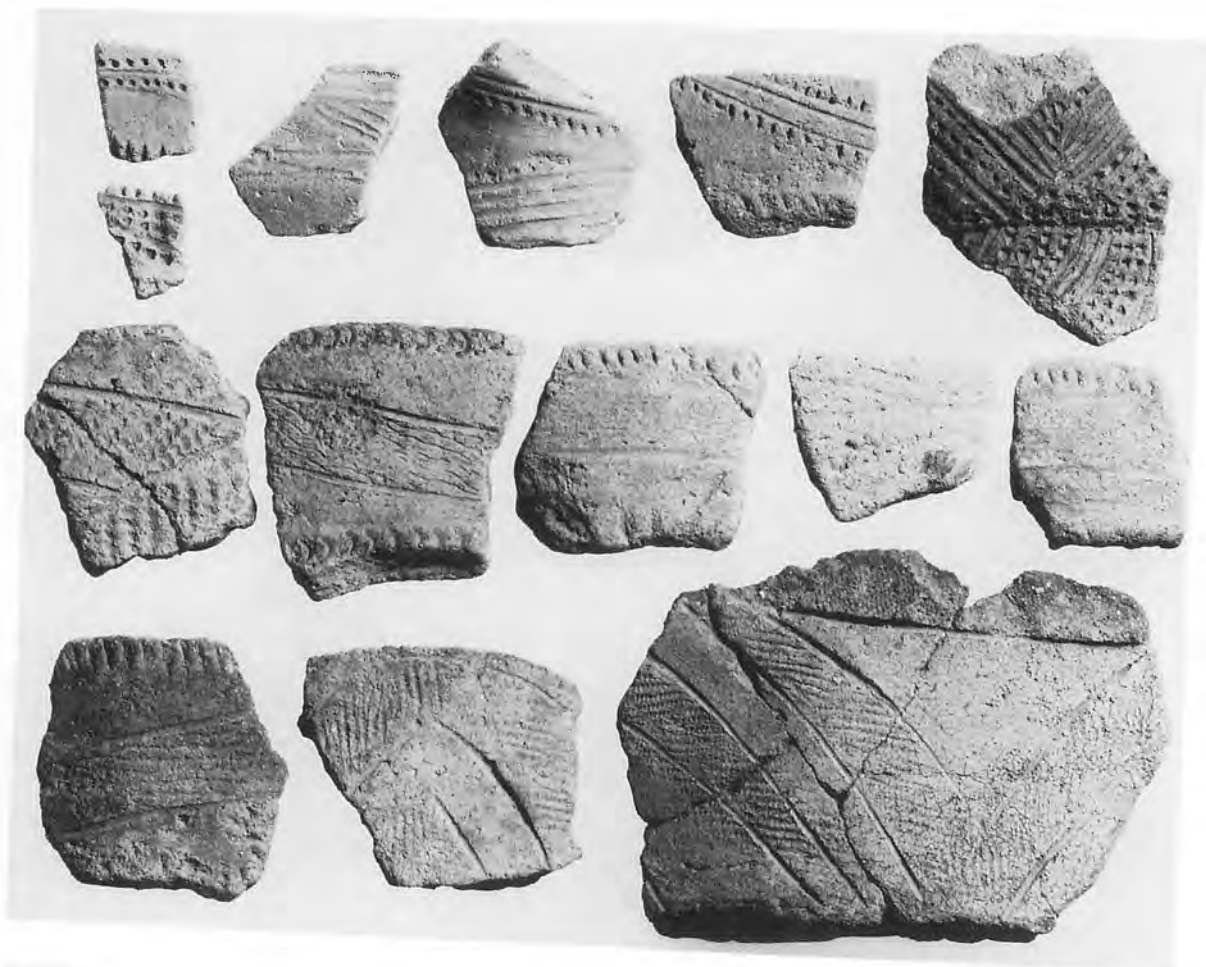


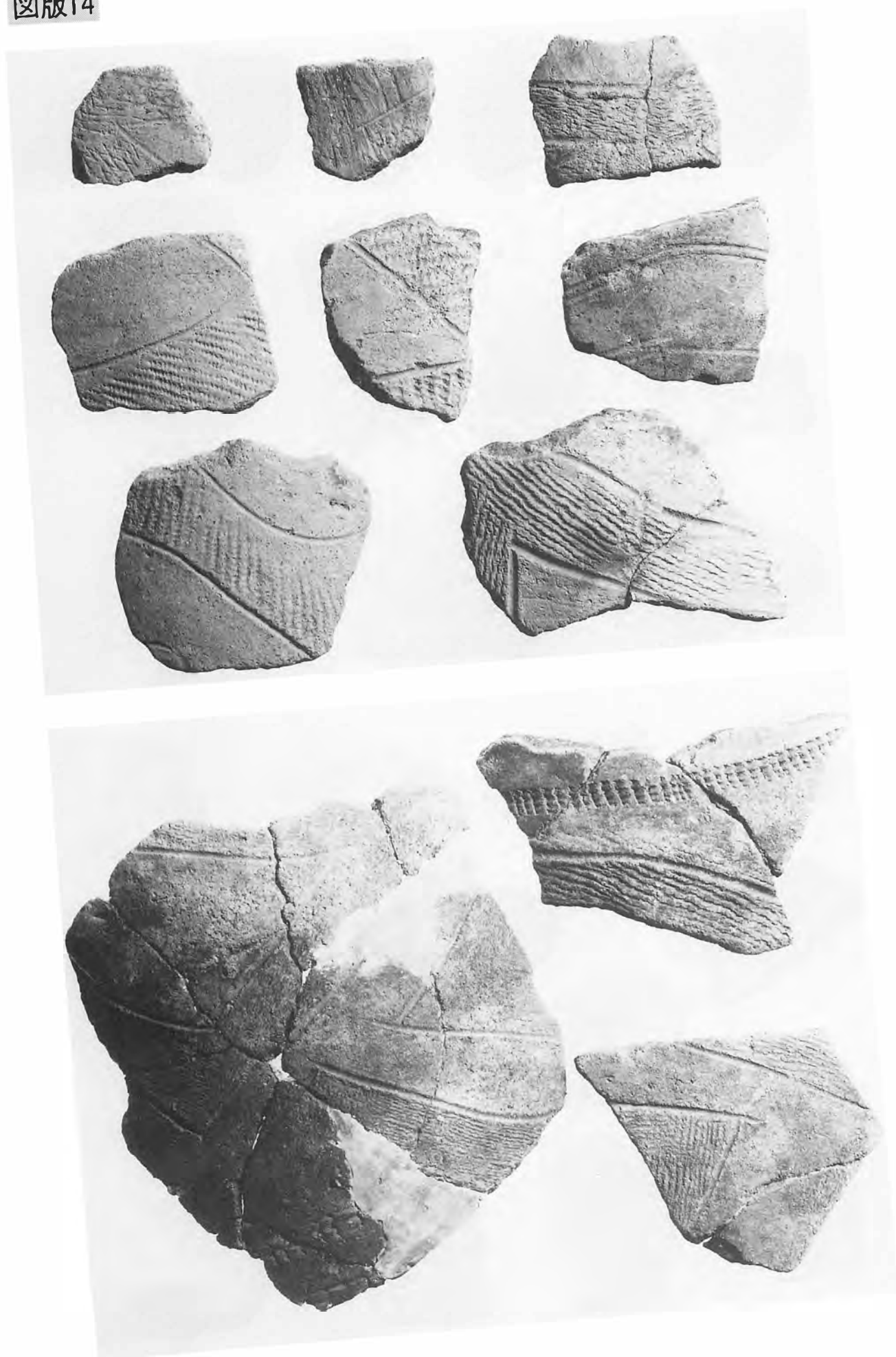
图版10



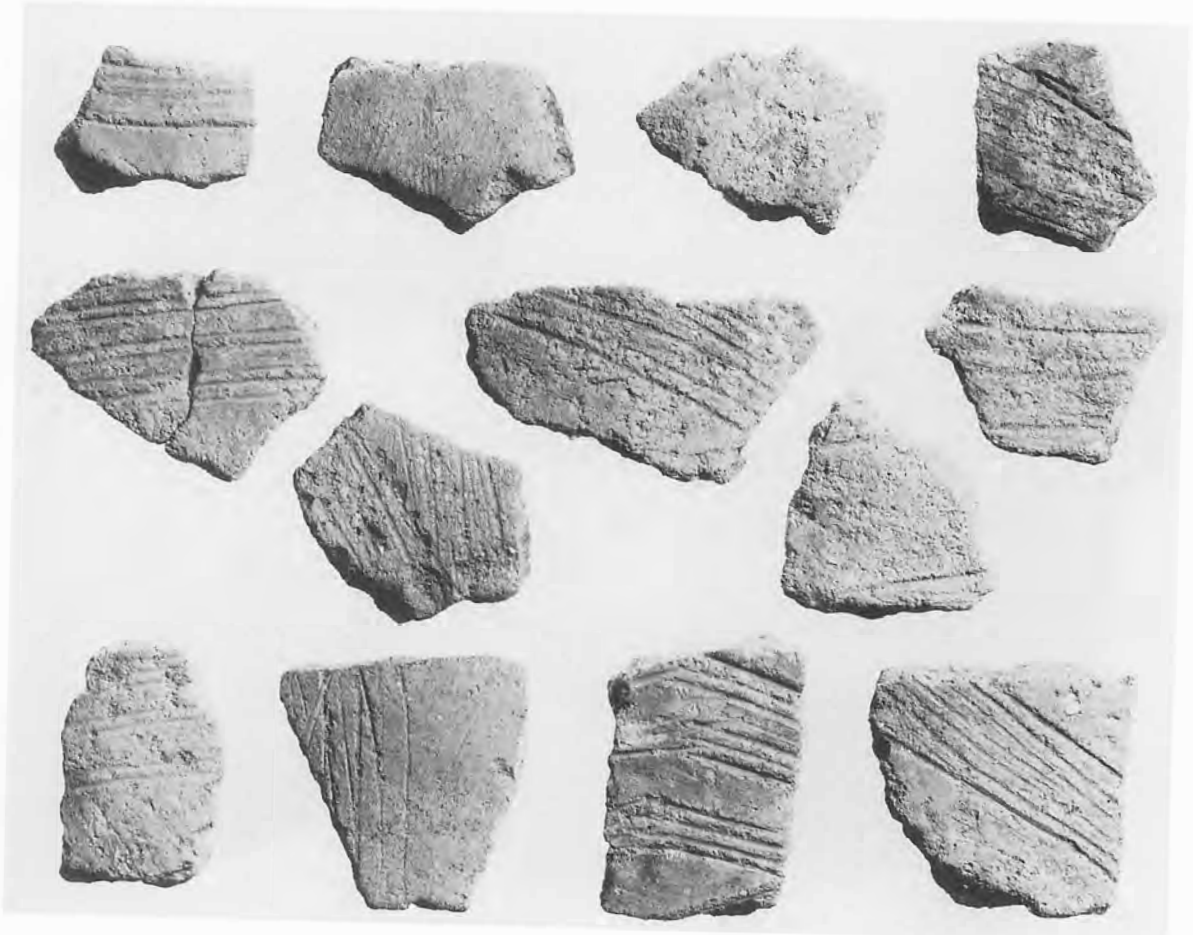
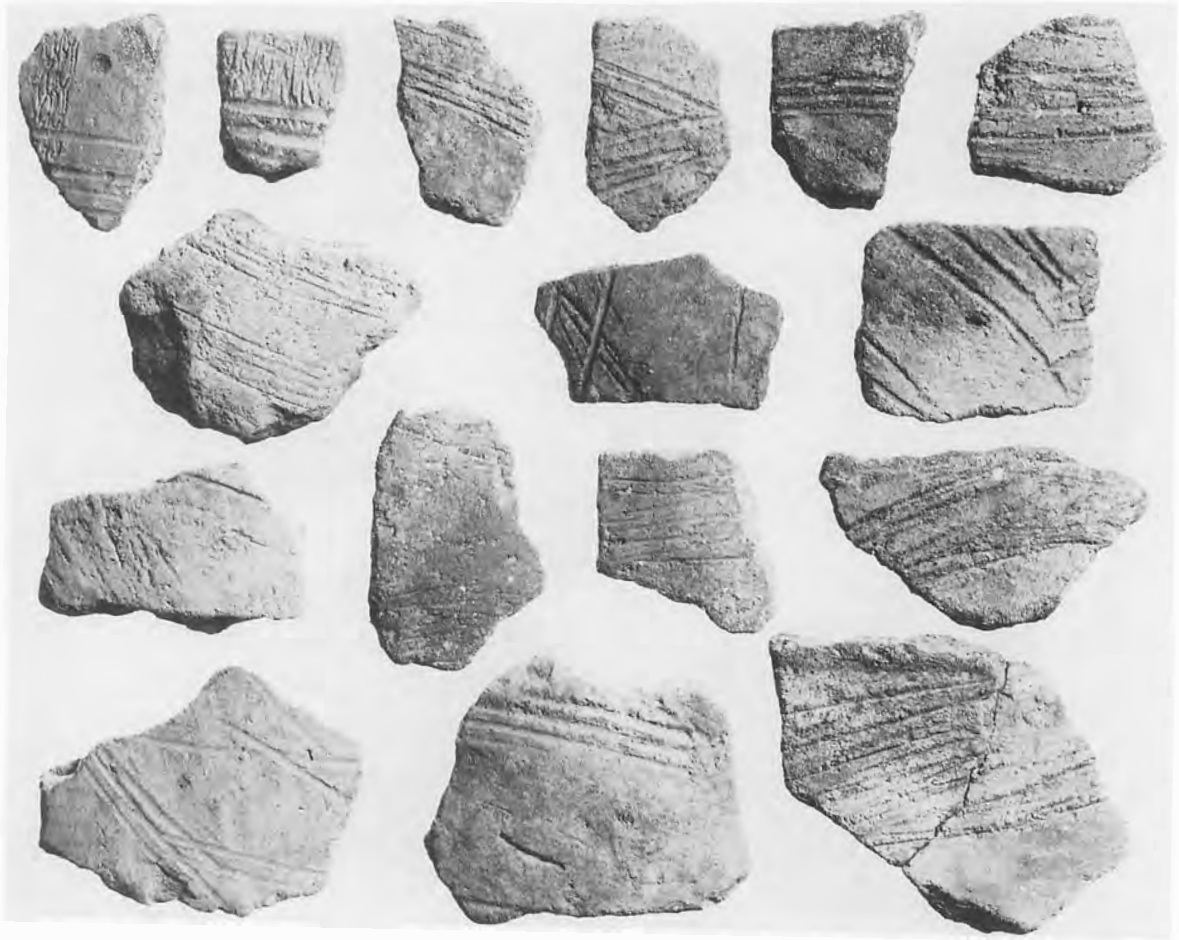


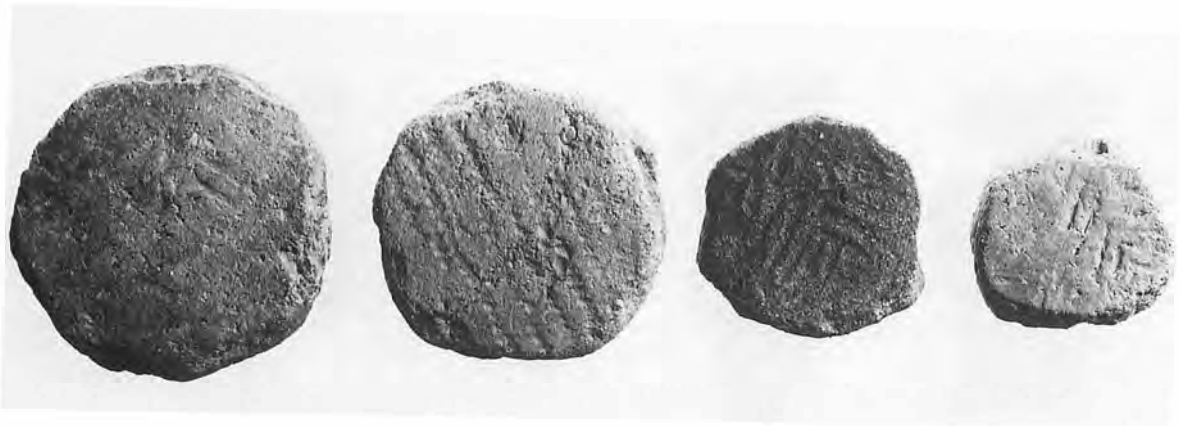
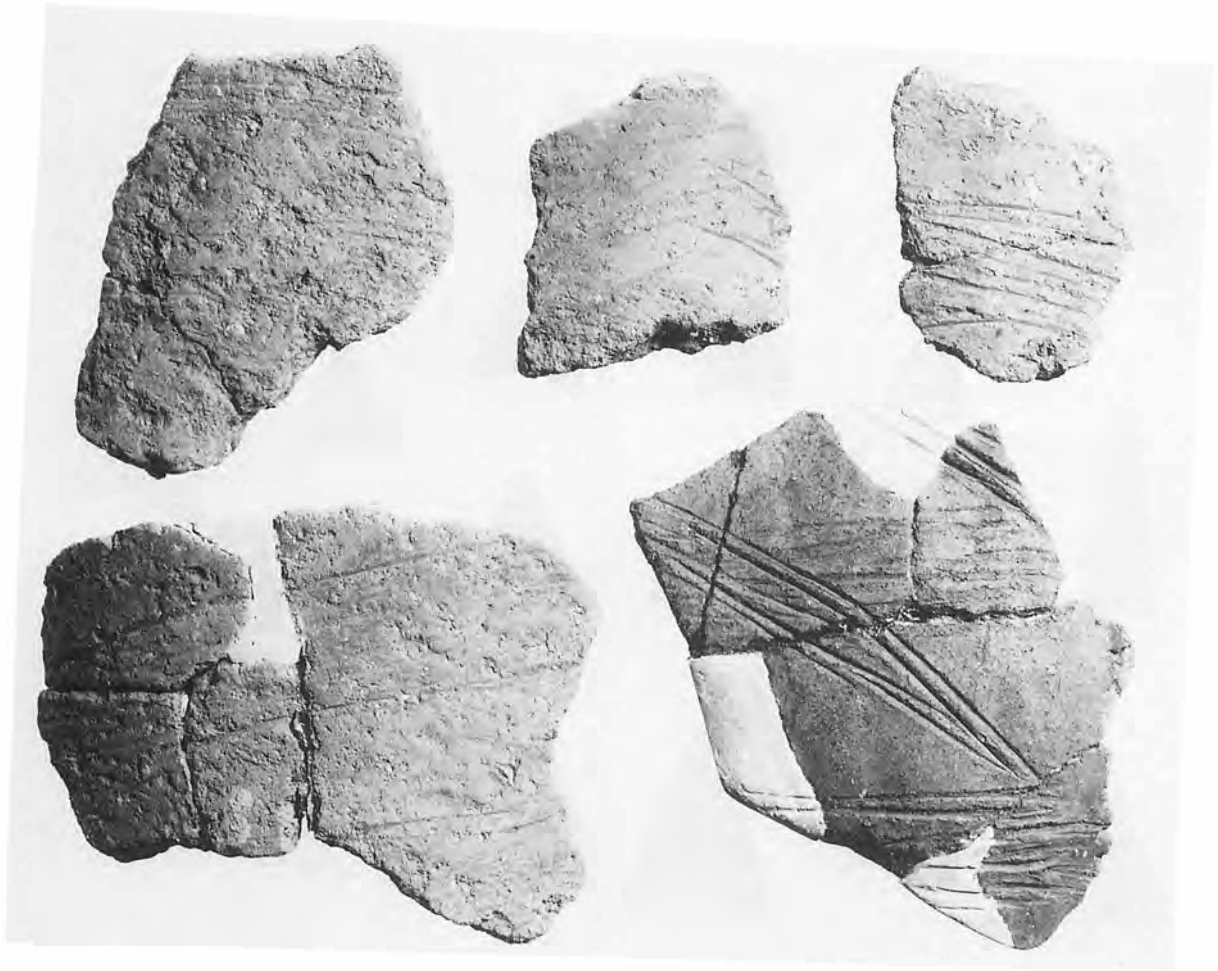




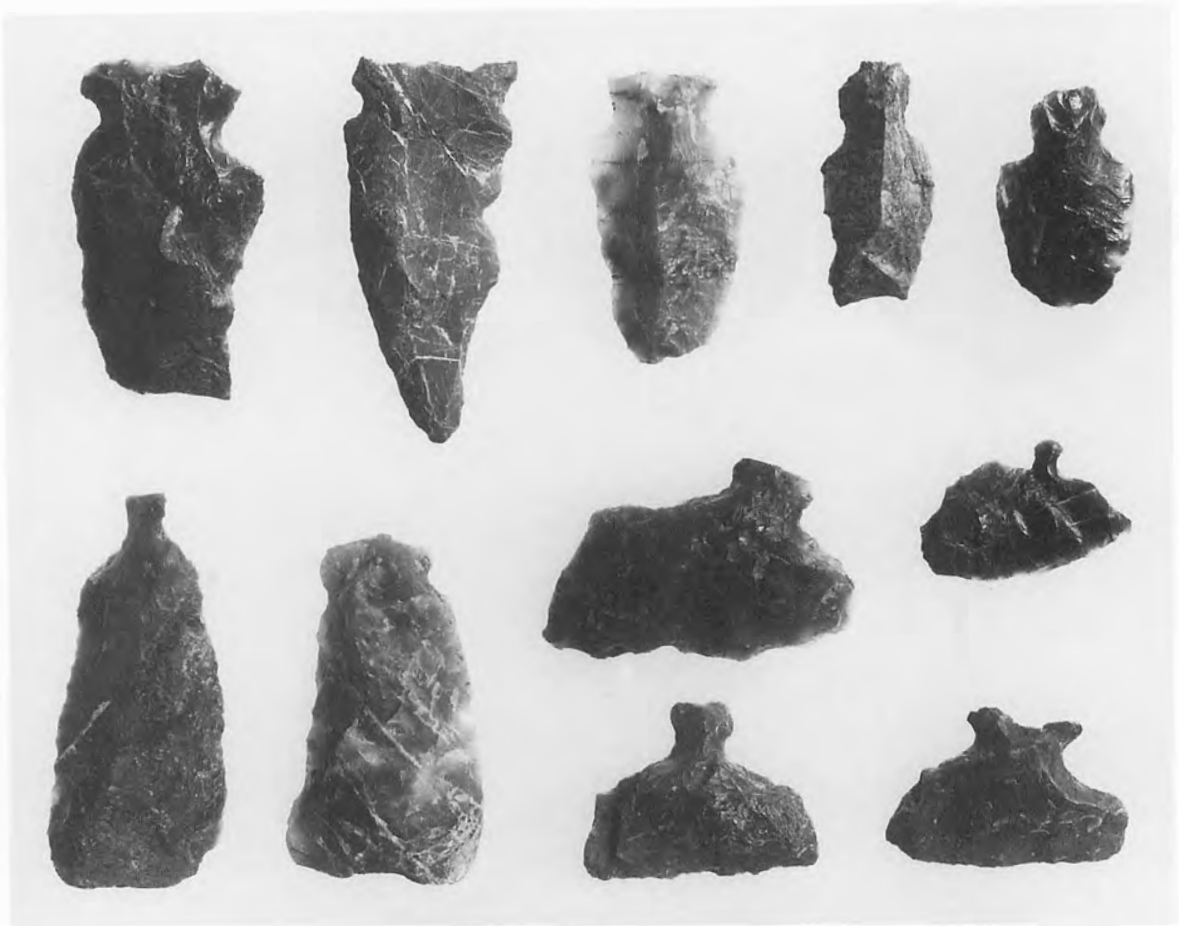


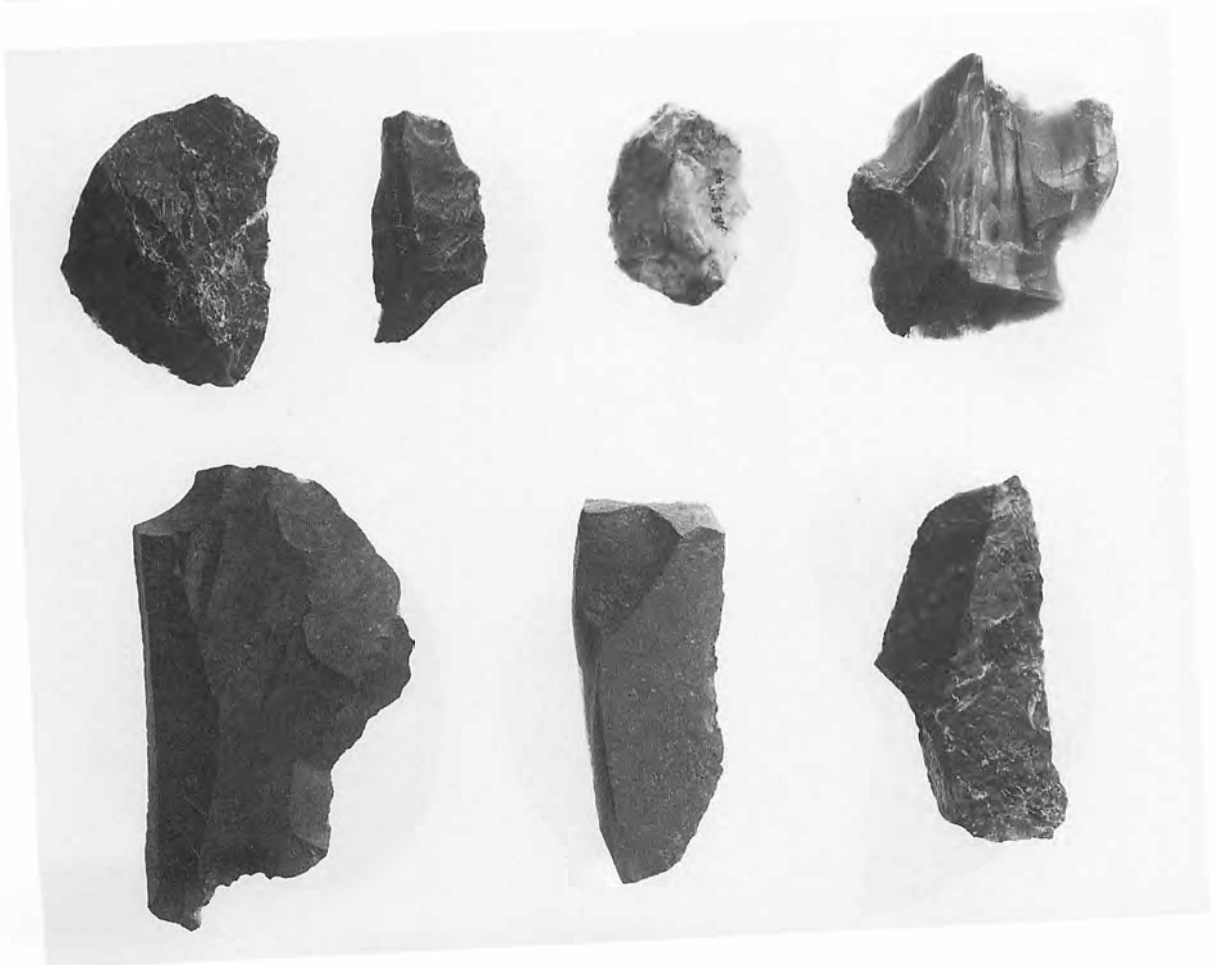
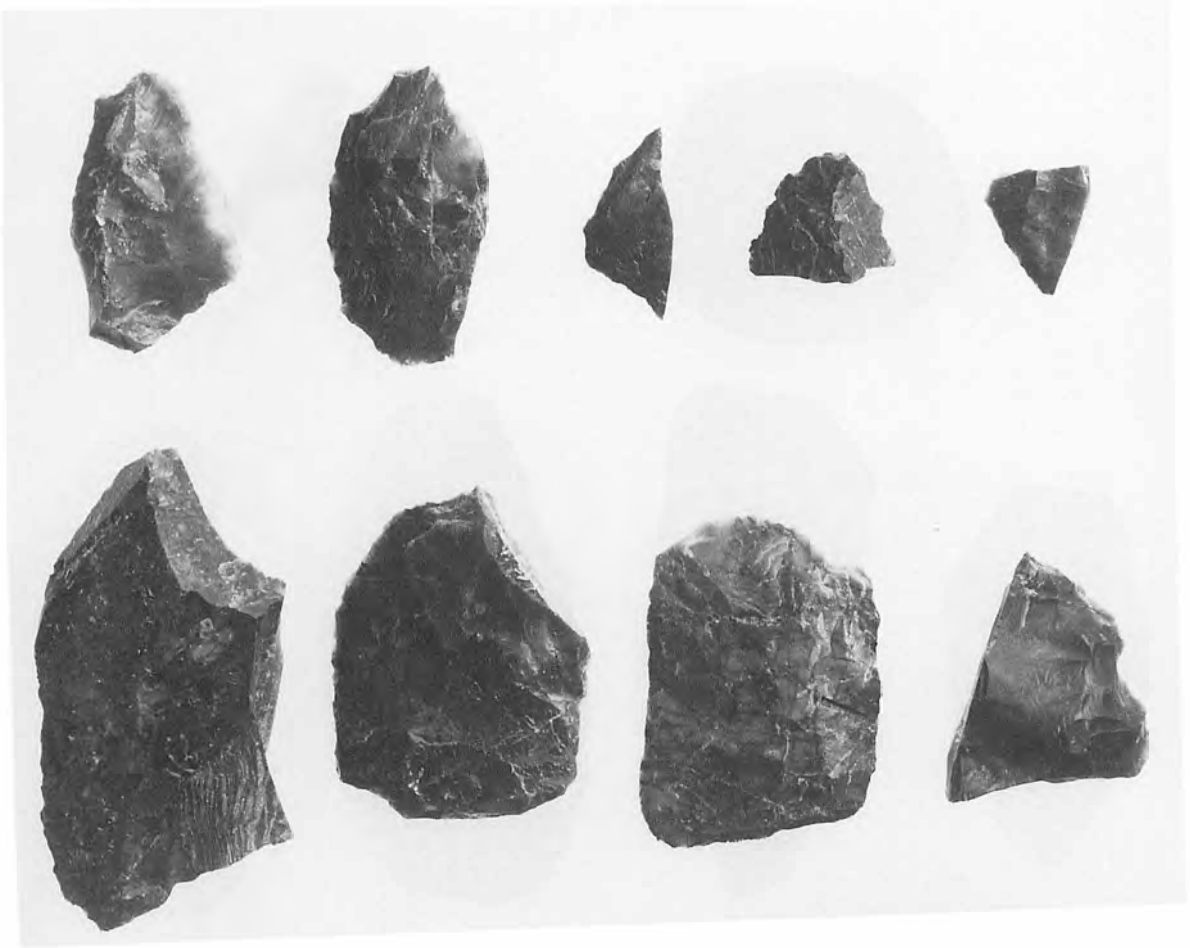
图版15



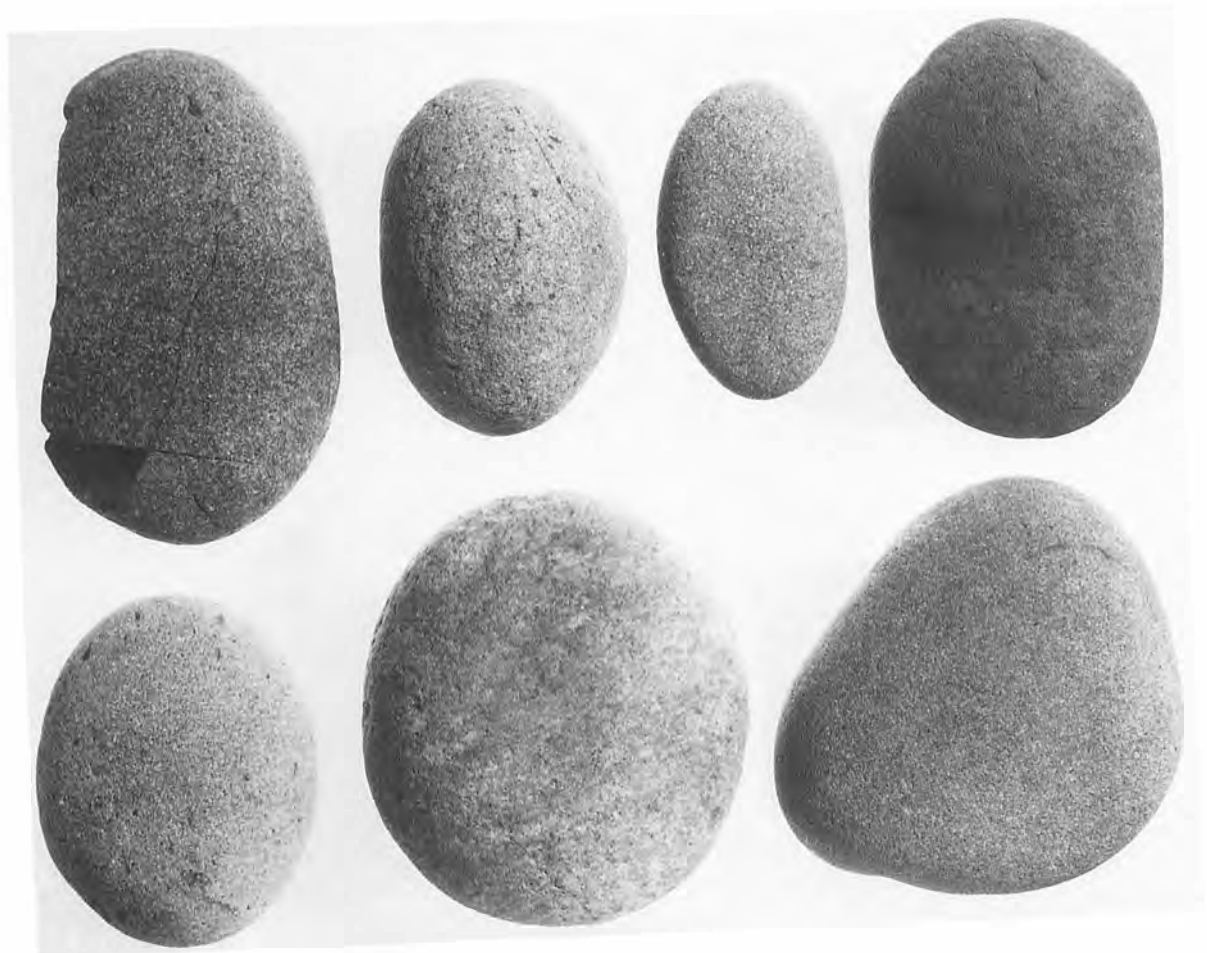
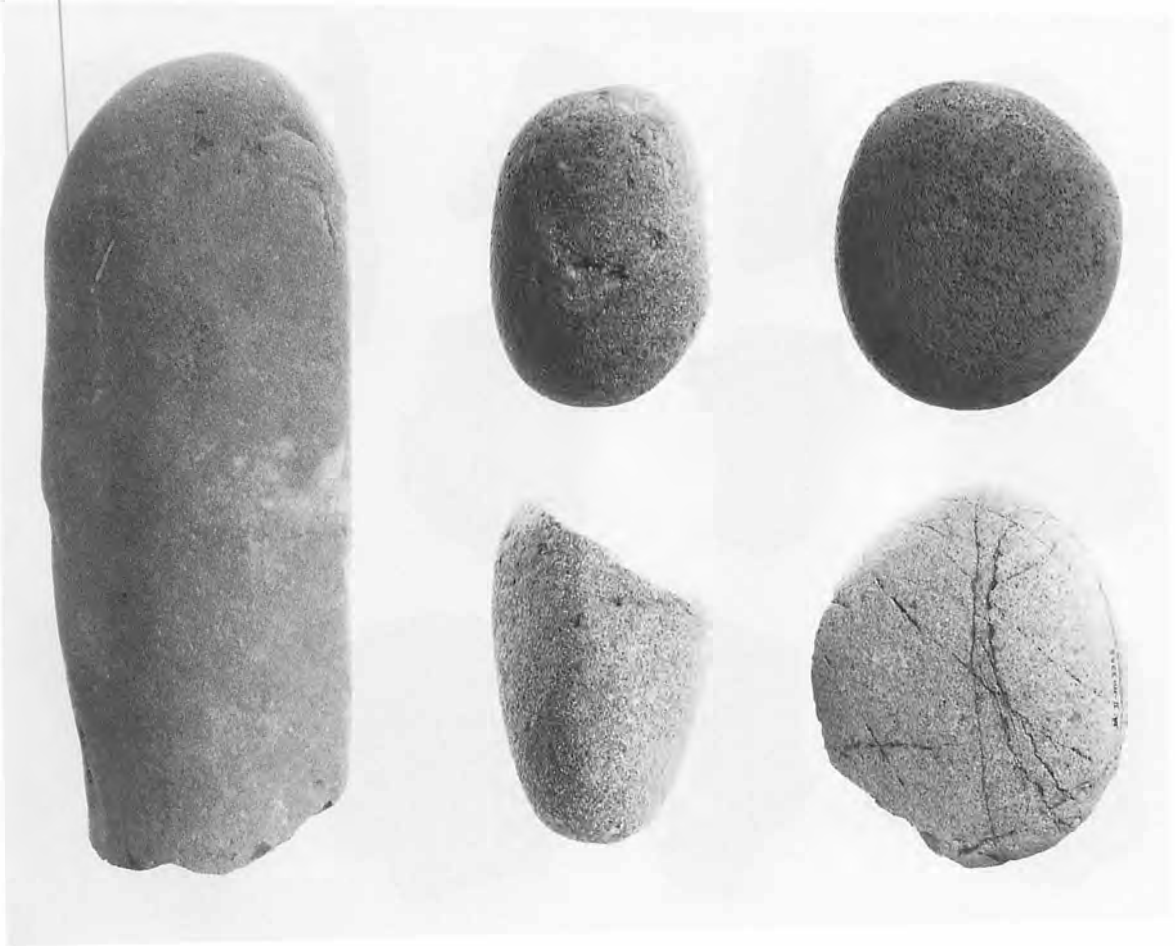


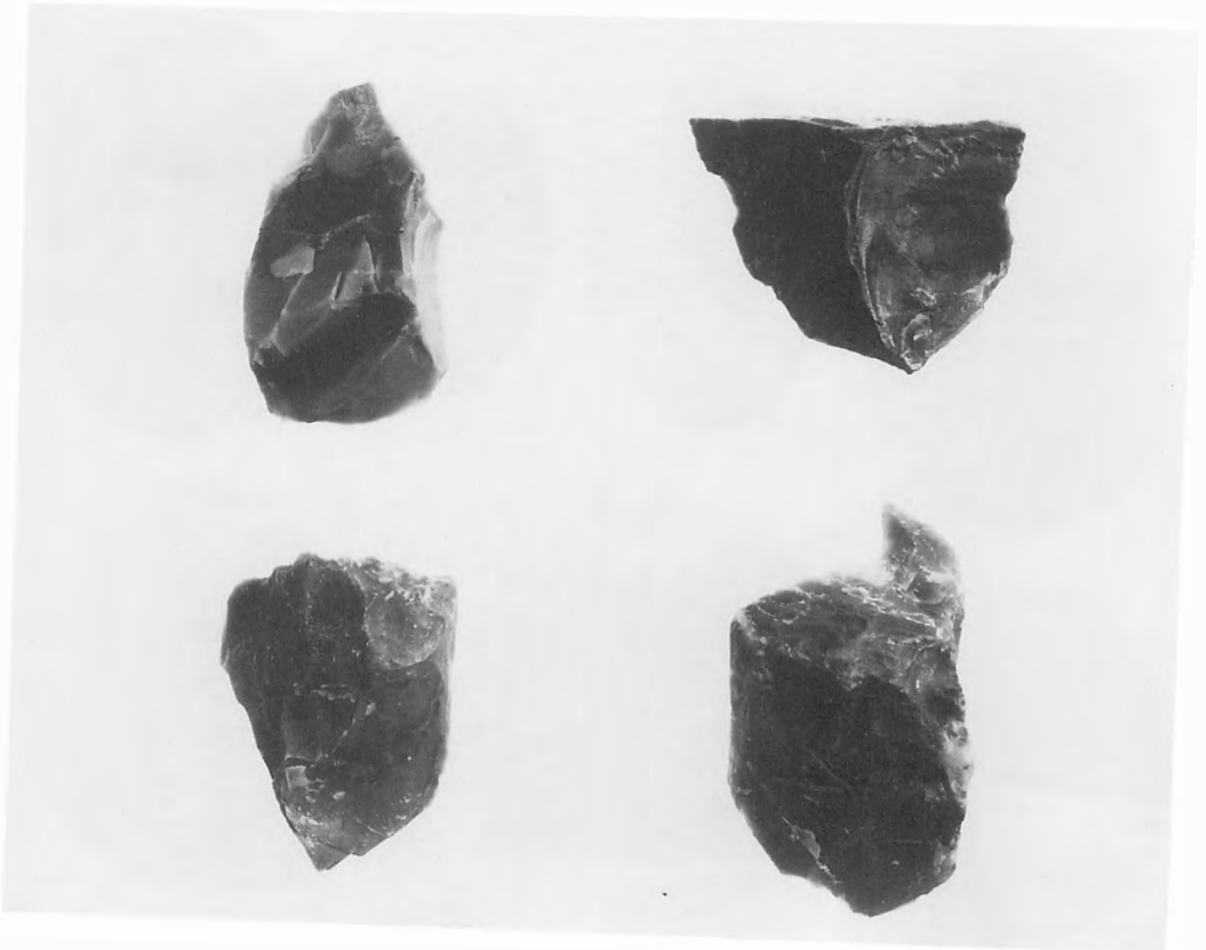
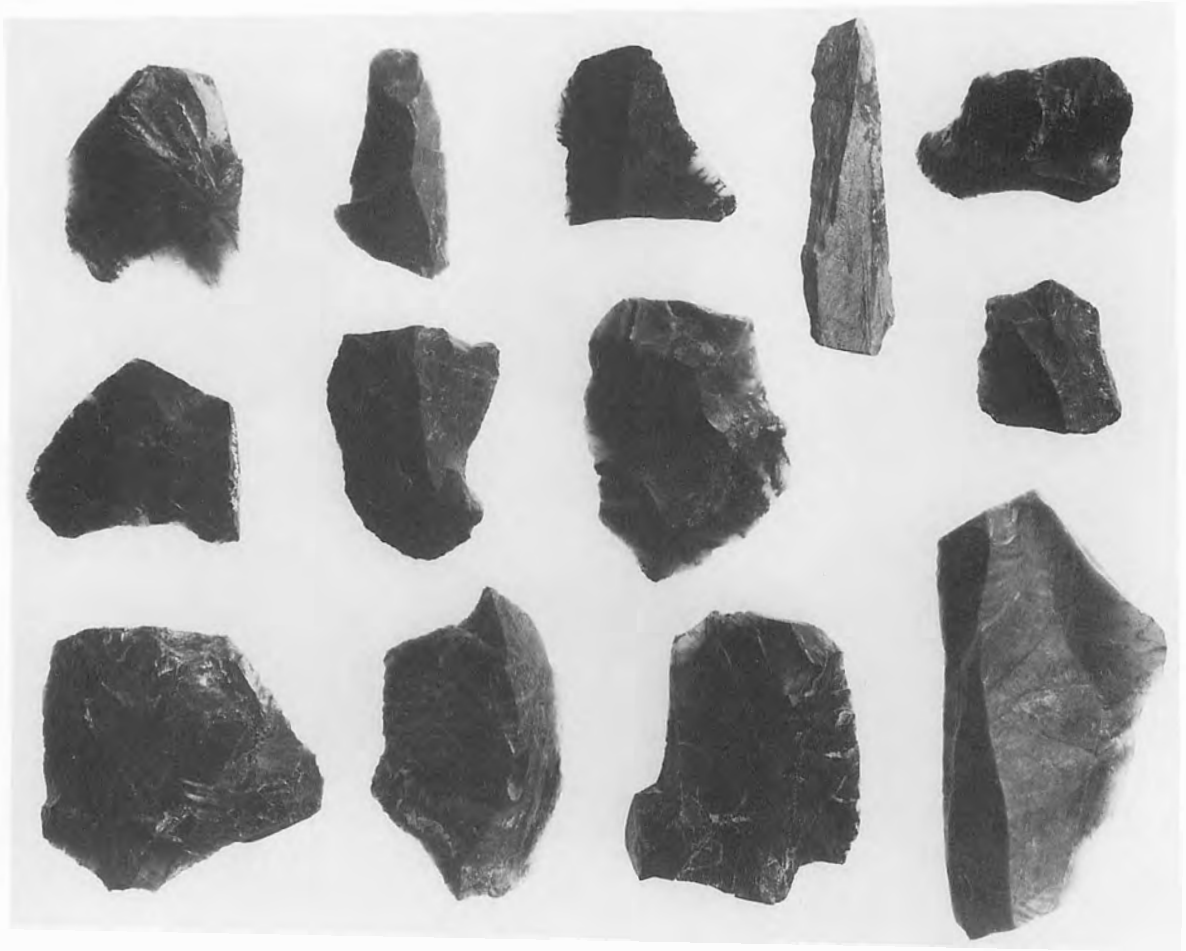
图版17











熊本県文化財調査報告 第119集

城・馬場遺跡第2地点

平成3年3月31日

編集発行 **熊本県教育委員会**

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 **熊本県印刷センター**

〒862 熊本市鹿埴瀬496-1

02 教委 教文

② 007

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 119 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：城馬場遺跡 第 2 地点

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日